究

平成 24 年度

研究紀要 37

大館市教育研究会

目　　次

「未来ゆきの切符」 …… 大館市教育委員会　教育長　高橋　善之　1
「体験によって人は成長する」 …… 大館市教育研究会　会　長　河田　和徳　1
市教研共通主題と市教研の運営 …… 2

Ⅰ　小学校部会
国　語 …… 3　　社　会 …… 9
算　数 …… 11　　理　科 …… 17
生　活 …… 19　　音　楽 …… 21
図画工作 …… 23　　家　庭 …… 25
体　育 …… 27　　道　徳 …… 29
特別活動 …… 31　　総　合 …… 33
外国語活動 …… 35

Ⅱ　中学校部会
国　語 …… 37　　社　会 …… 39
数　学 …… 41　　理　科 …… 43
音　楽 …… 45　　美　術 …… 47
保健体育 …… 49　　技術・家庭 …… 51
英　語 …… 53　　道　徳 …… 55
特別活動 …… 57　　総　合 …… 59

Ⅲ　小・中合同部会
特別支援 …… 61　　保　健 …… 63
事　務 …… 65　　栄　養 …… 66

Ⅳ 小・中連携部会
第一中学区 …… 68　　第二中学区 …… 69
下川沿中学区 …… 70　　南中学区 …… 71
成章中学区 …… 72　　花岡中学区 …… 73
矢立中学区 …… 74　　東中学区 …… 75
比内中学区 …… 76　　田代中学区 …… 77

平成24年度の運営を振り返って …… 78

市教研役員一覧 …… 79

運営機構図 …… 81

表紙絵「息をこらして糸通し」　城南小学校　５年　長崎　凜太郎

「未来ゆきの切符」

大館市教育委員会　教育長　　高　橋　善　之

７月のこと，子どもたちへの砂金採り体験学習も無事終わり，ほっとしてベンチに座っていた私の横にちょこんと腰掛けたのは，小学校２年生の「未来（みらい）さん」。その日，最も多くの砂金を見つけた女の子。「ねえ，あなたは，ほんとは何をしている人なの？」・・・いきなりの質問に絶句した。小学校２年生では，教育委員会などわからないだろうし，学校の先生という答えも的確ではない。答えに窮しながら，考えさせられた・・・「本当に，自分はいったい何をしているのか」と。

今年４月の東北地区教育長会にて，釜石市の川崎教育長と懇意になり，一枚の切符をいただいた。震災から１年が経ち，いまだ復旧の目途が立たない三陸鉄道を支援するための支援切符とのこと。日付は「24. 3. 11」，区間は「釜石から復興未来ゆき」，そして「諦めないかぎり有効　300円」と記されている。４千枚売り出され，瞬く間に売り切れた切符の一枚だという。大館に持ち帰りさっそく校長会等で紹介した。第一中学校の菊地校長は，川崎教育長を通して特別に増刷していただき，生徒と職員全員に配布した。後日，「校長先生，私なんかでも，諦めないかぎり有効なんですか？」と，わざわざ尋ねる女子生徒もいたという。

大館は，「ふるさとキャリア教育」を根幹として教育を推進している。「ふるさとに根ざして，大館の未来を切り拓く人財」を育成するためである。したがって，私が為すべき使命は，一人一人の子どもたちに「ふるさと大館から未来ゆき　諦めないかぎり有効」の切符を渡してあげること。それが「未来（みらい）さん」からの問いに対する答えになるのかな，と思っている。

「体験によって人は成長する」

大館市教育研究会　会　長　　河　田　和　徳

市教研の共通主題は「豊かな人間性をもち，自ら学び，自ら考えるたくましい児童生徒の育成」です。自ら考える力を身に付けるには，自分で考えるための基（もと）をもっていなければいけません。それは，体験によって培われます。体験した事柄は脳の各引き出しに蓄積されていき，ある事について自分の考えが必要な時に，それに関連した引き出しから取り出して，自ら考えることができるようになります。ですから，体験をできるだけ多くさせ，自ら考えることができる基を増やしてやることが大切です。

私は，高校２年生の夏休みに，友人と２人で自転車旅行をし，９日間で１，２００キロあまりを走破しました。４０年も前のことですが，この体験を通して学んだ事柄は，今も日常生活に生きて働いており，貴重な経験となって役立っています。全体プランを立て，自己の能力を発揮しながら，課題に向かい，その中でいろいろな人間と関わって目標を達成したことで，自ら学び，自ら考えて行動するというキャリアが身に付いたように思います。

第２回総合研究会では，考える基を与えるために体験的な活動を準備し，その中に言語活動を取り入れながら，課題達成を目指す授業が多く見られました。この形は，日々の授業で育むキャリア教育にもつながっており，課題対応能力・人間関係形成能力等を鍛えることにもなります。今後も授業における体験的な活動の日常化で，自ら考えるたくましい児童生徒を育んでいきましょう。

平成24年度　大館市教育研究会の運営

1　共通主題

(1) 主題名　「豊かな人間性をもち，自ら学び，自ら考えるたくましい児童生徒の育成」

(2) 主題設定の理由

これまで本研究会は，豊かな人間性の育成と確かな学力の定着を柱に据え，授業づくりに焦点をあてた教科等領域での実践を進めてきた。また，小・中合同研究部会では，日常の職務を通して児童生徒の健やかな育成につながる取組を行ってきた。

昨年度から，３年間にわたる市教育委員会第７次学力向上対策の下，完全実施を視野に入れた各部の授業研究の一層の充実と小・中連携の推進の２点を重点に運営している。

その結果，各校の全教職員による指導体制の充実と各教職員の指導法や評価，教材教具の工夫などにより，児童生徒の学習への意欲や学力の着実な向上が見られるようになってきた。しかし，小・中連携を通した学力向上への取組については，連携の重要性への認識は高まってきてはいるものの，まだ十分な取組とは言えない。小・中学校や学校間での温度差，小・中交流授業の難しさが課題として残された。また，本研究会研究紀要「究」にまとめられたように，各部会における精力的な取組で成果を上げつつあるが，各校の学力の現状や児童生徒の「生きる力」の育成が課題として残されており，課題解決に向けた実践研究を継続することが求められている。

今年度も，第７次学力向上対策のもと「子どもと教職員の力を１割アップしよう」のスローガンを継続し，「確かな学力」を育てることと「確かな授業力」を身に付け高めることを目標とし，学校や教職員が明確な目標設定をし実践することで，児童生徒の健やかな成長と学力保障を目指すものである。

このようなことから，今年度も本主題を設定し，新学習指導要領の趣旨及び大館市の施策に沿った実践を行うことで，大館市の教育の一層の充実を図っていきたいと考える。

2　運営方針

新指導要領完全実施を視野に入れた各部の授業研究の一層の充実と小・中連携の推進の２点を重点として運営していきたい。

(1) 各部会が「取組の視点」をもとに実践交流を行い，会員の授業力向上と各校の学力向上に努める。

取組の視点

１「確かな学力」育成のための取組
- ○基礎的・基本的な知識・技能の育成
- ○知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成
- ○学習意欲の喚起

２「確かな授業力」への取組
- ○生徒指導の機能を生かした学習指導
- ○積極的な研修

(2)　小・中連携を積極的に行い，学力向上を含めた各中学校区の課題解決につながる交流実践，協議を行う。

3　事業計画

４月　５日（木）会員名簿提出（各校）
４月１２日（木）第１回総合研究会　（文化会館・中央公民館・城南小）
（13:30 教科外部会，小・中合同部会　14:30 総会　15:30 教科部会）
５月１０日（木）第１回運営委員会　（午後　城南小学校）
第１回研究紀要編集委員会（運営委員会終了後）
１０月２６日（金）中学校第２回総合研究会　（午後）
１０月３１日（水）小学校第２回総合研究会　（午後）
１１月　６日（火）教科外「道徳」・合同部会「学校栄養・事務」第２回総合研究会（午後）
１１月　７日（水）教科外「総合」「外国語」・合同部会「学校保健」第２回総合研究会（午後）
１１月　８日（木）教科外「特別活動」・合同部会「特別支援」第２回総合研究会（午後）
１１月２１日（水）代表世話人会　（午後　城南小学校）
１２月２７日（木）第２回研究紀要編集委員会（午後　城南小学校）
２月１４日（木）第２回運営委員会　（午後　城南小学校）※研究紀要「究」発行

Ⅰ　小学校部会

国 語 科 部 会(低学年の部)

研究主題　**確かな言葉の力を身に付け，豊かに表現し合う子どもの育成**
～単元を貫く言語活動を通した指導のあり方～

１　主題について

豊かな表現力を身に付けるためには確かな思考力(論理的思考)の深まりが必要であると考え，このテーマを設定した。単元を貫く言語活動を通した指導のあり方を探ることによって，思考力を深める学び合いはどうあればよいかに焦点を当て，授業研究に取り組むことにした。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題確認・年間計画作成	６月２９日	交流授業(城西小学校)
９月２５日	指導案検討会(城西小学校)	１０月３１日	第２回総合研究会 授業研究会(城西小学校)

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　平成２４年１０月３１日(水)　　・会　場　城西小学校
・単元名　２年「ふたりはともだち」シリーズを読んで，好きなお話を紹介しよう。
・授業者　雄鹿　成子

①　授業者から

・単元を貫く言語活動を意識し，より効果的に行うために，単元構成を工夫し，音読劇ではなく並行読書の単元として組み替えて授業を設定した。(スイミーも同様に行った。)「読みのスキル」に従って，子どもたちに全１９話を読ませている途中である。並行読書を通して登場人物の人柄もとらえさせたいと考えている。
・今日は，なぜそのお話が好きなのかという理由を発表させた。ただし，子どもがシートに書いた理由は３つあるため，教師が意図した理由ではない方を発表した子どももいた。そのため，お話が好きな理由とお話の内容がかみ合っていない点があった。
・発表したいという意欲を引き出すように低位の子どもにも発言させた。一方で，登場人物の人柄に触れていたり，自分の課題をもっていたりした子どもの意見を引き出せなかった。

②　協　議

・教師の受容的な口調や態度が，子どもたちの発表したい，話をきいてもらいたいという意欲を引き出していた。ただ，子どもたちの発表を子どもたち同士で受け止め，話し合う活動があればなおよかった。
・感想交流させるための具体的な手立てや子どもたちのゴールの設定を明確にしたい。友達の発表を聞いて読みたくなった理由に「登場人物の人柄」「自分が読んだお話との共通点や相違点」等を盛り込みたい。
・感想交流時の教師の発問を工夫したい。今日は「友達と似ているところは？」「読み比べて似ているところは？」だった。「似ている」という言葉が続き，子どもに迷いが見られた。
・並行読書という単元を貫く言語活動を入れているのは，とてもよいと思う。低学年の場合は，一つのお話を(ここでは「お手紙」)軸として，比較検証するとより効果的になる。

【ペアで好きなお話を紹介し合う様子】

・並行読書では，子どもたちの読むスピードが異なるが，たとえ全部読破した子どもであっても，友達の紹介を聞くことによって，新たな読書意欲がかき立てられる。その点を意識しながら，感想交流の場面を指導していきたい。
・全員に発表させたいという教師の願いは理解できるが，振り返りの場面では，本時のねらいに迫る「登場人物の人柄に触れた」「自分の課題をもった読書への意欲」について，書いている子どもを指名発表させ，次時へつなげたかった。

⑵　テーマ研究

部会テーマを受け，単元を貫く言語活動の実践事例についてグループで紹介し合った。その実践例として，音読劇，心情グラフ，日記，図鑑，クイズ等が挙げられ，誰かに紹介するという活動も合わせて行うとより有効であるという報告がなされた。また，どのような言語活動であっても，単元を通して付けたい力を明確に見据え，常に子どもの姿と照らし合わせながら進めていくことが大事であると確認し合うことができた。

⑶　指導助言(山口　史人　指導主事)

【授業について】
・教師の生徒指導的な配慮が行き届いた学級であり，子どもたちが安心感をもって，自分の思いを述べることができていたのが，すばらしいと感じた。
・子どもが理解しやすいように，学習活動の流れを提示したり，指示したりしていた。また，「交流」等の用語の共通理解もしっかりとおさえていた。
・「同じ作品でも，人によって受け止め方が異なる。」という子どもたちの発見や気付きこそが，読書の楽しみを味わっていたことに他ならない。それを友達と伝え合える感想交流の活動は有効だった。
・全体で自分が好きなお話を紹介し合う活動では，教師が読んで教師の意図(流れ)にのせてしまった。板書構成を視覚的に工夫して，子ども同士の意見を引き出し，補い合えるようにしたい。
・本時の学習を振り返る場面では，活動を振り返った子どもがいた。めあてに対する振り返り(まとめ)としたい。指導案の書き方もあると思うが，本時の目標とまとめの整合性「友達の紹介を聞いて本を選ぶことができる。」をしっかりとおさえ，本時の評価(どの指導事項をねらったのか)を頭に入れて行うようにする。

【テーマについて】
・参考になる単元構成であり，「好きなお話を紹介する。」という単元を貫く言語活動がよい。そこから，「自分と重ねて」「他の話と比べて」という指導事項エ，オ，カにつながっていく。
・「自分のお気に入りを探す楽しさ」が導入にあった。そこから好きなお話を「想像を広げて読む」すなわち「主体的に読む」という関心の高まりを最後までもち続けることができる。
・シリーズ読み(並行読み)では，①たくさんの本を選ぶために読む　②読書量の確保の２点が意識される。これに「比べ読み」がプラスされて子どもの中に広がりや深まりが生まれていく。
・ねらいはよかったが，読みたくなった理由を明らかにできるような工夫をしたい。お話の紹介を通じて，自分の変容が確認できるようなねらいの内容にしたい。自分の疑問を解決する課題から，「問いを発する子ども」へとつなげていきたい。

４　成果と課題

⑴　成　果
・単元を貫く言語活動を通した指導や手立てについて活発な話し合いがなされた研修だった。
・言語活動の充実のための５つのポイントが示され，マトリックス型の年間指導計画等について研修を深めることができた。

⑵　課　題
・単元を貫く言語活動を漠然と選択するのではなく，子どもの主体的な意識を生かし，単元で付けたい力を見極め，単元を貫く言語活動(三次から)を考えることが必要である。

国 語 科 部 会 （中学年の部）

研究主題　**確かな言葉の力を身に付け，豊かに表現し合う子どもの育成**
～思考を深める学び合いを通して～

１　主題について

自分の思いや考えを適切な言葉で表現し，互いに表現し合うことができる力を育てたいと考え，本主題を設定した。思考を深めるための学び合いはどうあればよいのかに重点を置き，授業研究に取り組むことにした。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	１０月３１日	第２回総合研究会 授業研究会（川口小学校）
８月２２日	指導案検討会（川口小学校）		

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１０月３１日（水）　　・会　場　　川口小学校
・単元名　　３年　食べ物はかせになろう「すがたをかえる大豆」「食べ物のひみつを教えます」
・授業者　　安保　千春

①　授業者から

・本時は，学習形態をペアから全体に変えた。ペアでの話合いはまだ十分にできていない。
・発問があまりよくなかった。つかむ段階では，内容の工夫については分かっていたが，説明の仕方について理解が十分でなかった。また，主発問で「筆者の説明の工夫」を見つけるという強調がたりなかった。
・文章全体に目を向けさせるために文章構成図を掲示したが，十分に生かせなかった。

②　協　議

〈視点　ペアでの話合いは，説明文の書き方の工夫を見つけ出すために有効であったか。〉

・子どもたちは，何を書けばよいのか迷っていたので，例があるとよかった。掲示資料の黄色いふきだしがヒントになったのではないか。短冊を先に使うとよかったと思う。
・「ひみつブック」の参考にするのだということで，めあての言葉を逆にしてもよかった。
・「順序」「まとまり」などの視点があればよかった。ペアになったときに話せなかったので，「内容の工夫」と混同していたのではないか。
・前時までの学習で分かったことの振り返りで時間がかなりかかり，盛りだくさんだった。今日の評価は「根拠を明確に」なので，絞っていけばよかった。
・ペアの話合いは，自分の書いたことを説明するだけでなく，互いに話合うことによって，新しい考えができるためであるということを，子どもが分かっていれば効果的である。
・ペアでノートを見せ合い，書き加えていた。続けていけばよくなっていくと思う。
・つかむ段階のリレー発言は活発になりよいが，大事な場面は教師が見取って発言させたい。
・「イルカのねむり方」と違っていた大事なところを掲示すると説明の工夫のヒントになる。
・実践の紹介～ゴールを「ひみつブックを作る」ことにし，単元を貫く言語活動を大切にし

ている。「説明名人」になるための「技」を全体の中からを見つけるのはたいへんなので，１時間に１つ見つけるようにし，全部の工夫を６～７時間かけて見つけるようにしている。
・子どもたちから出た「説明文を書くための工夫」は，一つ一つ検証が必要ではないか。
・本時，本文での検証はできていなかったが，実態からはよくがんばっていた。授業者は，子どもたちに大豆を生のもの，ゆでたもの，粉にひいてきな粉にしたものをさわらせていた。これまでの授業で本文と結びつけているところができていたと思う。
・「書き方の工夫」は出ていたが，ノートに書いていない子どもたちもいた。書く時間もあれば，よりよい「ひみつブック」につながるのではないか。
・ある子どものノートに，「わくわく感をもたせる書き方」とあった。時間がなかったので工夫として検証できなかったが，これまで日々，集中して取り組んでいたことが伺えた。
・ペアトークが上手にできていたところでは，教科書を使って「わくわく感」を説明していた。時間が確保されていれば，子どもから出て確認できたのではないか。

⑵　テーマ研究
テーマを受け，各校の実践を紹介したり，意見を交換したりした。

⑶　指導助言（大館市立南小学校　今泉　静子　校長）
・リレー発言は，自分の言葉でどんどんつなげていて，日頃から鍛えられていた。
・これまでの取り組み，積み重ねがしっかりできていた。教室環境や子どもたちのノートなどから，毎時間どの子がどこまでできているかをつかみながら取り組んでいると分かった。
・本時は，次の書く活動につながる読みのまとめの時間で，たくさんの情報をどう取り出すのか，何を求めているのか，指示の仕方を大切にしたいところだった。また，本時の評価の「根拠を明確に」と結びつくように大事にしたい場面である。
・単元の目標に「話すこと・聞くこと」も入っていた。 話合い活動を大切にしたいと考えているようなので，単元指導計画の中に「話すこと・聞くこと」も観点に入れてもよかった。本時の評価規準を二つにしてもよかったのではないか。
・感想発表の中に「説明文の書き方が分かった。」とあったので，これまでの積み重ねが感じられた。単元を貫く言語活動がされており，力をつけてきている。
・豊かな言語活動は，すべての教科の基本である。文部科学省の「言語活動の事例集」には，各教科の事例があり，参考になる冊子である。国語をもとに他教科でも取り組んでほしい。
・川口小の３年生の「ひみつブック」を読んでみたい。今後の授業の参考にしていきたい。
・４５分の授業の中で終わりはどうあればよいのか，単位時間が実りあるものになるためにラストから考え，取り組んでいく方法もある。

４　成果と課題

⑴　成　果
・ペアでの効果的な話合いのさせ方，単元を貫く言語活動の設定の仕方，単位時間のねらいを達成させるための手立てや支援について協議や実践紹介ができた。

⑵　課　題
・文章の中から根拠を明らかにしてどのように話合いをさせるのか，本時のねらいを達成するために，ゴールから手立てを考えることなどの工夫が必要である。

【ペアで話し合う様子】

国 語 科 部 会 （高学年の部）

研究主題　**確かな言葉の力を身に付け，豊かに表現し合う子どもの育成**
～思考を深める学び合いを通して～

１　主題について

自分の思いや考えを適切に表現し，互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う子どもを育てる指導の在り方を研究するため，昨年度に引き続き本主題を設定した。確かな言葉の力を身に付けさせるための指導，思考を深めるための単元構成や学習過程等に重点を置き，授業研究に取り組むこととした。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	１０月３１日	第２回総合研究会 授業研究会（東館小学校）
１０月３日	指導案検討会（東館小学校）		

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１０月３１日（水）　　・会　場　　東館小学校
・単元名　　５年　説明のしかたについて考えよう「天気を予想する」
・授業者　　成田　正子

①　授業者から

・教科書を使わず，教材を「問い」ごとに構成し直したプリントを用いた。
・教材文に対する児童の初発の感想では，初めて知る内容であるということが多かった。また，慣れない言葉が多く難しいという感想もあった。
・子どもの実態から，資料を用いていない問いについて考える活動を，本時はカットした。
・発問がうまくいかず，子どもたちの発言をうまく引き出せなかった。豊かに表現させるため，どのような発問の工夫があるだろうか。

②　協　議

〈児童の考えを深め，思考力を高めるための効果的な学習活動と発問の工夫〉

・子どもたちは，学習課題の「意図」という言葉にひっかかっていた。前時までの読みで一つ一つの言葉の意味を十分理解させることが必要。
・サイドラインや矢印を引く活動は文と資料を関連付けられ，よかった。言葉と資料をしっかり結び付けると，さらに文の理解につながる。
・資料は問いごとのシートになっていたが，教科書と違って白黒だったので分かりにくかった。
・ねらいに「説明することができる」とあるが，子どものどのような姿であればよかったか。

【資料を用いた筆者の意図を考える】

〈単元で付けたい力に合わせた言語活動と単元構成の工夫〉

・グループでの話し合い，学び合いの活動があれば子ども同士で考えを深められた。

・ノートやシートを活用し，思考の足跡を残すとよい。

・説明文で表現された内容を子どもが理解できるように単元構成を工夫するとよい。

⑵　指導助言（小林　寿　主任指導主事）

・ワークショップ型の協議が今日の成果であった。深まりのある協議であった。

・今日の授業は，川を渡らせる時，浅瀬の部分をケガをさせないように渡らせ，対岸に辿り着かせたような授業であった。子どもたちはもっと力がある。それを引き出すために時には深みに落とし，自分でもがき苦しんで辿り着けるような授業にしたい。

・教師の一問対子どもの一答の授業に終始してしまった。グループに任せ，練り合いや学び合いを教師が仕組む方法もあった。

・本時の読み取りの集約は「分かりやすく伝える」こと。「よりいっそう分かってもらうため」の「よりいっそう」をもっと追究することが必要。この説明文では，図，表，グラフ，写真が出てくる。これらをまとめて「資料」というが，使うねらいや効果が違う。文章に書かれていることを裏付けるものがグラフや表で，文章に書かれていないこと（表現しにくいもの）を補うものが図や写真である。このように教師が分析し，それぞれの資料の効果について深く追究させることで読みに深まりが出てくる。

・単元の目標とする力を付けるために言語活動を設定すること。例えば，単元を貫く言語活動の例として，「図，表，グラフを用いて，説得力のある文を書こう」と設定する。すると本教材文は，「図，写真，表，グラフがどう効果的に使われているか，分析的・目的的に読む」という位置付けになる。その際，「文章構成や要旨を読み取る力を付ける」活動は別の教材で行うこととする。こうして年間を通してバランス良く読みの力が付くよう年間指導計画を作成するとよい。

・グループごとに一つの資料を徹底的に調べさせ，他のグループに分かりやすく説明させる方法もある。

・物語文や説明文は，教材をどう教えるかではなく，教材を通してどんな読みの力を付けるかという，分析的・目的的な手法で読ませることが必要である。

・子どもたちの言語の種類（語彙）を増やすことを担う教科が国語である。語彙の多い子どもは思考が深まる。豊かな表現や多様な考えは，語彙を増やさないと育たない。そのために読書活動を推進すること。人間性や豊かな情操を養うことにもつながる。

・単元を構想する際，「逆算の発想」という考え方もある。［ゴール(付けさせたい力)を決める→どんな言語活動で実現させるかを決める→学習課題（スタート）を決める］

4　成果と課題

⑴　成　果

・ワークショップ型グループ協議を取り入れたことで，協議内容に沿った成果と課題についての研修を深めることができた。

・単元構成の工夫や言語活動の位置付けの仕方について学ぶことができた。

⑵　課題

・身に付けさせたい力を明確にさせた上での単元構成や１時間の授業の組み立て方。

・単元を貫く言語活動の効果的な設定。

社 会 科 部 会

研究主題　**調べたことをもとに自分の見方や考え方を深め表現する力を高める指導**

1　主題について

今年度も,基礎的・基本的な知識，概念や技能の習得に努めるほか，思考力・判断力・表現力等を確実にはぐくむため，言語活動の充実を図り，社会参画に関する学習を重視することをねらいとして，本主題を設定した。

2　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	１０月３１日	第２回総合研究会 授業研究会（扇田小学校）
９月２７日	授業指導案　事前研究会 （扇田小学校）	１１月１３日	交流授業研究会 （上川沿小学校）

＊授業研の後，五十嵐校長先生による「八郎太郎と辰子姫の真実の物語」と称して，伝説と現存物との関係を紐解く興味深い講話をしていただいた。

3　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１０月３１日（水）　　・会　場　　扇田小学校

・単元名　　３年「農家の仕事～全国一の比内特産，とんぶりを有名にしよう」

・授業者　　橘　範広

①　授業者から

・自分たちが住んでいる比内町で作られているとんぶりが，全国一の生産量をあげていることを知り，ふるさとへの誇りをもたせたかった。

・見学から得た知識をもとに，「疑問→解決→努力や工夫」の理解につながっている。

・ゲストティーチャーを効果的に活用しようと計画したが，指導者側の意図をくんで丁寧な説明を心がけてくれた。

②　協　議　（ワークショップから）

〈視点１〉

＊ゲストテーチャー（以下ＧＴ）の活用のしかたは，本時のねらいに迫る上で効果的であったか。

・見学後の疑問を解決するための手だてとして，ＧＴの活用は大変良かった。しかし，児童の質問の精選や視点の吟味，質問時間の有効な活用などが課題であった。

・ＧＴとリアルタイムで話すことができる環境や担任との連携が良かった。ただ，質問が一問一答式になりがちだった。

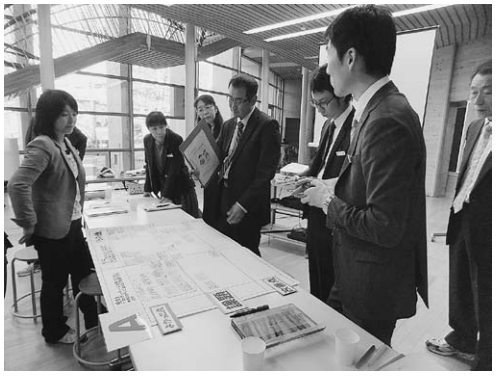
【グループでの交流】

・「全国一としての努力や工夫」が伝わるような，応答が欲しかった。ＧＴの説明の言葉も難しくわかりにくいものもあった。ＧＴとの打ち合わせの重要性を実感させられた。

〈視点２〉

＊グループでの話し合い（言語活動の充実の工夫）は，自分の見方や考え方を深めるために有効であったか。

・見学の内容を想起させるために，情報コーナーや見学の写真などの環境は効果的であったが，授業の中でもっと活用できると良かった。
・グループでの話し合いの有効性を考えたい。３年生としては「深める」より「報告」でよい。「聞いてまとめる」は３年生には高度ではなかったか。
・板書が丁寧で大変素晴らしい。発表の話形の提示も社会科の言語活動を充実させるためにも効果的であった。



【ワークショップ】

⑵　指導助言（多賀谷　雅人　指導主事）

①　本時の授業について

・見学後に発生した新たな疑問をＧＴで解決する活動が展開された。児童の課題追究の意欲が高まっており，質問した後にメモを取る子どもの姿があった。
・「調べて分かったことは三つです。」などの話形は思考を整理するために効果的であり，発表や話し合いの基礎となっていく。
・情報コーナーが充実しており，見学したことをすぐに想起できる環境作りであった。

②　本時の核となるもの

・工夫（行動）と努力（精神）を分けることは難しい。両方関連している事であり「こんなにたくさんの工夫をして，努力しているんだね。」とまとめた方がよい。
・見学に行く前に工夫を予想させること，予想を確かめに見学に行くこと，見学後に発見してきた工夫を分類・整理することが大切である。育苗・収穫・出荷の工夫など，生産の順番や，働く人や経営者の視点で，おいしく作る工夫，仕事が楽になる工夫などで分類・整理することもできる。児童が主体的に分類・整理する活動を仕組みたい。

③　単元について

・本単元は，５年生で学習する農業の学習とは違う。地域で働く人々のたくさんある仕事の種類の一つとして農家（生産と加工）の仕事を調べることが大切である。
・教科書の単元の配列は学習指導要領の並びと違うことを確認したい。「教科書を学習」から「教科書で学習」することが大切であり，地域素材の教材化を楽しんで行いたい。

４　成果と課題

⑴　成　果

・ 地域素材を積極的に活用したことは，今後の学習のあり方を再確認することができた。
・ ＧＴを活用することは，リアルタイムに児童の疑問を解決でき効果的であった。

⑵　課　題

・地域素材を活用した単元を構築する場合，ねらいに迫るための教材研究や最終的な目標をしっかり設定しなければならない。グループでの話合いを設定する場合，学年に応じて話合いの内容を精選する必要がある。

算 数 科 部 会 （低学年の部）

研究主題　豊かな学びを通して　確かな力をはぐくむ算数・数学教育

１　主題について

「第５１回秋田県算数数学教育研究（大館北秋田）大会」の大会主題を受け，今年度も引き続きこのテーマで取り組んでいくことにした。特に，豊かな学びの工夫や確かな力を身に付けさせるための評価について研究を進めていく。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	１０月３１日	第２回総合研究会 授業研究会（桂城小学校）
１０月　５日	指導案検討会（桂城小学校）		

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１０月３１日（水）　　・会　場　　桂城小学校

・単元名　　１年「どちらがながい」　　・授業者　　山本　慎子

①　授業者から

・児童にたくさんの考えを出させて考える力を育てたいと思い，本時は数学的な考え方で評価するところに取り組んだ。

・本時のような教材（Ｔの字の形）にしたのは，見ただけではどちらが長いのかが分かりにくく，児童が比べてみたいという意欲をもてるのではないかと考えたからである。

・児童はたくさんの考えをもっていたが，教師が紙テープを使って比べることへもっていきたいために無理なところがたくさんあった。たくさんの考えをどう集約すればよかったか教えてほしい。

・まとめの段階で教師が紙テープにこだわりまとめてしまったため，児童はしっくりいかなかったと思った。

②　協　議

・導入のところで，本時の教材の長さ比べをする時に，定規を使ってはいけない，折ってはいけない，はさみは使えないという約束があったが，それは児童の豊かな発想を打ち消してしまうことになるので，折ったり切ったりできないように教材を貼り付けるなど工夫するといいのではないか。

・全体で話し合う時に一人が話してもう一人が操作して発表していたが，レベルが高い。１年生から取り組んでいていいと思った。

・豊かな学びとは，学習したことが日々の生活に生かされること。本時の紙テープに長さを写し取るのは豊かな学びにつながる。いろいろなやり方はあるが，紙テープを出しこの紙テープを使って何かできないかと投げかけたらどうだっただろうか。

・豊かな学びに関して算数的活動はどれだけ充実していたのか。ねらいにつながる算数的活

動でなければ豊かな学びにならない。媒介物を用いて長さを写し取るよさに気付かせたい。
・本時の確認問題は，□（穴埋め）が多かった。１年生ではできるだけシンプルにしたい。
・本時の学習過程をみると，評価の観点が技能と数学的な考え方の２つになっていた。測ったら説明するという評価にしたらどうだったろうか。

【長さ比べに取り組む子どもたち】

⑵　テーマ研究
・「豊かな学びを通して確かな力をはぐくむ算数教育」の実践について４つのグループに分かれて情報交換をした。

⑶　指導助言（田崎　雅則　指導主事）
・前時までの復習での児童の発言が素晴らしかった。直接比較のときの測る物をまっすぐにする，端と端を合わせるなどがあり，前時までの押さえがしっかりしていた。
・教材については，まず提示の仕方に工夫が見られた。児童に少しずつ見せたことによって，途中から今までと違うという認識をもつことができた。
・今年度の県の教科の重点であるノートが意識され，しっかりと身に付いていた。
・本時の内容がどのくらい定着したかという確認問題や評価問題は大切である。よく習慣づけられていたので，確認問題が早くできた児童は自然に次の問題に取り組んでいた。
・本時は児童に直接比較ではなくて間接比較をしないといけないという必要性がどのくらいあったかどうか。児童から出た指で測るという任意単位を使う考えを他の児童にもやらせるとよかった。実際に指でやるとこれくらいかかるけど紙テープを使うと１回で終わることになる。考えたことを体験させながら紙テープを使っての間接比較のよさを感じるような展開にするとよかった。
・説明するとしても，算数の授業では「はじめに」「つぎに」などの接続語にはあまりこだわりすぎないようにして，話す内容自体を大切にする。
・発表して説明する時は，１年生の場合はその児童の机に集めて行うことも有効である。
・本時では横の長さを写し取って横に印を付けるだけの体験だった。縦の長さも写し取って比べることに取り組んでほしい。１年生は，全部体験するのが望ましい。
・関心・意欲・態度の評価は，他の３つの観点より少し長めのスパンで評価してほしい。２，３時間同じような活動が続く中で見てほしい。評価は，１時間では１つか２つの観点を意識しながら進めてほしい。

４　成果と課題

⑴　成　果
・間接比較の紙テープを使った長さを写し取る活動を児童にどう体験させ，よさを感じとらせると良いかを実践例を挙げながら話し合うことができた。
・１時間の中での確認問題への取組について各校の実践例を紹介し合い，今後の指導に生かせることを共有することができた。

⑵　課　題
・児童の発想を生かす教材や算数的活動を工夫し豊かな学びの充実を図っていきたい。
・低学年における数学的な考え方を見取るための活動や確認問題の在り方をさらに考えていきたい。

算 数 科 部 会 （中学年の部）

研究主題　**豊かな学びを通して確かな力をはぐくむ算数・数学教育**

１　主題について

「第５１回秋田県算数・数学教育研究（大館北秋田）大会」の大会主題を受け，今年度も引き続きこのテーマで研究を進めることにした。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	１０月３１日	第２回総合研究会 授業研究会（釈迦内小学校）
８月３１日	指導案検討会（釈迦内小学校）		

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１０月３１日（水）　　・会　場　　釈迦内小学校

・単元名　　４年「広さを調べよう」　　・授業者　　松岡　浩幸　　菅原　由衣子
佐々木　真紀子

①　授業者から

・習熟度別に３コースに分かれて学習を進めた。

・本時のねらいは，「長方形や正方形を作って複合図形の面積を計算で求めることができる。」（技能）である。

・複合図形を少しずつ見せることで長方形の面積の公式を活用できることに気付かせたかったが，気付かない子どもも多かった。

・複合図形を提示したとき，子どもから「欠けた形」という発言があった。その言葉を取り上げたら，「たしてひく」考えが出ただろう。

・友達の考えを説明したり子ども同士がやりとりしたりする中で，豊かな学びができるように心がけた。

・適用問題は，Ｂ問題を意識した出題にしたかった。適切な問題がなかなか見つからず，自分で作成したが，三角形の倍積問題は難しかったかもしれない。

②　協　議

・たくさんの考え方が出たが，発表者は考え方のポイントだけを述べて，ほかの子どもが説明していく形を取ったら，子ども同士のかかわりができたと思う。

・教師が数値にこだわっていたが，どう考えたかに重点を置いた方が考え方に結び付いただろう。

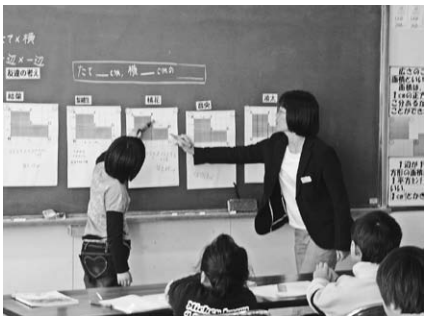
・マス目を作って数えている子どもや分割しすぎた子どもには，長さに目を向けさせたり式の多さに気付かせたりすることで，思考を高められたのではないか。

・考えを発表するとき，図だけを見せてどう考えたのかをみんなに考えさせることで全体の思考が深まっていった。

・まとめの仕方はそれぞれのコースで違っていたが，穴埋め形式にしたコースは子どもの実

態に合っていた。

・適用問題の三角形の問題は，三角形の底辺と高さが偶数なら移動する考え方が出たのではないかと思われるが，４年生には難しかった。５年生の三角形の面積の学習で扱うのが適当だろう。



【マンボウコース　考え方の説明】

⑵　テーマ研究

・「ねらいにせまるための課題」「学習の流れが分かる板書」「子どものノートと指導上の配慮」について，日々の実践を紹介し合った。

⑶　指導助言（佐藤　久生　山瀬小学校校長）

・「つかむ」段階の教師のアイデアがよく，子どもを引き付け，意欲付けとなっていた。また，どうやったら解決できるか，ポイントとなる言葉が板書されていたので，集中して最後まで学習に取り組んでいた。

・時間内に適用問題（評価問題）まで進めることができていた。

・協議主題にあるように，子ども同士のかかわりがあり，他の子どもの考えを説明したり，子どもの発言をキーワードとして取り上げたりしながら，学習活動が全体のものになるようにしていた。

・本時のねらいは，「～計算で求めることができる。（技能）」となっていたが，単元計画の主な評価規準にあるように，数学的な考え方をねらいとし，例えば，「複合図形の面積は分割や合成などにより長方形や正方形にして求められることを，図や式，言葉などを使って説明できる。」という内容ではどうか。

・本時のねらいを立てるときは，「何を」「何で」「どの程度」「何ができる」の要素で考えていくと，より明確になる。

・提示する図形の数値をどうするかは授業を左右するが，子どもたちから多様な考えが出されていたので，誰がどの考え方をしたか分類・整理しながら説明して，より適切（簡便）な求め方へと目を向けさせる方法など工夫してみてはどうか。

・「中位・下位コース」は，子どもへ手をかけすぎてしまいがちになるが，子ども同士で解決できる工夫をし，高め合っていけるようにしたい。

・本時のまとめの文言については，教科書の言葉そのままでなくても，用語など大事な言葉がしっかり押さえられていれば，子どもの発言を大事にした表現でよいと思う。

４　成果と課題

⑴　成　果

・自分の考えを言葉や図，あるいは生活場面に置き換えて説明できるなど，子どもたちの交流を意識した授業の組み立て方について話し合うことができた。

⑵　課　題

・考えを発表させる場面で，どの考えを全体の場で取り上げるか，また，どのように説明させるかが，１時間のねらいの達成に大きくかかわってくる。

・４年生は，自分のノートを作るという意識を育てていく段階だろう。分かりやすいノート，気付きやポイントとなる言葉などを書き込むノート作りを指導していきたい。

算 数 科 部 会(高学年の部)

研究主題　　**豊かな学びを通して確かな力をはぐくむ算数・数学教育**

１　主題について

今年度も昨年に引き続き，秋田県算数・数学研究協議大会大館北秋田大会の主題を引き継いで研究を続けていく意味で，本テーマを設定した。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	１０月３１日	第２回総合研究会 授業研研究会(上川沿小学校)
８月２０日	指導案検討会(上川沿小学校)		

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１０月３１日(水)　　・会　場　　上川沿小学校

・単元名　　６年「比例をくわしく調べよう」　　・授業者　　庄司静香　貝塚友佳子

①　授業者から

・求める画用紙の枚数を３００枚から５００枚に増やしたのは,難儀さを実感させることで,比例を活用することのよさに気付かせたかったからである。

・導入で，いかにして見通しや課題意識を高められるかに留意して授業構成を考えた。

・比例の事象かどうかを確認せずに進めたのは，既習を基に比例の関係にある二つの数量を見いだす力を育てたかったからである。代わりに，変数ｘとｙ(枚数と重さ)を強調した。

・評価問題の在り方についていろいろと検討しながら進めている。説明タイプ，穴埋め式などねらいに応じて工夫している。

②　協　議

・児童にとって，とても身近に感じられる投げかけであった。児童は１００枚を実際に数えていることで，難儀さが分かっている。５００枚に「ええっ！」という反応があったことは，その後の学習活動の意欲につながっていた。

・児童は実生活の中で比例の事象か，反比例の事象なのか分からずに生活していることの方が多い。比例を明らかにせずに進め，児童から比例しているという言葉を引き出したのはよかった。

・自力解決の段階で比例の表を活用している子どもが少ないのは，比例しているという事実を全体で確認していないからではないか。比例であることを確認することで，比例の性質を用いた自力解決がスムーズにいったのではないか。

・授業を４５分におさめるために，すぐに比例だということを確認してもよかった。そうすることで，すぐに比例の性質を活用して求めていたかもしれない。

・１０枚‐１１０ｇ，２０枚‐２２０ｇが黒板に掲示され，ヒントコーナーの表には３０枚‐３３０ｇが提示されていたが，５００枚の重さを求めるのに，３０枚は不自然だと感じた。出すなら５０枚が妥当ではないだろうか。黒板に３０枚を出さなかったのは，考えさせることにつながった。

・机間支援の際に「比例の考えを使ったんだね。」などと，わざと周囲に聞こえるような教師のつぶやきをヒントにさせてもよかった。
・比例の表は活用していないが，１枚－１１ｇ，１００枚－１１００ｇという数値がノートに書かれていた。比例を理解し，比例を活用している児童の姿である。
・低位の子が納得する場面がほしい。黒板に情報がありすぎて，消化しきれない子もいた。友だちの考えを用いるなどして，考えてみる時間を保障したい。
・評価場面が２回ある。→思考場面のみで評価するとＣ評価になる子がいる。そこで，評価問題でも評価場面を設けることにした。

【自力解決の時間に考える子どもたち】

【ＴＴによる効果的な提示】

⑵　テーマ研究
・各校のノート指導の工夫について情報交換を行った。

⑶　指導助言(山口　誉　指導主事)
・導入段階で児童の心を引き付け，課題解決の必要性を感じさせる授業であった。
・自力解決の場をしっかり保障している。自力解決の場で，ノートの効果的活用ができている。ノート指導は学校として組織で対応していくものであり，小・中連携を意識して進めてほしい。
・提示機器の活用方法がよい。映像はその場に残らないが，その分の板書をＴ２が書いて，随時確認できる状態になっている。児童の言葉で板書をまとめ上げる工夫がほしい。
・評価問題を４５分の中に位置付けている。各校でも本時で指導したことを確実に評価し，授業改善に生かしてほしい。単元評価問題等を活用し，児童の実態を把握した上で授業構成を考えることを大切にしてほしい。
・ＴＴが効果的に機能している。今後は，演技を取り入れるなど，教師の豊かな発想で色々なことに挑戦してほしい。
・枚数と重さに着目させて進めていた。例えば，「分度器，ものさし，はかり，ストップウォッチ，Ｌますの中から道具を一つ選んで，画用紙を数えずに５００枚用意しましょう。」という問題提示の仕方もある。児童の発想を引き出し，生かしながら授業を組み立てていくことを大切にしたい。

４　成果と課題

⑴　成　果
・評価の観点が「考え方」の授業構成の場合は，児童の前にレールを敷きすぎないこと，児童の発想や考え等を生かした授業展開を工夫したいことについて話し合うことができた。
・評価問題の実施方法，また，評価の観点に応じた評価問題の内容について理解を深めることができた。

⑵　課　題
・効果的なＴＴの在り方，個人思考時の見届け方，また，指導者が複数だからこそできる授業構成はどうあればよいかなど，柔軟な思考で指導に当たっていく必要がある。

理 科 部 会

研究主題　**身近な自然にはたらきかけ，進んで問題を解決する子どもの育成**

1　主題について

今年度は，「自ら進んで問題を解決する子どもを育てる手立て」として，観察や実験に意欲的に取り組むための見通しのもたせ方や，個々の考えを深めさせるための意見交流の場の設定について研究を進めることにした。

2　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	１０月３１日	第２回総合研究会 授業研究会（南小学校）
１０月１０日	授業研究会指導案検討会 （南小学校）	１１月１９日	交流授業研究会（扇田小学校） 4年「ものの体積と温度」　指導者：伊藤　久美子

3　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１０月３１日（水）　　・会　場　　南小学校

・単元名　　６年　「てこ」　　・授業者　　和泉　克子

①　授業者から

・子どもに意欲をもたせるために，予想の段階を丁寧に取り組ませた。そこから見通しをもって実験に取り組むことができたと思う。

・導入で行った自由試行の場で，力点や作用点の位置の変化で手ごたえが変わることに気付いていた児童が多かった。

・今回は，前時に予想を立て，本時に実験を行うという２時間続きの計画を立てたが，理科の学習においてこのような取り組みはよいのだろうか？

【まず作用点を変えよう】

②　協　議

○視点１…「一人一人の子どもが予想を基に，意欲的に実験に取り組んでいたか。」

●子どもたちに授業を作らせたかったので，実験の図も自分たちで考えさせて書かせた。ただ，個人の考えをグループで合わせたので，どれも同じような図になった。

・本時につながる前時の活動の様子がうかがえる場面があり，つながりがはっきりしていた。

・実験中グループ内で，「○点を遠ざければ」「近づければ」と確認し合う点がよかった。

●事前研の時から変更して，支点を固定した。ただし，１時間目は支点も動かしていた。

・支点を変えると，２つの条件が同時に変わることになるのでこの形でよい。

・力点と作用点だけだと実験もすぐ終わるし子どもの発想を生かすことができない。自分が授業を行う時は，支点も含めて，もっと自由に実験させている。

●課題の他に実験のめあてを設定しているので，もう一つの予想が必要になっている。

・自分は，課題→予想→めあて→実験→たしかめ…と進めている。

・授業のまとめは課題の答えになるはず。実験のめあてはあってもなくてもよいのでは。
・本時の評価の観点が知識なので，授業の流れはよいが，最後に評価問題が必要だと思う。
○視点２…「話し合い活動は，個々の考えを深めさせるために効果的であったか。」
・分かったこと(結果)からまとめを出すことが大切だと思われる。
・予想の図だけではなく，板書の基本図も活用して発表すると分かりやすい。
・グループでまとめまで書いているのはどうか？すり合わせは結果までででよいと思う。
・代表発表は工夫についての説明が入ってきて，話が長く分かりにくくなった。言葉だけではなくて，数字で分かりやすくしたり，理由をはっきりさせた方がよかった。

⑵　指導助言（佐々木　長則　指導主事）

・子どもが自信をもって学習に取り組んでいる。普段の指導の成果であり，子どもの姿や理科が「好き」というアンケート調査の結果に表れている。
・実験を中心とした単元では，１時間で全てを網羅することは難しい。複数時間にまたがる場合は，単元構成をしっかり立てて臨んでほしい。
・グループ内で全員が実験に取り組み体感することができていた。理科では自然体験や科学的な体験を重視している。可能な限り，観察や実験の個別化を図りたい。
・考えやまとめを自分の言葉で書かせるためには，時間を十分に確保することが必要である。同時に，書けない子への手立ても準備しておかなければならない。
・グループでの話し合いは，ルールが確立されていて大変よい。司会の仕事としては，個々のまとめのよい点を比較して発言することで，学び合いが深まっていく。
・条件制御の点から，本時は支点を固定したことがよかった。実験では条件をシンプルにして取り組ませることが大切である。その際,「変える条件」と「変えない条件」を表で示すなど明確に捉えさせることが重要になっている。
・予想の交流の場面では，それぞれの理由などを再度紹介し合うとよかった。
・今回はグループで予想を一つに絞ったが，同じ予想のメンバーで集まってグループ編成をすることも考えられる。
・結果を整理して考察する活動では，情報をシンプルにすることを心がけたい。例えば結果を表にまとめ，分かったことを共有してから一般化するという流れが考えられる。大切なのは，結果を根拠にして考察するということである。
・実験のめあては児童の意識付けとしてはあってもよい。課題がしっかりしていれば惑わされないはずである。

４　成果と課題

⑴　成　果

・変える条件の設定には賛否両論あったが，全員が取り組む基本実験ではできるだけシンプルにすることで，結果→考察と進みやすいようにすることが大切だと確認できた。支点を動かすような設定は，学級の実態に合わせて発展として取り組むとよい。
・実験が中心となる場合は，２時間続きの流れになることも多いが，単元構成時に重視する部分を明確にして，時間配分を計画することが大切である。

⑵　課　題

・児童に本時の目的を明確に意識させるためにも，課題の設定が大切だと再認識した。
・学び合いや話合いの際は，各学年の目標を意識させて取り組ませたい。

生 活 科 部 会

研究主題　子どもが生き生きと活動するための教師の支援の在り方

１　主題について

子どもたちの主体的な活動を促すための手だての在り方を研究するため，本主題を設定した。

２　今年度の取組

月　　日	実　　践　　内　　容
４月１２日	第１回総合研究会　　研究主題設定・年間計画作成
１０月３１日	第２回総合研究会　　授業研究会・テーマ研究
１１月１３日	授業交流会（上川沿小学校）

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１０月３１日（水）　　・会　場　　山瀬小学校

・単元名　　２年「つくってあそぼう　おもちゃランド２１」　・授業者　　櫻田　道一

①　授業者から

・作りたいおもちゃごとに集まり，五つのグループができた。友達と相談しながら活動できるよさがあるのでグループでの活動とした。

・付箋を使ってアドバイスし合うことは，初めてだったが活用できていた。よい点は青，工夫したい点は赤の付箋を使った。

・子どもは自分が楽しい，自分がやってみたいという気持ちが先にきているように感じられるので，１年生を意識した活動や考えができるように声かけしていきたい。

【遊び方のよさを見付ける子どもたち】

②　協　議

・ルールの説明では，子どもたちが一生懸命考えながら話をしている様子を見て，学びがあると感じた。話の聞き方，めあてをもって学ぶ様子もとてもよかった。

・のびのび楽しそうに活動していた。赤と青の付箋で子どもの気付きを意図的に引き出す工夫がありよかった。

・児童は青赤の付箋をうまく使い分けていたし，考えて貼っていた。アドバイスを受けて読み合うところもよいと思った。ただ，一人一人の受け取り方には違いがあるので，個々にまとめてもよかった。そうすることで個の評価にも使える。

・遊んでいる中で，作ったおもちゃにどんな思いがあるのかどんな工夫をしたかについて話したり尋ねたりする子どものつぶやきから，気付きにつなげていければ「思考」にもつながっていくのかなと感じた。書くことがハードルになる子どももいると思うので，一斉で出し合う中で，教師が拾い上げて整理するやり方もある。

・１年生を招待することを早い段階で意識させていけば，相手に応じた遊び方の工夫やおもちゃの数，材料の準備などへ気付きの視点を広げられる。

・自分が楽しむ要素も大事。たくさん遊んで楽しいと思う中，おもちゃの動きやルールについて体験的に気付くことができる。

・壊れたおもちゃを見た児童のつぶやきがあった。時間があれば「もう少していねいに使ってほしいと思いました。」と伝えるなど，子ども同士の関わりも見えたかなと思う。

⑵　テーマ研究《人と関わる力を育て気付きの質を高める支援の在り方…各校の実践紹介》

・地域の人との交流や異学年交流の機会に，その活動の中でもできるだけ多くの人との関わりが生まれるように配慮した。

・ペアやグループで一緒に活動を行うことで会話が生まれるようにした。児童同士がアドバイスし合う活動などを大事にすることで，伝え合いが活発になり，子どもの気付きが質的に高まった。

・教師が児童のつぶやきに共感しつつ，さらに意欲を引き出す声かけ（賞賛）をすること，また，教師の指示を最低限にし，子ども自身が考えて行動できるように心掛けることにより，生き生きとした活動をつくり出し気付きの質を高めることにつながった。

⑶　指導助言（小玉　リツ子　指導主事）

・生活科の学びのキーワードは「自分」。「自分」というフィルターを通し，自分のまわりをよく見て気付いていく。個々の児童の認識を大事にしたい。自分ともの，自分と人との関わりを，自身の体験から学ばせていくということ。

・「評価」は，単元や毎時間の学習にもちろん設定されるが，休み時間や放課後の様子も含めて広く見取るようにしたい。

・生活科は活動を通して学ぶ。この授業では，活動の中で付箋を使い，子どもの思いを意識させる手立てがあった。全体での話合いがあり，気付きの共有化が図られていた。

・この単元のゴールは，「みんなで遊びを楽しむことができる」である。自分が遊びをつくって楽しみ，そして，友だちと遊ぶことが楽しいと思うことを実感させたい。本時は，友達の遊びも体験してよさに気付くことをねらっていた。トコトコカメの動きを見て「１,２,３」とリズムに合わせて声を出し，動きの面白さに気付いている子ども，ビー玉の数を増やしてよく転がるようにして遊ぶ子どもや電池を立てて入れると転がらないことに気付く子どもなど，やりたいと思ったことを試して遊ぼうとしていた。気付きがあり，思考があった。教師は，活動中の子どもたちに自然に言葉を出させ，それを見付けて声をかけていきたい。つぶやきを拾い上げて紹介すれば気付きを共有化することもできる。

・自分が遊びに没頭しなければ，人に遊びのおもしろさを教えることはできない。教師は恐れず，まず遊ばせたい。つくった人（自分）を入れていっしょに遊び，関わらせていくとよい。そこから生まれる気付きがある。

・自分が決めたルールで遊ばせるというのは強引なので，相手を意識してルールを決めたり，自分と相手とで，いっしょにつくる遊びとなるようにしていきたい。

４　成果と課題

⑴　成　果

・部会研究主題と昨年度の課題については，授業研究会や会員による実践紹介を通して，研究を深めることができた。授業研究会には，幼稚園・保育園の先生方にも多数参加していただき，広く意見交流ができた。

⑵　課　題

・人とかかわる力を育て,気付きの質を高める支援の在り方を今後も研究していく必要がある。

音 楽 科 部 会

研究主題　**豊かな感性をもち，喜んで音楽活動に取り組もうとする子どもを育てる指導**

１　主題について

今年度は，昨年度の課題であった「イメージを豊かにもたせるための手立て」について，更に研究し深めたいと考え，「音楽づくり」の授業を設定し研修した。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	８月２０日	第１回指導案検討会 総合研究会の指導案について検討
１０月３１日	第２回総合研究会 授業研究会（雪沢小学校）	１１月予定	授業交流会（有浦小学校）

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１０月３１日（水）　　・会　場　　雪沢小学校

・題材名　　１・２年音楽「おまつりのリズムを作ろう」　　・授業者　　花田 千鶴

①　授業者から

・子どもたちのアンケートを基に，意欲をもって取り組めそうな「音楽づくり」の授業を設定した。第１次に雪沢小の４～６年生がたたいている「鹿島太鼓」や，神明社祭典のＶＴＲなどを活用して「お祭り」のイメージをもてるようにした。

・題材の最初は本時も使用した色つきリズムカードを用いて，手拍子でリズムを練習した。子どもたちは学習が進むに連れて，手拍子でのリズム打ちが上達していった。

・今日は一人８小節のリズム作りに取り組んだが，時間的な余裕がなく，低学年には難しかったかもしれない。

【どっちのリズムにしようかな・・・】

②　協　議

・子どもが自信をもって，自分が表現したい音楽に取り組んでいた。迷いなく進んでいく子どもの姿に，一人一人が大事に育てられている雪沢小学校ならではのよさが感じられた。

・手拍子ではリズムを打てるが，バチでリズムを打つことは，１・２年生には難しかった。

・板書資料は，子どもの集中力を高めるために少しずつ出す，という方法もよいと思う。

・子どもたちは基礎的なリズムを打つことが出来ており，１年生でもリズム譜に「タタン」と正しく書き込めていた。指導の積み重ねが感じられた。

・自分の演奏部分が終わると満足してしまい，友達との関わりが薄くなってしまう場面があった。友達が太鼓をたたいているときは歌ってあげるなどすればよかった。

・「おまつり」のにぎやかさはどのリズムで表現できるのか，いろいろなリズムを比較してみてはどうだったか。また，つくった音楽のどの部分が「にぎやかさ」につながるのかをグループ内でお互いに確認する場があってもよかった。

⑵　テーマ研究《各学校の実践紹介》

・リコーダーの導入教材曲集「笛星人」の紹介。一つの音だけでも曲が演奏でき，基礎を楽しみながら学べる曲集。挿絵一つにも工夫や意味があり，本質を理解して使うことが大切である。

・リコーダーの学習に生かせる「指番号カード」の紹介。授業で継続して使っていくうちに，指を確認しなくても反射的に指づかいが出来るようになっていく，効果的な指導方法である。

・１年生に「拍」の流れを感じとらせる実践の紹介。電子オルガンで拍子音を流し，それに合わせてリズム問答する活動や，上手に拍に乗れるとみんなのリーダーになれる活動など，子どもが楽しみながら音楽の力を付けていく実践例である。

【１年生グループが作った音楽を演奏】

・よりよい「音楽」をつくるために，同じ曲を二つの演奏の仕方で聞かせ，比較する活動を取り入れた実践。曲のイメージを広げることにもつながる鑑賞方法である。

⑶　指導助言（小林　秀雄　指導主事）

①　授業について

・授業の準備がすばらしかった。板書が構造的であり，子どもたちが学習を進めていく上で必要な情報がしっかり示されていた。

・リズムカードが個々にきちんと準備されており，一人一人が使いやすいように配慮されている。

・太鼓や半てんが用意されていることも，子どものモチベーションを高め，お祭りのイメージをもたせることにつながっていた。

・６種類のリズムを使って「音楽づくり」を指導する場合，楽譜を「横の流れでどう組み合わせるか」ということと「段の流れ（全体の構造）をどう見るか」という二つの見方で考える必要があった。

・ここまでの学習の間に１時間「鑑賞」を入れて，「反復のもつよさ」を聴いてとらえさせ，それを本時に生かせればよかった。

②　音楽づくりについて

・子どもの発想を引き出すために音楽的な約束事を場面場面で設定する。ねらいに合わせてその約束や条件を設定することが大事であり，つくったものをお互いに聴き合って「どれがいいか」を考えさせる。教師自身が明確にねらいに即した条件をもたなければ子どもが迷ってしまいねらいを達成できなくなる。

・音楽づくりと鑑賞は密接に関わっている。題材の中で何を指導するか教師が意図し，授業の中で価値付けを意識しながら支援の言葉かけをすることが大切である。

４　成果と課題

⑴　成　果

・道具の準備や教材の工夫など，学習意欲を高める手立てが充実していたことにより，子どもが主体的に学習に向かうことができていた。「音楽づくり」の学習では子どものイメージを引き出すために，ねらいに沿った約束や条件が重要であることを共通理解できた。

⑵　課　題

・「音楽づくり」の学習（表現）と鑑賞との関連の図り方

図 画 工 作 部 会

研究主題　**みずみずしい感性と，しなやかな造形思考を求めて**
～生き生きと思いを表現できる子どもの育成～

１　主題について

昨年度同様，個性を生かした多様で創造的な活動を促し，造形活動の基礎的な能力を育成し，子どもが自らつくりだす喜びを味わえるような授業づくりをめざし本主題を設定した。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	９月１３日	交流授業（雪沢小学校）
９月２８日	指導案検討会（成章小学校）	１０月３１日	第２回総合研究会 授業研究会（成章小学校）

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１０月３１日（水）　　・会　場　　成章小学校
・単元名　　６年「布と枝のコンサート」　　・授業者　　荒川　富紀子
～音楽のイメージを形に～

①　授業者から

・近くの山でせん定した枝を適当な大きさにカットし，土台となる部分の組み合わせを考えた。予想していたことではあったが，子どもたちは，太い枝どうしを接合する際，ぐらぐらしたりくずれたりしないようにするのに苦労していた。
・今回は三つの特徴ある曲から選択させ，イメージを広げさせることに挑戦した。よく聞く曲が安心なのか，一つの曲に人数が偏ってしまい，選曲の難しさを感じた。
・曲からイメージさせて製作活動を進める際，「思い」と「材料」と「どんな方法（接合方法等）で」を結び付けながら考えさせたことが，子どもたち一人一人の創作活動の手助けとなり効果的だった。
・本時では，布を使ったいろいろな表現方法（ねじる・張る・たらす等）が出てきてよかった。

②　協　議

○造形活動の基礎的な能力に関連して

・直線的な枝と曲線的なあけびのつる等いろいろな種類がたっぷり準備されていて，表現に広がりがあった。
・自然の材料以外では，布やモール等の巻きつけるものが多かった。それ以外の材料があってもおもしろかったかもしれない。
・イメージはもっているがつくり方がよく分からない子へは，やり方を教えてあげる必要がある。（校務主事等へ依頼）

【不思議な音楽からイメージを広げて】

・本時のように，授業の始めに十分に言葉でイメージを広げさせたり，途中で友達の作品を紹介したりする活動を設定すると，つくるものをイメージしやすくなる。

○言語活動の充実に関連して

・学習カードへ製作の仕方等を言葉で記入させることにより，イメージを広げ深めていくことができるように工夫されていた。また，それを基により適切なアドバイスもできた。

・つくりながら交流を深め，お互いにアドバイスし合いながら作品を仕上げていくことができるように，場の設定が工夫されていた。

○評価に関連して

・評価の観点が【創造的技能】だが，学習カードの記述と関連させてより適切な評価ができる。

⑵　指導助言（嘉藤　貴子　指導主事）

・発想の手がかりを音楽にしている。音楽から受けるイメージを図画工作にどのように展開していくのかが大事だ。題名を伏せた音楽からイメージし，題名を自分で付けさせ，イメージをしっかりもたせた上で表現につなげているのがよい。一人一人がイメージをしっかりもっているので，どれ一つ似たような表現がなく，工夫して表現されていた。

・材料をよく鑑賞している。形の異なるものをどうやって使うか鑑賞しながら表現に生かしていて，物の見方が身に付いている。

・イメージを実現させるための材料の準備や用具の使い方が分かっているので，多様な表現につながっている。

・表現に生きるタイミングで学び合いが設定されていた。また，場の設定が工夫されていて，他の人から学び，自分に生かすことのできる環境が整っていた。

・何もないところから何かを生み出す抽象的表現は難しい。一人一人の子どもの成長に応じて柔軟に対応する必要がある。

・自分の感覚や活動を通してイメージをもつことを生かして題材を組み立てている。学習カードや発表場面の設定を工夫することで，その目には見えないイメージを見取ることができる手立てをとっている。

・子どもの表現活動が３０分間保障されていて，子どもたちが満足いく授業だった。これからも子どもたちが十分活動できる授業を心がけてほしい。

⑶　実技研修会

・今回のテーマはクロッキー。鉛筆や筆を画材に，時間を１分間に限定して様々に条件を変えてモデルを描いた。また，まめや落花生，落ち葉，しいたけなどの様子をじっくり見て描いたりもし，描く楽しさや他の作品と見比べ自分の作品に生かすことのよさなども実感することができた。ぜひ，学校にもどってから実践してみたい有意義な研修内容だった。

【実技研修風景から】

4　成果と課題

⑴　成　果

・目には見えないイメージを膨らませ確かにもたせるための題材設定や学習カード，学び合いの工夫について，授業を通して研修を深めることができた。

・図画工作科における言語活動の果たす役割について，共通理解を図ることができた。

⑵　課　題

・感性を働かせながらつくり出す喜びを味わえるような支援の在り方について，今後も研究を進めていく必要がある。

家 庭 科 部 会

研究主題　**自分の思いや考えをもち，よりよい生活を目指していける子どもを育てる指導**

１　主題について

自分の思いは，家族との関わりなしでは考えることはできない。家庭生活をよりよくするためには，生活への関心を高めることが必要である。これらを踏まえ，子どもたちが自分の家庭生活をよりよくしようと意欲を高め，実感を伴った学習を進められるように本主題を設定した。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	１０月１１日	指導案検討会 （有浦小学校）
８月　１日	夏季実技研修会 （有浦小学校）	１０月３１日	第２回総合研究会 授業研究会（有浦小学校）

３　研究内容

⑴　夏季実技研修会

・期　日　　平成２４年８月１日（水）　　・会　場　　有浦小学校

・研修内容　　「外国料理体験～タイ料理～」

・講　師　　谷口ユパ先生・高橋信子先生

外国の食文化にふれる良い機会に恵まれた。今回挑戦したメニューは，香辛料やココナツミルクを使ったタイ料理で，「エビのカレー炒め」「ナスのタイ風サラダ」「タピオカのデザート」の３品である。

大北会員４名を含む１１名が参加し，３つの班に分かれて調理した。調味料の分量を計る場面やポイントとなる調理の場面では，ユパ先生の指示を仰ぎながら作業が進められた。

会食の際には，タイの香辛料や食文化についてたくさんの質問が出され，日本の食文化との違いを感じながら味わった。

【調理のポイントをアドバイスする谷口先生】

【エビのカレー炒め・ナスのタイ風サラダ・タピオカデザート】

⑵　授業研究

・期　日　　平成２４年１０月３１日（水）　　・会　場　　有浦小学校

・題材名　　６年「楽しい食事を工夫しよう」　　・授業者　　佐藤　昭人

～めざせ，じゃがいもシェフ～

①　授業者から

・栄養のバランスについて考えることに重点を置くために 4 品の中でも 4 種に限定し，「おかず」ではなく「主菜」「副菜」まで学ぶ計画を立てて実践してみた。

・２５品のカードからねらいに合う献立に向けてグループで話し合って，考えをまとめてほしいと願ってグループ活動を取り入れた。

・５年生から始まった家庭科は，朝食について考える活動が多いが，夕食について考える機会が少ない。そこで，あえて今回は夕食の献立に挑戦した。

② 協　議

【献立を見直す子どもたち】

・グループでの話合いは，活発な意見交換ができた。
・教師の献立の提示，画像での具体的な献立の提示は，栄養のバランスについての理解が促され，有効であった。
・個にかえって献立を考えた場面は，自分を見つめ直すことにつながった。
・生活改善カードは自分の生活に目を向け，実践につながり，効果的であった。ぜひおうちの方にも見てほしい。
・個の献立をもとにグループで検討した方がより気付きにつながったのではないか。
・メニューカードシールは献立が限定されてしまうため，献立を書き込む等の方法もよい。
・限られた時間でねらいを達成するために，題材の内容を吟味することが大切である。
・教師の意図ははっきりしていたが，主菜，副菜の捉えや必要性について検討の必要がある。

⑶ 指導助言（八代　英樹　指導主事）

・学習のまとめの掲示は，環境づくりとして効果的であり，授業でも活用されていた。
・集中して学習に取り組む姿から，学級経営が良好であることが分かる。
・授業の進め方にメリハリがあり，テンポもよく，児童が集中できるものであった。指示も簡潔であったため，活動に充分時間を割くことができていた。また，教材教具の工夫が充実しており，児童の活動への素早い取りかかりや活発な話合いにつながっていた。
・グループ活動の後，各班の献立を見比べて，不足を補ったり改善のための解決方法を考える時間を取っていてよかった。教師の献立から改善策を考える場面も効果的であった。
・テレビ画面での説明が分かりやすかった。
・最後に個人にかえって活動したことは，実践につながるものである。
・食事カードは今後，家庭との連携として活用したり紹介したりすることで，さらに実践につなげることができる。
・今後，「食育の充実」に向けて，小学校では求められていること一つ一つをしっかりと身に付けること，食への関心を高めることを目指して活動してほしい。
・小・中の学習内容を明確にして題材構成してほしい。主菜・副菜等の考え方や，量や地域の食材は中学校で扱う内容であり，小学校では３つの食品グループのそろった献立を作るという捉えでよい。
・家庭科における言語活動は，実感が伴ったもの，生活をよりよくするためのものと考えたい。体験の前に予想や考えをもたせる，体験後に自分の言葉でまとめたり自分と結びつけて発表したりする活動が望ましい。

4　成果と課題

⑴ 成　果

・カード，シート，提示画像など，教材教具の充実が児童の意欲を引き出し，基本的な一食分の献立で必要なものを理解することにつながっていて，効果的であった。
・教師の適切な指示や前時までの積み重ねにより，グループでの話合いが活発に展開された。

⑵ 課　題

・児童が自身の食生活を振り返り，改善点に気付くようにするための活動を充実させ，実践につながるようにすることが大切であることを確認した。
・生活改善カードを活用し，家族と共に考えるきっかけにできればよい。

体 育 科 部 会

研究主題　**一人一人が運動の楽しさを知り，意欲をもって取り組む体育学習**

１　主題について

従来のテーマを引き継いでいる。部活動などで運動に取り組む子どもと，全く取り組まない子どもとの二極化が進んでいる。そうした中で運動の楽しさを知り，実生活の中で運動に親しんでいこうとする態度を育てることは生涯にわたって重要なことである。今年度は主に，表現運動を素材とし，研究実践を進めてきた。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研 研究主題確認・年間計画作成	６月２６日	第２回総合研実技研修会 授業研究会(城南小学校)
６月　６日	実技研修会 全県体育に向けての協議	１０月３１日	第３３回秋田県学校体育研究大会大館北秋田大会

３　研究内容

⑴　実技研修

・期　日　　平成２４年６月６日（水）　　・会　場　　有浦小学校
・内　容　　子どもの体力指導者養成研修の伝達
・指導者　　有浦小学校教諭　福山　健太

⑵　授業研究Ⅰ

・期　日　　平成２４年６月２６日(火)
・会　場　　城南小学校
・単元名　　１年だいすき！どうぶつランド(表現遊び)
・授業者　　高橋　博秋

【1年生の授業の様子】

①　授業者から

・カードを取り入れた動きはよかったが，教師の位置，指導のタイミングなど迷った。めあてを確かめたのがかえって動きを固定化させてしまった。
・生き物の本を見せておいたが，よく知っているものでないと動けなかった。
・評価が難しい。聞き取りをすれば確実だが，後からでは忘れている。カードは振り返りをするという意識付け程度だった。

②　協　議

・しつけが行き届いている。話を聞く態度がとてもよかった。教師の優しい語りかけがよい。
・「たいへんだ！」カードの内容が大切だと思う。もう少し大きな動きになるようなものを吟味する必要がある。教師が評価する時間を確保するために，見合う活動もあればよい。
・動きの緩急が出るものを考えなければならない。カードは二枚引くことでバリエーション

が出るようになっていたが，組み合わせによって動けるものとそうでないものがあった。
・長い時間ローテしながらあきずにがんばった。後半は，全体で同じことをさせる場面があると評価もできる。半分ずつ見合うなどすればよい。

【お互いの動きを見合う】

⑶　授業研究Ⅱ
・単元名　５年力強くおどろう！「NEW ソーラン節」
・授業者　小林　潤

①　授業者から
・からだほぐしは前時に考えていたものをやらせたのでスムーズにいった。４つの崩しを言わなくても子どもたちで工夫していた。
・動きを書き込む資料を準備していたが，渡すと座り込んでしまいそうなのでやめた。
・グループ練習の時の声かけが難しい。交流もあったが，子どもたち同士がポイントを意識して見ていたか疑問である。交流の際に時間を短縮させるアイディアを教えてほしい。

②　協　議
・CD は一台だったが，兄弟グループのやりとりができるようにすればグループが生きた。そのためには CD が複数台あってもよかった。
・ねらいに迫る動きを全体で確認したのがよかった。ただし，その動きをお互いにチェックできる場があればよかった。
・リズムを取れる子どもがリーダーになり，グループ内で見合いながらできればよいと思ったが，学年の実態でどこまで求めればよいのかを考えなければならない。
・グループ交流というねらいがあったので，全体ではなく，グループ同士で交流ということにすれば時間は短縮できたと思う。

⑷　指導助言（安田　知明　指導主事　・　高橋　敏治　指導主事）
・保育園から中学校まで一堂に会し，研修できる機会は大変よい。
・２学年のまとまりのゴールは，２学年の終わりに B 規準が達成できているかということである。指導内容を縦に結んで，ねらいを絞ると評価の観点も決まる。
・１時間に３つの評価は無理がある。バランスよく配置する。単元が終わった時に３つの観点ができていればよい。
・今後は，ビデオなどで動いている姿を撮影し，それを見るなどの活動も考える必要がある。
・指導と評価の整合性が必要。10 月の全県体育に向けて検討してほしい。

４　成果と課題

⑴　成　果
・表現運動についての授業の蓄積がかなりできてきた。授業の素材や，組み立てについてのノウハウが共有された。

⑵　課　題
・各学年の系統性を踏まえた指導内容の明確化。特に，２学年のまとまりについての指導や評価がまだ十分ではない。ねらいと評価の一体化を図る授業改善がなお一層求められる。

道 徳 部 会

研究主題　**思いやりの心をもち，進んで実践しようとする子どもの育成**

１　主題について

道徳部会では，他者を思いやる気持ちや豊かな人間性の育成を目指して研究を進めてきた。今年度は，「ねらいにせまるための発問の工夫」と「道徳的価値と自分とのかかわりについて考えるための手立て」について研究を深めた。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	１１月　６日	第２回総合研究会 授業研究会（早口小学校）
８月２２日	指導案検討会（早口小学校）		

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１１月　６日（火）　　・会　場　　早口小学校

・主題名　　４年「思いやる心を親切な行為に」　　・授業者　　小山　由美子

２―（２）思いやり・親切

・資料名　　「なにかお手伝いできることはありますか？」（東京書籍）

①　授業者から

・学習シートに書かせる活動を忘れてしまい，発問が前後してしまった。でも子どもたちはいろいろ考えて発表していた。

・グループ活動を入れたいと思ったが，今日の流れにした。

・全員発表ができたのはよかった。

・終末では，子どもたちの発言を大事にして写真は後から紹介した。親切にしてあげた経験が，友だちだけでなくいろいろな人へと広がりが見られたのでよかった。

②　協　議

・リレー発表で意欲的に発言していた。安心して発表できる学級の雰囲気ができていた。

・子どもの発言が本時のねらいを達成できるように，意図的指名があってもよかった。

・教科や総合的な学習の時間での活動と関連付けた展開がよかった。子どもたちの発言にもいろいろな人とのかかわりが見られた。

・中心的な発問は勇気にもかかわるので，声をかけようかどうしようかと迷う登場人物の気持ちが資料分析にあればよかった。

【写真を見て自分を振り返る場面】

・シートに書かせる場面をどこにするかは悩むところである。今回は，自分を振り返る場面でシートに書かせ，親切にした時の気持ちを入れて発表できるとよかった。

・主人公だけでなく，女の人が抱えている恐怖にもう少し注目させると，相手を本当に思っての行動なんだということを考えることができたと思う。

⑵　テーマ研究

《実践紹介～城西小学校　雄鹿 成子先生》

「効果的授業の構成」

・価値への導入
　短時間でできる善悪についての○×クイズの実施
・展開前段の工夫
　主人公の気持ちについて考えを深める書く活動
　書いたことをもとにした役割演技
・価値の一般化（展開後段）
　友だちに注意できた経験とその時の気持ちを問う発問

【雄鹿先生の実践例の紹介】

⑶　指導助言（嘉藤　貴子　指導主事）

・話すことを喜んでいて，積極的な子どもの姿がよかった。また，周りの子どもたちの聞く姿勢ができており，日頃の指導の成果が感じられた。
・子どもの実態を丁寧にとらえている。また，他の教科等との関連が図られていた。
・教師の発問に対してよく考えられた発表がたくさんあった。教師がその発表をコーディネイトするために，リレー発言と意図的指名の使い分けが必要となる。
・ねらいとする内容項目は，２－（２）の思いやり・親切で見知らぬ人にでも親切にできるというのが今回のポイントであった。ねらいとする内容項目について，どのように高まっていくか前後の学年を確認しながらより深く理解してねらいをしぼりたい。
・行動に移すきっかけとなった場面を中心的な発問としていたが，登場人物の心の動きから考えると，女の人がにっこり笑ってお礼を言ってくれた時のぼくの気持ちを中心的な発問とした方がねらいにせまりやすかった。
・主人公が相手のことを気遣い，親切な行動をしている場面を資料分析で押さえておきたい。どこで主人公の意識が変わっているかを明確にしておくことが授業の深さにつながる。
・展開の後段で自分の経験を話す場面では，どんなことができたかとその時の心情をあわせて問いたい。心情を伴った行為になることが大事である。
・終末の教師の体験談は子どもを引き付ける。
・実践紹介は，子どもを引き込む工夫があり子どもの実態に合わせて授業の準備をされているのがよい。今回の手立ては，１・２年に限らず他の学年にも参考になるものと思う。

４　成果と課題

⑴　成　果

・授業研究会を通して，ねらいにせまるための発問や資料分析の在り方について研修を深めることができた。

⑵　課　題

・価値にせまるために，子どもの発言を切り返したり，話合いが深まるようコーディネートしたりする教師の在り方と，書く活動の取り入れ方についてさらに研修を深めたい。

特 別 活 動 部 会

研究主題　**一人一人のよさを生かしながら，進んで実践しようとする子どもを育てる指導**

１　主題について

今年度も，昨年度と同様学級活動での子どもたちが主体的に実践するための手立ての在り方を研究するため，この主題を設定した。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１９日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	１１月８日	第２回総合研究会 授業研究会（長木小学校）

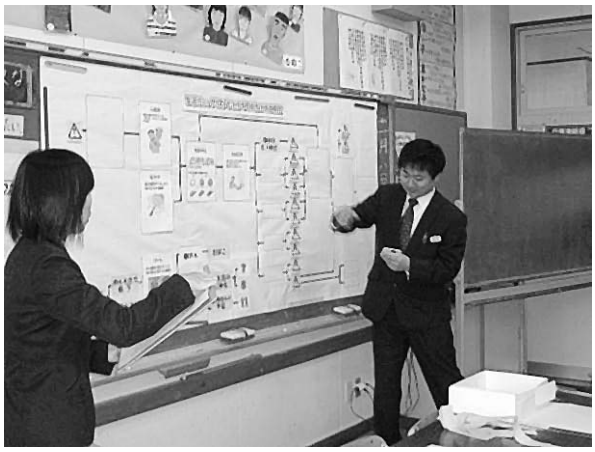
３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１１月８日（木）
・会　場　　長木小学校
・単元名　　６年学級活動
　　「未来の自分へのプレゼント」
・授業者　　平山　雄也
　　佐藤　啓子

①　授業者から

・健康についてのアンケートで興味深い回答をした子どもが多かった。そこで保健の学習と絡めて自分の生活を振り返る単元を設定した。
・書く量が多く，子どもたちが書けるか不安だった。またそれによって他の活動時間が制限されてしまうのではないかと考えていた。どこでスリム化できたか知りたい。
・ペアから３人での活動に変えてやってみたがどうだったか。



【養護教諭による「健康チェックリスト」】

・生活習慣と病気の関連のチェックリストとワークシートの説明を長く話し過ぎてしまった。それで時間が足りなくなったのではないか。

②　協　議

・必要感を持たせる為に，アンケートの結果を子どもが提示，紹介したのがよかった。
・チェックリストを聞く時に知的作業があればよかった。例えば子どもたちの手元にチェックしたものが残るようなシートがあれば，切実感がもっと生まれたのではないか。
・ワークシートに自分の問題点を改善するためのメリット・デメリットを記入する欄があったのは，本音を出させたり，迷いながらも意思決定させたりする点でよかった。
・ワークシートは量が多かったが，よく書けていた。ワークシートのステップ２の数を減らし，同じ問題点をもった子供同士でアドバイスし合うと，自己決定がより具体化されてた

のではないか。
・アドバイスし合う場面は，２人より３人の方が補い合えて話合いが深まった。
・特活と保健を関連させる授業は，ねらいをはっきりさせてやる。学習したことと自分自身の生活と結び付けるためにも今日の学習はよかった。
・同じことでも専門的な知識をもつ第三者から言われると効果的。豊富な知識や視覚に訴える資料がよかった。

【３人グループでの改善行動へのアドバイス】

⑵　指導助言（高橋　敏治　指導主事）
①　授業について
・子どもたちが明るく，よい雰囲気で学習している。すばやく書く，グループで話し合うなどの学習のしつけがよくなされている。
・アンケートやアドバイスなど資料をいろいろ準備し授業に臨んだことが，効果的に働いていた。
・本時の活動過程は，指導要領解説に書かれている流れでしっかり行われていた。
・導入部分の養護教諭のチェックリストに時間がかかった。病気についての知識は事前に保健の時間に行っているので，復習程度で自分の課題をつかませる方法でもよかった。
・TT で養護教諭など専門性のある方と一緒に授業をするのは効果的だが，どこまでどの程度までやってもらうか吟味する必要がある。
・３人での集団思考の場面はよく話し合えていた。実践に結び付くようなより具体的なアドバイス（作戦）を明確にもつことが実践につながっていく。そのために事前に予想される改善点へのアドバイスを書かせ，それを掲示し全体で確認し合う時間をとれれば，より具体的な実践するためのアドバイスができたのではないか
・自己決定したことを全体の場で発表するのは難しいので，グループの中で一人一人が発表する場面があればよかった。実践するための決意につながる。
・この後実践につなげていくための手立てを取り，ぜひ継続できるようにしてほしい。

４　成果と課題

⑴　成　果
・授業研究を通して，学級活動と他教科との関連，家庭との連携などについての研修を深めることができた。
・専門的な知識のある養護教諭との TT は，豊富な知識や資料が子どもたちの学習意欲を高める上で効果的だった。

⑵　課　題
・導入に時間をかけず，集団思考や自己決定場面に十分に時間をかけられるような展開を考えていきたい。
・他教科，他領域と関連を図る際には，ねらいを明確にし，どこで何を身に付けさせるのかしっかりと年間指導計画に位置付けていきたい。

総 合 部 会

研究主題　**生きる力を育てるための総合的な学習の時間の進め方**

１　主題について

大館市では，各校の特色を生かしながら「ふるさと・キャリア教育」に取り組んでいる。本部会でも，より一層充実した活動を行うことで自分で課題を見付け，生き生きと活動する子どもを育てたいと考え，この主題を継続し研究を進めてきた。

２　今年度の取組

月　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会　　研究主題確認・年間計画作成
１０月１５日	指導案検討会（西館小）
１１月　７日	第２回総合研究会授業研究会（西館小）

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１１月７日（水）　　・会　場　西館小学校

・単元名　　３年「わんぱくキッズ大集合！」　　・授業者　山部　幸信

①　授業者から

・事前打ち合わせで，ゲストティーチャーである保育園の先生には，グループに答えではなく，考える視点を与えてほしいことをお願いした。

・グループでの話合いは１５分の予定であったが，グループによっては細かいところまで検討しており，時間がかかってしまった。そこで全体の意見交流をやめ，ゲストティーチャーに「園児がとても楽しみにしており，３年生自身も楽しくやろう」と伝えていただき，次への意欲付けとした。

・グループでの話合いでの気を付けるポイントは，その種目に合った内容を考えさせたかった。

②　協　議

・ゲストティーチャーが入ったことは有効であった。教師やゲストティーチャーの支援で各グループの話合いは，「園児が喜ぶ」という視点で深まったり，広がったりできていた。最後の全体への話は，もっと内容にかかわってもよかったのではないか。

・写真を見せたことで，空間のイメージが広がり，できる，できないが見えてきた。手立てとして有効であった。

【保育園の先生を
ゲストティーチャーに迎えて】

・グループの話合いが中心となり，グループ間の意見交流の時間が確保できなかった。大事にしたい活動なので，次の時間にぜひ行って欲しい。

・気を付けることの中には，喜んでもらうための工夫と留意しなければならないことが混じっていた。具体的に何をどこまで決めるとよいのか，明確にするとよかった。

・毎年，年間指導計画で決まっている活動をその子どもたちのオリジナルな活動にするためには，活動のモチベーションとなる課題づくりが大切である。

⑵　テーマ研究　（実践の情報交換）

・各校の特色を生かしながら「ふるさと・キャリア教育」に取り組む学校が多くなってきた。
・地域の人たちの協力態勢が整ってきている。地域の人たちとのかかわりの中で学ぶことは多い。
・より現実的で，実践しやすいもの，各教科との関連等を考えて「ふるさと・キャリア教育」の全体計画の見直しを行っている。
・子どもの課題を踏まえた活動が大事であり，学年毎に決まっている活動の場合は特に課題との出会い方が大切になってくる。

【グループで決めたことを発表】

⑶　指導助言（一関　光　指導主事）

・子どもたちが事前に園児と触れ合ったこと，保育士と何度か話し合ったこと，活動の条件を板書で示したことなど，本時で具体的な活動内容を考えるための手立てが適切だった。
・教師も授業者として，よく勉強しているのが分かる指導計画，本時の指導であった。
・園児の立場に立った話し合いのために，「～をすれば園児が喜ぶ」「～は園児がケガをするかもしれないから～する」などの例を示し，何をどこまで話し合うかを教えるとよかった。
・探究活動では，子どもたちが課題に対してどれだけ一生懸命考えたか，自分たちなりの答えを見付けたかが大切である。子どもの質問に対しては，すぐに答えを教えるのではなく，子どもがその気になって考えるような言葉を返したい。
・単元計画を考える時必要なこと
①子どもが主体的にかかわることができる，探究的な学習の課題設定となっていることが必要。そのためには，教師の意図的な働きかけ（体験活動やゲストティーチャーの活用を含む）による「価値ある課題づくり」を大切にする。
②育てたい力を明確にし，単元計画との整合性を図ること。単元で育てようとする【他者や社会とのかかわりに関すること】は，園児とのかかわりだけでなく，ゲストティーチャーやクラスの友達たちとのかかわりも重要であり，単元計画に位置付けることが必要。
③全教育活動と関連させ，各教科で身に付けた知識や技能が子どもたちの中で総合的に働くようにすることが総合的な学習の時間のねらい。各教科等（特に生活科での学習経験，道徳，特別活動）との関連も大事にして単元を構成する。

4　成果と課題

⑴　成　果

・授業へのゲストティーチャーの参加は，子どもたちの思考を深める支援となった。
・活動の場をイメージできる写真資料は，子どもたちの思考を助ける手立てとして有効であった。
・単元計画や本時の流れの掲示によって，子どもたちが見通しを持って活動できた。

⑵　課　題

・毎年行っている活動に意欲的に取り組ませるため，課題づくりに大きなウェートを置いた年間指導計画。
・探究活動の支援として，教師やゲストティーチャーが子どもにどうかかわるかを考えたい。
・価値ある課題設定のために何が必要か教師が考え，工夫したい。

外国語活動部会

研究主題　**英語の音声や基本的な表現に慣れ親しみながら**
コミュニケーションを図ろうとする児童の育成

１　主題について

今年度は，外国語活動が年間３５単位時間の完全実施となって２年目となる。そこで，外国語活動の目標を踏まえて，積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成を目指し，本テーマを設定した。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	１１月　７日	第２回総合研究会 授業研究会（城南小学校）

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１１月　７日（水）
・単元名　　６年　Hi, friends ！２
　　Lesson５　Let's go to Italy.
・会　場　　城南小学校
・授業者
　ＨＲＴ　佐々木　大
　支援員　中村伊久美
　ＡＬＴ　マイク・シュアイツァー

①　授業者から

・事前に行ったアンケートでは好きという答えが多かったが，自信が持てない，間違うと恥ずかしい等の理由で苦手意識をもっている児童も見られた。そこで，自由記述には「外国の方とふれあいたい」という声もあったので，意欲向上の効果も考え，ＡＬＴのマイク先生の協力を仰いだ。これは，単元との出会いの場で効果があったと考えている。
・コミュニケーション能力に関しては，現時点では，多少の曖昧さや間違いを許容し，まずは楽しんで話すことを大切にしてきた。
・ゲームのルール説明については，子どもに分かりやすく説明するために基本的には日本語で行っているが，既習事項の英語は使っている。すべてが英語では分からなくなるからである。活動への指示は英語を使っている。

②　協　議

・本時のめあてだけでなく，単元のゴールがあったことがよかった。児童が見通しをもって活動に取り組んでいた。
・導入に１５分をかけていたが，単元の１時間目なので分かりやすかった。また，導入からの展開もスムーズであった。
・ＨＲＴが「間違ってもいいんだ」という姿勢を示すことで子どもたちの英語へのハードルが下がり，苦手意識をもっている子どもへの支援となっていた。正しい言い方や発音については中村支援員に提示してもらうという連携を図ることでクリアできていた。
・活動ごとに児童が意欲的に取り組むしかけがあり，どの子も楽しんで取り組んでいた。

（しかけの具体例）

◇リズムに乗りアクションを入れて会話の練習ができるようタンバリン等を使う。

◇国旗クイズの際に一部だけが見える袋に入れて提示する。

◇ＡＬＴを紹介する際に，ＨＲＴの友達のマイク先生が電話をかけてきたという場面設定をし，子どもたちのワクワク感を演出する。

◇「メイクペアゲーム」では，カード，はんこ，子どもたちにとってそれぞれの国をイメージできる写真など，世界旅行をしている気分を演出する。

・ゲームで，たくさんの国のはんこを集めることに児童の気持ちがいってしまったときに，ＨＲＴが止めて，きちんと相手の目を見て，コミュニケーションをとりましょうといった活動の目的を確認していたのがよかった。

【パーサーとＣＡに扮して
世界旅行の雰囲気作りをする】

⑵　テーマ研究

・ＡＬＴや支援員との授業の打ち合わせ資料を持ち寄り，２グループに分かれて効果のあった授業の構成やアクティビティーについて情報交換を行った。

⑶　指導助言（石井　むつみ　指導主事）

・楽しい授業であっただけでなく，外国語を用いてのコミュニケーションの楽しさを体験し，満足感のある授業であった。

・チケットをもらい税関を通って飛行機に乗って出かける，しかも一人ではなく，友達を誘ってという活動が魅力的である。教材や場の設定がよく考えられており，教室というより，世界旅行の疑似体験の場となっていた。教材の準備もよく，子どもたちの心をくすぐる工夫，やりたくなるしかけがたくさんあった。

・メイクペアゲームでは，中間評価を入れることでその後の活動の質が上がっていた。

・指導者が３人いたので，もっとそれぞれの持ち味を生かした授業もできたのはないか。ＨＲＴがリードするのはもちろんだが，指導者同士の掛け合いがあると更に効果が上がる。ゲーム等の説明を支援員（またはＡＬＴ）に英語でしてもらい，ＨＲＴが語尾やキーワードを拾っていくと子どもが理解しやすくなる。ＨＲＴが授業をコントロールすると同時に，積極的に支援員を活用していくことが大切である。

・全ての授業に高いテンションが求められるのではなく，「ｎｉｃｅ　ｖｏｉｃｅ，ｎｉｃｅ　ｓｍｉｌｅ，ｎｉｃｅ　ａｃｔｉｏｎ」で取り組んでいってほしい。

４　成果と課題

⑴　成　果

・本時のめあてだけでなく単元のめあてを明示することは，児童が見通しをもって活動に取り組む上で効果があった。

・児童が英語でのコミュニケーションの楽しさを味わうためには，ねらいにそった場の設定を工夫したり教具を準備したりすることが大切である。

⑵　課　題

・ＴＴでの授業をより効果的なものにするためには，デモンストレーションなどでのそれぞれの役割りを明確にしていく必要がある。

国　語　科　部　会

研究主題　**思考力を育てる言語活動の指導研究**
～読み･考え・表現する授業づくり～

１　主題について

本主題を継続して５年目を迎える。思考力育成をねらった授業であれば学習材は問わないことを共通理解として，今年度も研究していくこととした。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	１０月２６日	第２回総合研究会 授業研究会（大館東中学校）

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　平成２４年１０月２６日（金）
・会　場　大館市立東中学校
・単元名　２年　いにしえの心を訪ねる
　　「扇の的」平家物語から
・授業者　庄司　和人

【切り返しの発問で思考を深める】

①　授業者から

・「思考力を育てる」というテーマについて，市教研ではここ数年，説明文を中心に研究してきたが，昨年度から説明文にとらわれなくてもよいということで，古典を選んだ。古典で論理的思考力を育てるにはどうすればよいのか迷ったが，昔の人の生き方・考え方を現代と比較して考え，話し合うことで，複数のことがらを対置させ，その共通点や相違点を指摘する力を培うことにつながると考え，単元構想を組み立てた。
・古典は「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項（ア）作品の特徴を生かして朗読するなどして，古典の世界を楽しむこと（イ）古典に表れたものの見方や考え方に触れ，登場人物や作者の思いなどを想像することを指導することになっている。今回は単元として指導計画を練っていく中で，「扇の的」「徒然草」「漢詩」を通して，（イ）を中心に進めていくことにした。古典の学習において，論理的思考力を育むにはどんな方法があるか，勉強したい。

②　協　議

【授業について】

・昔と現代の生き方・考え方を比較する視点について，本時の４つの視点は，物語の中で人々の思いが行動に表れているところを設定している。単元の最後に共感する登場人物や作者に手紙を書く，という目的を生徒に伝えてあるので，生徒たちも考えやすかった。また，自分の体験を生かして話すことが出来ていた。
・４つの視点について，共感できるものもあれば共感できないものもある。それを総合的に判断してどちらかに絞るのは，生徒たちにとって難しかったのではないか。２つくらいに絞り，本時は意見交流を中心にし，最終的に「まとめる」ということをゴールにしたい。

・視点が多かったので，意見交流の中でどの視点に反論しているのか分からなかった。
・昔と現代の生き方・考え方を比較することは，時代背景が違うから簡単にはできない。時代背景をしっかり抑えた上で比較させなければならない。
・比較の仕方が「似ている？似ていない？」というのが，良かった。「同じ？違う？」では白黒はっきりしすぎだし，「共感する？しない？」より分かりやすいと思う。
・自分の考えを堂々と述べることができる生徒たち。話したくて仕方がない感じが良かった。特に，反論が言える男子がすばらしい。

【生徒の意見を生かした授業展開】

【古典の評価について】
・今回の学習内容の評価の仕方は，「昔と現代の考え方を比較する」を『伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項』で評価，「比較して考えたことをまとめる」を『読むこと』で評価する。具体的に言うと，「違いに気付く」が「伝統的な～」，「どんな違いなのか読み取る」が「読むこと」。古典の評価方法については，「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料」（国立教育政策研究所）を参考にして欲しい。教師がどこを狙っているか，何を評価するかで決まる。

⑵　指導助言（山口　史人　指導主事）
①一つ一つの意見を丁寧に取り上げ，生徒を大事にしていると感じた。生徒の意欲につながっていくと思う。また，学習のめあてや流れが分かりやすく，生徒自身が最終的にどこに向かえばよいのか把握できていた。
②視点についての，自分の立場を明確にできる時間も保障されていた。そのため，自分の体験や知識と結びつけて意見をもち，それを支える根拠を明確にすることができていた。
③今回の比較する授業では，比較対象である「現代の人」が自分なのか，一般の人なのかをはっきりさせたい。比較対象が広がることで，考えがまとまらなくなる。
④意見交流をして自分の考えを深めることにつなげるという活動なので，深める前と後での変化を見たかった。それが「評価」につながる。
⑤意見交流の場面では，もう少し焦点化すると良かった。話題が広がりすぎてしまったので，教師が話し合いをコーディネートして，方向付けなければならない。何のための意見交流なのかをしっかり押さえ，「深める」ことを中心に進めたい。

4　成果と課題

⑴　成　果
・古典の学習において，思考力を深める手立ての一つを授業者に提示していただいたおかげで，比較のさせ方，話し合いの深め方等について，部会全体で考え，学ぶことができた。また，古典の評価についての迷いを解明することができた。教師のねらいを明確にすることを心がけ，指導に当たりたい。

⑵　課　題
・単元の組み立て方について，さらなる研修が必要である。

社 会 科 部 会

研究主題　**社会的事象を広い視野からとらえ，よりよい生き方を考える生徒の育成**

1　主題について

社会科における「公民的資質の基礎を養う」ことについて，一面的な考察・判断に陥ることなく，多面的・多角的な見方や考え方から課題追求することをねらいとし，本主題を設定した。また，新学習指導要領の移行に合わせて，来年度は新しい主題にすることを確認した。

2　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定	１０月２６日	第２回総合研究会（下川沿中） 授業研究会・新研究主題協議

3　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１０月２６日（金）　　・会　場　　下川沿中学校

・単元名　　３年「国の政治のしくみ」　　・授業者　　畠山　久美子

①　授業者から

・新しい教科書の付録ＣＤにある裁判員制度を使えば，子どもたちが考えられる内容だと思った。子どもたちにとっては供述は難しい内容だった。

・子どもたちには事前に家で考えさせ，グループで協議し判断させ，疑似体験させることができた。時間がなくて，無罪推定の原則の意義がやれなかったのが悔やまれる。

・子ども向けのホームページが多くて活用できそうだった。

【論告・求刑，弁論，最終陳述】

・本校の生徒は，人前で話すのが苦手な子が多い。「伝え，磨き合う生徒」が生徒像であるが，少し空回りしているかもしれない。

②　協　議

・裁判を経験していない生徒なのにイメージ力がある子どもたちだった。

・教師が裁判長となってズバッと判決を出す。子どもたちが裁判員で判決を出す。それを対比させればおもしろい。

・しゃべれない生徒がいるので，班で話し合う必要があった。そして，全体で話し合う必要があった。全体を高め合うのは全体で。全体で話し合うことによって自分の考えを出さない生徒がいなくなる。

・ばやらっとしている（曖昧な）アイテムであり，状況証拠がほとんどで，物的証拠がない。だから，子どもたちに多様に考えさせられる。推定無罪につながるではないか。

・今の資料は社会科なのか国語科なのか分からないほど文が長い。
社会科は非連続型資料（テキスト），国語科は連続型資料（テキスト）
・裁判員になった人のアンケートをとると，今は８割ほどの人がやってよかったと言っている。生徒がそう言えるように，裁判員をやった人の話を取り入れた授業をしたかった。
・裁判員制度の意義として，国民全員が考えると世の中が変わるのだということをとらえさせたかった。
・まとめが難しかったと思う。意義の意味を理解していないかもしれないので，課題の言葉を変えた方がよかったと思う。意義＝よい点と言っていたが，そればかりではないと思う。
・自分たちがちゃんとやっていくなどの答えが出れば，課題に対する答えやねらいが達成されたと思う。
・まとめの例の４つがよかった。その言葉に続けて書かせれば，まとめができない生徒にはまとめやすかったと思う。公正な裁判がなされるために裁判の大変さ，難しさも知る。

⑵　テーマ研究

・今回は，新しい研究主題を決定するために，各校の社会科の研究テーマを事前にまとめた資料を基にして話し合いをした。

⑶　指導助言（多賀谷　雅人　指導主事）

①　社会科における言語活動の充実について

・社会科の言語活動は資料を活用して説明，論述，議論する活動である。本時は，模擬裁判のシナリオの中にある事件に関する様々な証拠資料を基に議論が行われた。
・議論が活発に行われる条件は，テーマと方法である。議論したくなるようなテーマができれば，半分以上成功したも同然である。議論の方法とは，バズセッション，パネルディスカッション，ディベート，自由討議など考えを相手に適切に伝える方法である。また，個→グループ→個→全体→個の流れで議論させたい。本時は全体の場での議論がなかったことが残念だった。

②　生徒が思考するための資料は適切だったか

・優れたシナリオを基によい議論が展開されたと感じた。反面，分量が多く，社会科の資料活用の技能が問われたのか，国語科の読解力が問われたのかが判然としなかった。証拠や供述を整理し，要点を構造化・図式化することが大切である。
・思考を促すヒントとして，まとめの４つがよかった。参観者の参加もよかった。

③　学習意欲を刺激する課題提示であったか

・問い（学習課題）を引き出す資料提示が大切である。導入部分のビデオが意欲を刺激した。

④　「まとめ方」について

・本時は，文頭を示し，それに続けて書かせる方法であった。キーワードを使ってまとめさせる方法もある。その場合は，キーワードは出させたい言葉を出させるための語を設定する。

４　成果と課題

⑴　成　果

・擬似体験が生徒の意欲を促し，議論から言語活動や課題解決を刺激することができた。

⑵　課　題

・学習課題とめあての区別，資料の分かりやすさ，しゃべれない生徒への対応などの工夫。

数 学 科 部 会

研究主題　**豊かな学びを通して確かな力を育む算数・数学教育**

１　主題について

「豊かな学び」とは

○数学的な見方や考え方，特に算数・数学の内容や方法に関係する考え方が育つ“学び”

○問題解決のために合理的，論理的に考え，表現しようとする態度が育つ“学び”

「確かな学力」とは

○学んだことが以後の学習の基礎として活用できるレベルになっている。

○考え方や態度が新たな場面の問題解決で積極的にアプローチしようとするレベルになっている。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	１０月２６日	第２回総合研究会 授業研究会(比内中学校)

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１０月２６日（金）　　・会　場　　比内中学校

・単元名　　１年「比例と反比例」　　・授業者　　阿部　寛

①　授業者から

・生徒の学習意欲は高いが，学習の定着が弱いという生徒の実態を考え，反比例の学習を行う前に比例の利用を学習する単元構成とした。問題文から比例と反比例のどちらかを判断する内容は，反比例の学習が終わった後で行う。

・今日の授業は，電子黒板を利用した授業を提案した。映し出したものは教科書の指導書に添付されている CD の中にあるものである。

・学習を定着させるためには，演習の時間が必要である。いつも演習の時間を十分に取ろうと考えて取り組んでいる。本時は，最後の問題を解く時間が少なかったことが反省点である。また，類似問題を解く時間では，同じ問題を解くことの繰り返しが，数学の力を付けることになるのか悩みながら実践してみた。

②　協　議（ワークショップ形式で実施）

（＋）

・授業中の雰囲気や，学習に取り組む姿勢から，学習習慣が身に付いていると感じた。

・写真やグラフが必要なときにすぐ提示できるなど，電子黒板の利便性を感じた。

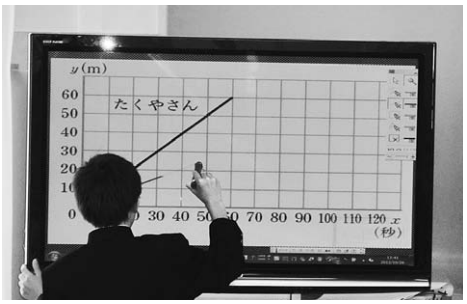
・なぜ比例といえるのかを問題文から確かめたり，グラフのかき方を確認したり，用語や基本的事項の確認が授業の中でできていた。

・「グラフができたら，眺めてなさい。答えが浮かび上がってくる。」など，生徒の意欲を喚起する声掛けがよかった。

・練習問題を解く時間が十分確保されていた。

（－）

・「この問題を解くために式，表，グラフのどれを利用すればよいだろう。」と解決方法を生徒に選択させているので，式を選んだ生徒にも解かせる時間があってもよかった。（時間との兼ね合いもあるが）



【電子黒板を使って発表している様子】

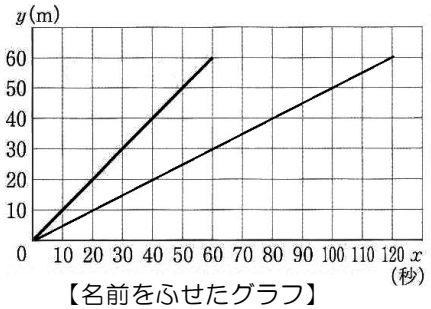
・生徒同士が関わり合いながら，活躍できる場面をもっと増やしたかった。グラフを読み取る活動ではペアで確認し合ったり，類似問題を解く場面で生徒に問題を作らせたり，まとめは生徒の言葉を生かしたりなど生徒が活躍できる場面を設定したかった。

・練習問題の丸付けを教師が一人一人に行っていた。一人一人の定着度を見取っていたともいえるが，定着が不十分な生徒への支援の時間も確保したかった。

・生徒同士で互いに教え合う場面があってもよかった。

・小学校でも比例のグラフから情報を読み取る活動を行うが，本時の小学校との違いは，$y = x$, $y = 0.5x$ の式を表したり，グラフから式を求めたりすることであったのではないか。

⑵　指導助言（山口　誉　指導主事）



【名前をふせたグラフ】

・授業を組み立てるときには，本時の基礎・基本は何か，新しく身に付ける知識は何かということについて，しっかりと吟味しておく必要がある。

・生徒の発想を引き出して，主体的な活動の場を演出したい。生徒の発想を生かそうと考えることにより，必然的に主体的な活動が生まれる。例えば，「グラフを利用して，他に問題を作ることができないだろうか。」と問いかければ，生徒たちは問題を出し合うことができたのではないだろうか。また，問題提示では，「ゆみさんのグラフはどちらだろう。」や間違ったグラフを提示し「グラフは正しいだろうか。」と問いかけることによって，正しいグラフはどうなるのかという課題意識をもたせることができ，生徒は，「グラフからどんなことが読み取れるのか。」ということを考える必要性に迫られる。

・関数の学習では，具体的な場面で，式・表・グラフを関連づけて扱うことが大切である。

4　成果と課題

⑴　成　果

・電子黒板は写真やグラフなどを必要なときにすぐ提示することができ，授業で使用する有用性を見いだすことができた。

・練習問題を解く時間を十分に確保することにより，授業の中で学習を定着させることができていた。

⑵　課　題

・本時の基礎・基本は何か，新しく身に付ける知識は何かについて，必要であれば小学校の教科書や学習指導要領を調べ，明確にして授業を組み立てる必要がある。

・生徒が主体的に活躍する場の設定と定着が不十分な生徒への支援の在り方を考えたい。

理 科 部 会

研究主題　**目的意識をもった科学的な探究活動を通して思考し，表現できる生徒の育成**

１　主題について

近年，科学的な思考力や表現力が不十分であるという指摘がなされている。このことを踏まえ，生徒が目的意識をもって観察・実験を主体的に行う学習活動を通じ，問題解決の力を高め，結果を分析して解釈し，表現するといった科学的な探究の能力を高めたいと考え，本主題を設定した。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	１０月２６日	第２回総合研究会 授業研究会・各校の実践紹介

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１０月２６日（金）　　・会　場　　花岡中学校
・単元名　　２年　電流の性質　　・授業者　　菊地　富子

①　授業者から

・実験方法を考えさせる授業をするにあたって，指導計画の段階でどのようなやり方をしたらよいか非常に迷った。
・導入で子どもたちの思考に沿った発問ができなかった。どのような発問をすれば思考を助けるような流れになったのか，自分自身に明確なイメージがないままだった。
・生徒たちは，前時までに電流測定の技能を身に付けており，スムーズに実験を進めることができた。また，実験結果のグラフ化もできていたので，前半で時間をとってしまったのが残念だった。

②　協　議

・学習シートの導入と予想の欄には，どのような考えを書かせたかったのか，そしてそれをどうやって引き出すかということをはっきりさせておけば，生徒の答えを誘導することなく意図する方向に進んだのではないかと思う。
・発問の「何が，どのように変化しているか」の「どのように」のイメージが生徒にあっただろうか。演示実験後の発問は他の内容も考えられたのではないか。
・電圧を２Ｖずつ大きくしていったらどうなるか，という課題であったので，指導案検討時に，予想の段階を大事にしたらよいのではないかと提案した。１時間の流れとして，方法や手順を自分たちで考えても考察まで進むことができるだろうと思っていた。予想で，２倍，３倍という考えが出てくれば，比例という言葉も出てくるのではないかと思った。
・今回は，１時間の中で考察まで進む授業構成であったが，実験方法を回路図に表すまでと，その後からまとめまでを１時間ずつで構成すればよかった。
・数学との関連を考えて，グラフの縦軸，横軸で，変化させる量，それにともなって変化する量にも触れた。電流，電圧という言葉に置き換えて表せば考えやすいと思った。
・電圧，電流の区別があまりできていないと感じていたので，外から加えるものなのか，流れるものなのかをはっきりさせようと思い，「加える」電圧，「流れる」電流というキーワードを使い，課題の字を強調した。
・電流と電圧の関係を調べる課題なので，違う抵抗値のものを２個使うより，抵抗１個で実験し，比例になることに気付かせるとよかったと思う。
・自分の考えが表現できる場は，今日の１時間ではどこだったのか。本来は，各グループの結果と比較しながら考えるところではなかったか。今日の授業では，予想のところになっていたように思う。
・少人数学習ということで，個別の実験環境が整っていてうらやましかった。また，細かな指示がなくても作業ができており，少ない指示で動く訓練ができていた。
・生徒たちの手際のよさに感心した。回路の組み方についての写真が掲示されており，菊地先生がそのような手立てを講じていたからだと思った。

【導入での演示実験の様子】

③　指導助言（佐々木　長則　指導主事）

〈授業について〉

・学習課題に考える視点が示されていた。課題からぶれずに，結論，考察へと導いていける有効な手立てだと思う。
・実験を計画する活動の設定については，１時間設定で行うのか，または２時間設定にするのか，単元のどこで設定するのかということを，計画を立てる段階で考えていきたい。
・小学校で培ってきた力を明らかにして,条件に着目して思考させる活動や比較させる活動,関係付ける活動などに活用していきたい。
・少人数学習を実施し，実験の個別化を図っていた。学年が上がるにつれて，何もせず黙っている「お客さん」が増えていく傾向がある。そのような生徒をつくらない仕掛けが大事である。輪番制などで全員が実験に携わるようにし，技能を習得させたい。
・生徒たちの観察・実験の手際がよかった。－端子の選択もスムーズであった。これは実際に生徒に経験させていないと身に付かない技能である。

〈これからの授業づくりで考えていきたいこと〉

・導入の場面で事象提示などをして，生徒に気付かせたり，疑問をもたせたりしながら問題を見いだす活動を大事にしたい。今日は，電池の数と豆電球の明るさということが提示された。それらを電流と電圧に置き換えて考えていきたかった。回路の種類，電流と電圧の大きさなどの条件が情報として分かれば，解決の糸口が見えてくる。電圧を大きくしていくと電流がどう変化していくのかを生徒から引き出し，シートに書かせてから交流させたり，先生が生徒から引き出した考えを板書したりして顕在化していく手立てを講じてほしかった。それらのやりとりの中で，実験装置を選定できる。生徒から１Ｖずつ増やしていくというアイディアが出たのはよかった。
・グラフのかき方については繰り返し指導していきたい。
・セメント抵抗を使っていたので,やけどなどの安全指導を事前にしなければならなかった。使用する器具については事前に点検，整備をお願いしたい。
・考察する内容をシートに示しておくのもいいが，予想と結果を照らし合わせながら考察させてもよかったのではないか。予想で規則正しく変化すると予想した生徒は，やっぱり規則正しく変化するんだと感じるし，比例になるのではと考えた生徒は，やっぱり比例になるんだと思うはずである。いずれにせよ，結果から読み取らせる発問が必要である。
・教科書が新しくなって,大きく変わったのは,小学校での既習事項が載ったところである。小学校での取り組みを踏まえて，つながりを大事にして考えさせていきたい。
・全国学力・学習状況調査の調査結果の活用による指導改善に向けた説明会資料から，指導改善のポイントとなる項目を次に挙げる。

☆問題を見いだし，観察・実験を計画する学習活動
☆観察・実験の結果を分析し解釈する学習活動
☆科学的な概念を使用して考えたり説明したりするなどの学習活動
★結果や考察をきちんと記述させる，話し合い活動を導入する。
◎自ら考えた仮説をもとに観察・実験の計画を立てさせる指導を行った。
…先生６２％，生徒４６％　意識の差 → 指導方法の工夫・改善が必要。
◎理科の授業で，自分の考え（や考察）をまわりの人に説明したり発表したりしている。…中学校２７％ → 言語活動の充実が必要。

⑵　テーマ研究

・研究主題に関連して，各校から持ち寄った実践資料を基に情報交換を行った。

4　成果と課題

⑴　成　果

・ねらいを明確にし，学習活動と整合させた授業づくりなど，指導改善のポイントを共通理解することができた。
・テーマ研究では，日頃の授業実践で試みたことや工夫したことを報告し合い，理科で目指す生徒の姿について考えるよい機会となった。

⑵　課　題

・小学校で培ってきた力を明らかにして，条件に着目して思考させる活動や比較させる活動，関係付ける活動などを重視していく。
・中学校理科における言語活動の充実を更に図り，考察・分析・解釈する過程を通して科学的な思考力・表現力を養っていく。

音 楽 科 部 会

研究主題　**豊かな感性をもち，自ら音楽活動を楽しもうとする生徒の育成**

1　主題について

知覚・感受したことを基に思考・判断し音楽表現や鑑賞につなげていく一連の流れを大切にし，生徒の音楽の力を伸ばすための授業づくりについて研究をしていくこととした。

2　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会　研究主題設定・年間計画作成
９月１２日	授業等交流　　授業研究会（成章中学校・指定訪問）
１０月２６日	第２回総合研究会　テーマ研究（成章中学校）

3　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　平成２４年９月１２日（水）　　・会　場　成章中学校

・題材名　２年　合唱曲の魅力を生かして表現を工夫しようⅠ　・授業者　日景　美智子

①　授業者から

・本校は少人数のため合唱活動は困難である。しかし授業者自身も力を付けたいという思いから，あえてこの題材を設定した。

・９人ずつの２グループに分けることで，「練り合い」の場を設定した。

・題材を貫く共通事項として強弱，転調，テクスチュアを取り上げた。これら音楽の諸要素同士の関わりを扱いたいと考えたが,前段階で十分に知覚・感受させることが難しかった。そこで本時では強弱一本に絞ることとした。

・「思いや意図が伝わるような表現の工夫をさせる」という授業者の意図からずれてしまうことが予想されたため，演奏を録音することは控えた。そのかわりに，各グループ内に一人ずつ聴き役の生徒を置いた。

・本時の自己評価カードから「教え合い」の充実を生徒が実感していることが見て取れた。

②　協　議

・付箋を活用することで「喉元から声が出ない」状態を解消し，活発な言語活動を促すことができていた。質の高い話合いであった。

・知覚・感受したものを手掛かりにした話合いであればなおよかった。また強弱について考える授業のはずが，音程を気にしてしまうなど本時のねらいからずれてしまう場面も見られた。教師がもっと牽引してもよかったのではないか。

【練習風景】

・楽譜で勝負するのでなく，歌詞の内容から強弱の根拠を考えさせるべきではないか。

・生徒を褒める言葉が，ねらいに対しての適切な評価であればよかった。

・本時に取り上げた箇所で強弱を扱うのは難しいのではないか。むしろ転調，テクスチュアであれば扱いやすかった。

・生徒たちの意欲を生かすため，知覚・感受の段階をもう少し充実させるべきだった。

③　指導助言（小林　秀雄　指導主事）

・様々なことを拡大楽譜から読み取れるようになっていた点がよかった。思いや意図を付箋で書き込めるようになっていたのもよい。ただし，楽譜を読もうとする素地がなければ，楽譜のよさは生きてこないことに留意する必要がある。

・練習→話合い→練習…の繰り返しで学習が進んでいく点がよかった。「導入で歌い，話合いの時間を長く取って最後にまた歌う」という流れにすべきではない。

・教材曲について，「おそらくここでつまずく」という点を教師が事前に的確に予想し，指導の手立てを工夫することが大切である。

・短いスパンで練習できるような方法を生徒に定着させるとよい。

・教材曲のよさや面白さが，どの音楽を形づくっている要素の働きによるものかを把握し，生徒がそのポイントに気付くための手立てを講じることが大切である。音楽表現の創意工夫は音楽の知覚・感受が基になって生まれる。本題材であれば，強弱・転調が特徴的な楽曲や演奏の聴取をするなどして，全ての生徒に知覚・感受させる活動が不可欠である。

⑵　テーマ研究

・期　日　平成２４年１０月２６日（金）　・会　場　成章中学校

①　協議Ⅰ　歌唱教材について

・生徒たちが達成感，成就感を味わう授業にするためには，知覚・感受させたいポイントを絞り込み，自分が今日できたことを明確にすることが大切ではないか。

・１つの楽曲の前半・後半，あるいは２つ以上の楽曲の比較聴取というのも，要素を知覚・感受させるに当たって有効な手段である。

②　協議Ⅱ　鑑賞教材について

・学習課題の設定次第で知覚・感受する要素に対する興味・関心も変わってくる。もっと学習課題にこだわりをもつべき。

・比較的長い楽曲を教材とする際には，知覚・感受させる段階で全曲を扱う必要はない。全ての生徒に要素を知覚・感受させるためには，特徴的な部分の絞り込みが必要である。

③　指導助言（小林　秀雄　指導主事）

・「感じ取ったこと」が大切にされていない授業が散見される。そのような授業では手立てが不十分なことが多い。知覚と感受を一体的に扱うことが大切である。

・どの領域，どの活動においても，知覚・感受が基となる。知覚・感受させる手立てのバリエーションをたくさん作ってほしい。また，今後も本部会の会員同士でお互いに情報交換して紹介し合い，共有してほしい。

・学習活動の工夫に加え，絞ったポイントを知覚・感受しやすいような音源を用意・工夫することが大切である。

４　成果と課題

⑴　成　果

・音楽的なよさや面白さを全ての生徒に知覚・感受させるための手立てについて，広く情報を交換することができた。

⑵　課　題

・「感じ取ったこと」を大切にする授業づくり，また手立ての創意工夫が今後の課題である。

美 術 科 部 会

研究主題　**豊かな感性をもち，意欲的に表現しようとする生徒の育成**

１　主題について

今年度は，特に鑑賞活動に研究の視点を当て，美術作品などのよさや美しさを感じ取り，自分なりの意味や価値をつくり出したり，自分の見方や感じ方を整理して他者との交流の中で見方や感じ方を広げることができるような授業づくりを目指して，本テーマを設定した。

２　今年度の取組

月　　日	実　　践　　内　　容
４月１２日	第１回総合研究会　研究主題設定・年間計画作成
９月２０日	美術科授業研究会（田代中学校）
１０月２６日	第２回総合研究会（田代中学校）　テーマ研究・各校の実践紹介

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年９月２０日（木）　　・会　場　　田代中学校

・題材名　　２年「探ろう！余白の美」　　・授業者　　成田　麻衣

①　授業者から

・グループ内では同一の絵に興味をもつとは限らないので，見たい絵が同じ者同士でグループを作った。

・表現活動をしていると「ここに何を描けばよいか」と質問してくる生徒がいる。余白で表現することもできるということを伝えたかった。

・鑑賞する作品の選択→命あるものという視点で選んだが６枚の提示した作品の選択はよかったのだろうか。

【上村松園「待月（まちづき）」から
想像を膨らませる生徒たち】

②　協　議

・選んだ作品を，表情で様子を読み取ろうとしている人もいれば，色から読み取ろうとしている人もいた。

・上村松園「待月（まちづき）」の鑑賞は，様々な視点からの発言があり深まった。

・授業後半での「『余白の美』を個で探ろう」という発問が，ぼんやりしていた。学習課題「余白からはどんなことが感じ取れるだろう？」という発問でよかったのではないか。

・鑑賞での発言には，自分の生活経験などが感想（意見）に表れてくることが多い。

・日本画の本質的なよさとは，見る人が想像力を働かせることができる点。

③　指導助言（嘉藤　貴子　指導主事）

・子どもの発言の取り上げ方が上手で，進め方もテンポよく，内容の濃いものとなった。１時間では無理と思うような内容をよく行った。

・ねらいをどこにもっていくのかが大事である。前半の松園の絵の鑑賞で，色，形，描き方（表現の繊細さ）など美術的要素にふれ，後半の鑑賞では「余白」に特化した進め方をするとよかったと思う。

・余白がない絵との比較で余白の効果を確かめられた。日本の絵と西洋の絵を比較し，表現の違いに気付くことができた。

・自分で感じ取る，とらえることが大切である。

・美術の時間の話合いは，収束させない。どんな小さな意見も取りこぼさないようにする。

・構図としての余白の考え方は，作者によって余白の意図が違う。想像させるためであったり，描きたい物を目立たせるためであったりする。
・日本文化と西洋の文化の違いは，西洋絵画は，場面，時間，一瞬を切り取っている。日本絵画は一瞬ではなく時間的，空間的に広がりがある。
・生徒たちは，自分の生活経験と照らし合わせて，絵の見方が変わっていければいい。

⑵　テーマ研究

・期　日　　平成２４年１０月２６日（金）　　・会　場　　田代中学校

①　系統性を考慮した鑑賞授業
②　日頃の実践題材の紹介
③　指導助言（嘉藤　貴子　指導主事）

・鑑賞活動は，子ども自身がよさや美しさを感じ取り，味わい，自分なりの意味や価値をつくり出す創造活動である。自分の見方や感じ方を整理し，他者との交流の中で見方や感じ方を広げることが必要である。これには言語活動が大きく関わってくる。
・造形的なよさや美しさに気付かせるようなコーディネートが必要である。
・鑑賞の活動とは，鑑賞の能力を高める活動である。参考作品を見る，材料を見る，など様々であるが，見方や感じ方が変わるような手立てを打つ必要がある。その鑑賞の活動を通してどんな力が付くのかを押さえておかなくてはならない。
・「Ａ表現」及び「Ｂ鑑賞」の指導については相互の関連を図らなくてはならない。鑑賞の学習の中に表現において発想や構想の場面でイメージを膨らませるような視点や，制作手順をたどりながら表現方法に着目させるような視点を位置付ける。また，中学校３年間の年間指導計画の中でどの時期にどのタイミングで行うのかについて考えてほしい。
・３年間の中でどのように系統立てて積み重ねていくのか，それぞれがばらばらになってしまわないように，１時間１時間を大切に扱わなくてはならない。
・美術を美術たらしめているのは共通事項そのものである。これがなければ美術の授業ではない。
・美術館や博物館を積極的に活用してほしい。近くに美術館がなければ何ができるか？例えば「学芸員を呼ぶ」「ウェブサイトを活用する」などについても考えていきたい。また，古くからある建築物も，活用できる視点がないかな？と考えてみてほしい。
・美術文化についての理解を深め，（１年）美術文化に対する関心を高める。（２・３年）諸外国の美術や文化との相違と共通性に気付き美術文化の継承と創造への関心を高める。
・美術文化の伝統的な側面と創造的な側面に視点をあてた授業づくりをする。美術文化への理解は歴史の勉強ではない。名前，時代を学ぶのではなく，〔共通事項〕である表現の形，色，など美術的な視点で見ていくことである。美術を美術たらしめているのは共通事項そのものである。これがなければ美術の授業ではない。
・普段からちょっとしたしかけを学校のあちこちにしておく。日常的に「見ることは楽しい」「表現することは楽しい」と思わせる工夫をしてほしい。定期的に作品を入れ替えることなどもその一つとして大事にしてほしい。また，図書室などにある美術の資料をできる限り生徒にふれさせるようにしてほしい。
・「この題材で子どものにどんな力が付くのか」ということを常に考えなくてはならない。教科書を教えるのではなく，教科書・資料集を使って，指導要領を教えていくのである。

４　成果と課題

⑴　成　果

・他校での鑑賞題材の実践例を知ることができ，今後の実践の参考とすることができた。
・鑑賞活動の意義や年間計画での位置付けを確認することができた。

⑵　課　題

・鑑賞教育は単発で行うのではなく，３年間という期間の中で表現と結びつけた計画を立て，それに沿った実践をしなくてはならない。
・今年度は研究授業を総合研と別の日に行ったが，来年度は総合研の日に行うこととした。

保 健 体 育 科 部 会

研究主題　**豊かなスポーツライフの基礎を固める体育学習**
～評価を生かした支援や指導の工夫～

1　主題について

学習指導要領改訂の趣旨に基づき，３つの視点で研究を進めることとした。

⑴幼・小・中・高の連携を通して，系統性を踏まえながら学習内容及び活動内容を明確にすることで，生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てることができるであろう。

⑵授業の中で「わかる」と「できる」を体得させていくための指導法の工夫・改善に取り組むことで，基礎的・基本的な知識・技能の習得を図ることができるであろう。

⑶表現方法や練習・鑑賞・発表・試合などの仕方を考えたり話し合ったりすることで，コミュニケーション能力を培い，論理的な思考力をはぐくむことができるであろう。

以上，上記に示す視点で研究を推進することで，生涯にわたる豊かなスポーツライフの基礎を固める体育学習になるであろうと考え，本テーマを設定した。

2　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題の確認 第２回総合研究会の授業者決定と研究会のもち方について	７月１２日	第２回総合研究会（下川沿中）
		１０月２６日	第３３回秋田県学校体育研究大会大館大会に全員参加

3　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　平成２４年７月１２日（木）
・会　場　下川沿中学校
・単元名　３年「武道」：柔道
・授業者　佐藤　勇一

【固め技ゲームの様子】

①　授業者から

・今日の授業は４観点の「思考・判断」を見取ることをねらいとして実施した。生徒が思考し判断するためには，基盤となる知識・理解が大切だと改めて実感した。
・単元を進めるにあたり，技能の習得には学び直しが必要であり，思った以上に時間を要した。単元計画の時数には余裕をもつ必要性を感じている。
・生徒は頑張ってくれた。優しく素直な生徒が多く，直向きに学習へ取り組む。反面，闘争心が薄くなかなか授業に勢いが生まれない。
・本時は運動量が少なかった。これは，本時で考えた連絡技を次時の学習を通して定着させるという２時間計画に則ったものである。

②　協　議

・視聴覚機器の活用が効果的だった。自分の動き（技能）を視覚で確認できることのメリットは非常に大きい。「追っかけ再生」機能の付いた機器は各校に１台はあるので，ぜひ活用していきたい。

・生徒の学びを促すためには，学習課題に必然性をもたせる必要がある。やはり前時の学習，特に「まとめ」が大切になってくる。前時のまとめが見える学習シートを工夫していきたい。
・生徒の技能向上への意欲を喚起するためには必要感をもたせなければならない。今日の授業では，前時までの真剣な動き（自由練習）の中で，「思うように技がかからない」という状況の中から「連絡技の必要性」が生じる。だから，段階的な指導やルールの工夫などを踏まえ安全面に配慮しながらも，自由練習は欠かせない。
・事故防止の観点からいうと，自由練習では，技をかけられたら「潔く投げられる」ことの重要性をしっかりと指導することが大切である。
・学習過程で生徒に意図的に思考させる「考える学習」では，実際に動きながら考えさせる方法と座ってじっくりと考えさせる方法がある。指導要領では，体育の学習に「学び方」を身に付けさせることも期待されている。それは，あくまでも「主運動に親しみながら身に付けさせる」ことをねらいとしている。だから，体育では思考を見取る学習においても「動きながら」ということが欠かせないのでないか。

【連絡技を習得し合う学習の様子】

⑵　テーマ研究（各校の柔道の実践例や課題を持ち寄り，情報交換を行った。）

⑶　指導助言（高橋　敏治　指導主事）
①生徒たちの表情がよく，生徒同士の挨拶や返事，礼儀正しさなどの学習規律の素晴らしさから学級集団としての質の高さがうかがえる。
②学習課題を効果的なものにするためには，単元指導計画に基づきながらも，本時と前時，本時と次時のつながりを大切にしてほしい。
③今回の授業では単元を通して自由練習を実施していないようだが，柔道の特性に触れさせ生徒の意欲を喚起するためにも，次のことに配慮しながら実施してほしい。
・３年間を見通した指導（技の構造と系統性）
・余裕のある単元指導計画（基礎・基本の定着と確認）
④指導要領では「連絡技」とは「相手との攻防に応じて，さらに効率よく相手を投げたり抑えたりする技」と記載されている。
・「さらに効率よく」という視点から，前時までの学習との関連が大切である。
・「攻防に応じて」という視点から，主運動を通した学習が不可欠である。
⑤武道は１・２年生が必修である。３年生は球技との選択になるが，学校事情により選択とせずに柔道を実施することもできる。（教員数や施設の条件）

４　成果と課題

⑴　成　果
・「わかる」と「できる」の橋渡しをするのが思考・判断であり，そのためには，思考のよりどころとなる知識を事前にしっかりと身に付けさせる必要があることを再確認できた。
・体育における思考は，「動きながら」「動きを通して」ということを部員で共有できた。
・視聴覚機器の活用が「できる」を体得させていくためには効果的だった。

⑵　課　題
・効果的な教材・教具の開発と，その情報交換の機会が必要である。

技 術 ・ 家 庭 科 部 会

研究主題　　**活用力を高める授業の構築**

１　主題について

昨年１０月に，能代山本地区を会場に東北技術・家庭科教育研究大会が行われた。大きな大会を終え，秋田県技術・家庭科研究会では今年度から新たに，身に付けた知識や技術を「活用する」ことに着目した研究テーマ設定を行った。本部会では，秋田県技術・家庭科研究会の研究テーマを採用して研究を進めた。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	１０月２６日	第２回総合研究会 授業研究会（第一中学校）

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１０月２６日（金）　　・会　場　　第一中学校

・題材名　　生活に役立つものをつくろう　　・授業者　　須合　康

①　授業者から

・本時の学習内容は，今年度新たに学習指導要領に加わった「評価と活用」に関する内容である。本来，題材の終わりに行うものであるが，研究会という機会に行うこととした。

・文科省教科調査官の講演の中で，「評価と活用」の授業を行う際に，①社会的側面，②経済的側面，③環境的側面の３つの観点から生徒に考えさせるべきである，という指導があったことから，３つの観点を意識して授業を展開した。

・生徒には，ペットボトルキャップ回収は，大館市特有のものであることに着目させ，成果と課題を考えさせるようにした。

・環境的側面について着目し，そこから→経済的側面→社会的側面へと盛り上げていければよかったがなかなかうまくいかなかった。

・評価問題の実施は，一中ですべての教科で行っている研究である。終末のまとめのところがうまくまとまらなかったと感じる。

②　協　議

・導入は写真ではなく，実物で行いたい。

・生徒が配付された資料から必要な情報を読み取ったり，線を引いたりペンで強調したりする学習活動が，技術・家庭科の授業では無かったと思うので新鮮であった。

・「持続可能な社会」という言葉が，今日初めて授業で出した言葉であれば，子どもたちにとってすごく難しいように感じた。また，「持続可能な社会」を作ることが本時の学習課題に対する答えなのではないか。

・授業の終末で評価問題を行う授業のパターンが，本教科にふさわしいか疑問が残った。

・実際にリサイクルされている工場などを，子どもたちは見学した経験はあるのか。

→小学校５年生の社会科見学で，秋田ウッドを訪れている。

・班で話合い，全体で共有されたことが，個に返る場面があればよかった。また，全体で練り合う場面があればよかった。

・子どもたちからは，解決策として，二酸化炭素の削減という部分だけが出され，取りだたされたように思う。先生としてはどういう答えを準備しているべきだったのだろう。

→リサイクル工場の立地条件，運搬にかかるコスト，化石燃料の消費，自分の生活の見直し（必要のないものは買わない）などが考えられる。

・４人グループでの話合いを行う際のルールを決めていくべきだと思う。１～４までの番号，司会者や発表者，役割を固定するのかローテーションさせるのか。

・評価基準のＡ達成を示すことはどのような効果があるか。

→学校の研究として，Ａ達成を示すことにしている。Ａに到達する力がある生徒が，Ｂ達成で終わってしまう，などのことが避けられるのではないか。

・今日出された課題はリサイクルを進めていく上での課題であって，リサイクルそのものは必要であることをしっかり押さえたい。リサイクルを進めていく上での課題はあるが，ゼロから作るよりも燃料は使われていない。

⑵　指導助言（八代　英樹　指導主事）

・教室に入ってきた時，生徒のあいさつが立派であった。授業に臨む態度も真剣であった。反応の良い生徒たちを上手に利用して，テンポ良く授業が展開された。

・今日の授業に必要なことについて，前時のことを取り上げながら，課題提示までうまく進めることができた。

・大変見やすく学習の流れが分かる板書であった。また，学習シートも考えるのに必要な情報があり，資料の扱い方に関する指導も丁寧であった。

・グループでの話合いは，役割を決めて行うのは効果的であると思う。また，交代制にすることも様々な役割を経験することになる。

・生徒から出された意見を基にして，うまくまとめにつなげることができた。うまくいっている大館のリサイクル法をさらに浸透させていこうという考え方もあるのではないか。

・家庭分野でもリサイクルに関する内容が扱われる。家庭分野では，家庭での「一番効果的なリサイクルの仕方とは」など，リサイクルの方法が扱われる。技術分野ではリサイクルありきではなく，リサイクルすることのメリットと問題点を明確にし，技術的な視点からどうするべきか考えさせる必要がある。

・「評価と活用」について扱う際には，「役割と影響」「効果と課題」など，光と影について明確にし，それを踏まえた上で自分はどうするのか，という判断させることが大事である。

４　成果と課題

⑴　成　果

・学習指導要領に加わった「技術の評価と活用」に関する授業展開例を，会員で共有することができたこと

⑵　課　題

・「技術の評価と活用」に関する内容について，光と影を明確にした授業展開を積み重ねていくこと

【リサイクルを進める上での課題について考える生徒】

英 語 科 部 会

研究主題　**４技能を総合的に活用し，積極的にコミュニケーションを図ろうとする生徒の育成**

１　主題について

新学習指導要領では，「聞くこと」，「話すこと」，「読むこと」，「書くこと」などのコミュニケーション能力を総合的に育成することを目標としている。英語科では昨年度もこの主題で研究を進めてきた。さらに新学習指導要領の目指す生徒の姿や指導上留意するべき点などについて共通理解を図り研究を深めるために今年度も本主題を設定した。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	１０月２６日	第２回総合研究会 授業研究会(下川沿中学校) 主題について各校の実践紹介

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１０月２６日（金）　　・会　場　　下川沿中学校
・題材名　　１年　Ｕｎｉｔ８　ナンシーに会いに　　・授業者　　豊嶋　浩子　本多　牧子

①　授業者から

・川口小から本校に赴任し，本クラスの生徒とは昨年度から一緒に学習している。生徒同士仲がよく，インタビューなど他とかかわる活動を好む生徒たちである。本授業でもどう取り入れるか工夫した。
・４月に小から中への橋渡し的な意味で外国語活動用教材などを使ったが，その際に where や前置詞には触れていた。疑問文にしたり答えたりする活動は大変そうだった。（豊嶋）
・豊嶋先生は小学校での経験があり，外国語活動で生徒たちがどのように学んできたか熟知している。普段から外国語活動の資料を授業に生かしており生徒たちも小学校からそのままのよい雰囲気で学んでいる。
・ペア活動の前に生徒が２つのグループに分かれ，自分の話す文の言い方や答え方をそれぞれの先生のもとで練習する場面があった。練習をしたことを話すという活動が生徒にとってトライになるのかと迷ったが，苦手な生徒たちにとっては練習なしでは難しいと思い，今回のような手立てをとった。（本多）

②　協　議

・外国語活動の教材活用がすばらしい。導入の段階で見覚えのある where のページがスクリーンに映し出されたのを見て，生徒たちが「懐かしい」と声をもらしていた。
・生徒の表情が明るく，雰囲気がよい。先生のきめ細やかな指導が行き届いており，学習訓練がしっかりなされている。
・授業の始まりのあいさつからＴ１，Ｔ２の「あれ？～がない。どこかしら」「それは～にありますよ」 というやりとりが始まり，それが導入にうまくつながっていた。
・ペアで単語を並べ替えて文章を作る活動は全員意欲的に取り組んでいたが，完成しても答えることのできるのは１ペアだけだった。また，正しい答えがきちんと示されなかったため，できないままで終わってしまったペアもあった。

・基本文を繰り返し丁寧に口頭練習すれば，２人の先生のところに分かれて練習しなくても活動に進めたのではないか。その分の時間で発展的な自己表現活動ができたかもしれない。
・本時のねらいが「表現」であったが，「答えを練習して正しく話す」ことは表現の観点ではなく，知識・理解をねらったものだったのではないか。

⑵　テーマ研究

各自テーマに基づく実践を持参し，紹介し合った。Let's　read のような長い英文を読んだ後感想を書かせるといった reading → writing へ発展させる実践や自己紹介文の発表から質疑応答へ発展する writing → listening → speaking のような指導事例などが紹介された。

【ペア活動に取り組む様子】

⑶　指導助言（石井　むつみ　指導主事）

①　授業について

・授業開始前から英語の歌や手拍子が教室に響き，とても雰囲気のよい授業であった。
・教師の指示・問いかけへの反応や学習態度から信頼関係が感じられ，意欲が高いと感じた。
・他者とかかわり合いながら理解を深めていく学びの姿はまさに新学習指導要領の目指すものを具現化している。
・なにより先生が笑顔で授業を楽しんでいる。小学校の経験のある豊嶋先生の生徒に寄り添う姿勢を中学校の教師として見習いたい。
・小学校との接続を意識した授業であった。生徒は小学校で体験した chants やゲームなどに触れることで安心し，中学校の学びへの期待感をもつ。このような情意面での接続が大切である。
・教材の準備や場面設定がよく工夫されていた。質問する必然性のある場面を与えることで意欲をもたせることができる。
・ゴールをどこに設定するべきであったか。指導案では評価の観点は「表現」とある。ペア活動で情報をやりとりし，その情報を書く活動は「知識・理解」の段階にとどまる。表現をねらうのであれば，知識を活用し，自分の言葉で自分の考えや思いを書いたり述べたりするところまで発展させて欲しい。

②　テーマ研究について

・「総合的」が「バランス」を意味するのに対し，「統合的」は「関連付け」を意味する。指導に際しては４技能を総合的に指導し，統合させていくことをねらう。１時間の授業内に４技能の活動をすべて行わなければならないというのではない。年間を通してバランス良く指導することが求められている。

４　成果と課題

⑴　成　果

・小学校外国語活動を中学校英語へ結び付けていく指導の在り方を学ぶことができ，特に今後の中１生への指導の参考になった。
・各校から実践例を持ち寄り，４技能を総合的に身に付けさせるための授業での工夫などを情報交換することができた。また，今回は少人数グループでの話し合いを行い，全員の先生方が意見をたくさん話すことができ研究が深まった。

⑵　課　題

・指導案にはこの単元（題材ではなく）でできるようになって欲しいことは何か，生徒にどういう姿になって欲しいのかを明確にし，単元の目標として明記していく必要がある。

道　徳　部 会

研究主題　**人とのかかわりを通して，**
よりよい生き方を目指そうとする生徒の育成

１　主題について

今年度は，自分の考えをもち，他者とのかかわり合いを通して，相手の気持ちもとらえながら考え，生き方を見つめたり，考え直したりすることをねらいとして本主題を設定した。

２　今年度の取り組み

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	１１月６日	第２回総合研究会 授業研究会（矢立中学校）

【教師の説話を聴く様子】

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１１月６日（火）　　・会　場　　矢立中学校
・主題名　　２年「家族のきずな」＜４－（６）＞　　・授業者　　長岐　孝子
・資料名　　「きいちゃん」（アリス館刊　作者　山元　加津子）

①　授業者から

・価値について，以前ほぼ全員から家族への不満の声がたくさん出たことがあり，それ以来，この項目について取り上げようと思っていた。
・資料については，子ども側からの目線で考えやすい，本資料「きいちゃん」を活用した。
・中心発問は当初「きいちゃんが『うんでくれてありがとう。』と話したのは，なぜだろうか」としていたが，同じ資料を使って他の学級で授業を行ったところ，家族への感謝を感想に書く生徒が多く，中心発問を「きいちゃんは，どんな気持ちでゆかたを縫い続けたのだろうか。」にして，今回のねらいにせまるようにした。

②　協　議

・あらためて，中心発問を「きいちゃんは，どんな気持ちでゆかたを縫い続けたのだろうか。」にしてみてどう感じていますか。
→発問の後，少人数での話し合いももったせいか，ほとんどの生徒がねらいに近い文章を書いていた。
・自分を振り返るとき，「お姉さんに『私の誇り』と言われたきいちゃんは？」と言われた側で発問した訳について教えてください。
→親側の気持ちでなく，子ども側からの気持ちで考えさせたかったから。
・ねらいを考えるときに「家族の一員として」を入れたいのであるが，そのことで価値にせ

まりにくくなる不安があった。
→きいちゃんに沿って進めるのであれば，きいちゃん自身が自分を家族の一員と思っていないのでは，ということに気付かせれば，「家族の一員として」につなげることができるのではないか。

【自分たちでリレーをしながら発表する様子】

⑵　テーマ研究
・各校実践資料紹介
⑶　指導助言（小林　秀雄　指導主事）
・導入のアンケートが資料に上手につながった。自分の家族への思いは人前でなかなか話せるものではないが，話せているのがいい。
・発表のリレーは使い方がよかった。失敗することもあるので気をつけたい。
・終末はさらりとしていて，押しつけがましくないのがよかった。
・中心発問は「きいちゃんが『うんでくれてありがとう。』と話したのは，なぜだろうか」だと思う。ねらいに一番せまるものがそれだと思う。
・中心発問の前には必ず押さえておくべき内容がある。それによりより価値にせまることができる。中心発問が決まったら文言(言い方)を考える。
・面会の時の母の愛情にも触れたかった。きいちゃんの気持ちにずれがあると話した生徒に問い返すと出たと思う。
・発問構成について
１．ねらいを絞る。
今日の資料は家族に愛されていることで構成。家族の一員については別資料で行う。
２．中心的な場面を見つけ，中心発問を考える。
生徒の予想される反応ができない発問は，だめな発問である。また，予想される反応については他の教師に見てもらうと，多様な予想を用意することができる。多様に用意することで予想される反応は精査される。
中心発問でねらいにせまるための前振りを仕掛けないと中心発問が生きてこない。
３．導入，展開，終末を構成する。
今回家族について書くための質問は，「自分の家族について考えたことを書きましょう」で十分だったと思う。
４．資料を離れる。
登場人物で考えていくと，自分を振り返るときにできないことが多い。生徒が人物の心情に入っていくことが必要である。

4　成果と課題

⑴　成　果
・十分な協議を重ね，発問や授業の構成などについて確認することができた。
・中心発問に用いる文言の大切さを確認することができた。
⑵　課　題
・中心発問の内容をどのように吟味していくか，今後の授業を通して高めていく必要がある。
・資料に自分の心情を入り込ませて読み取るように指導していきたい。

特 別 活 動 部 会

研究主題　**望ましい集団活動を通して，**
よりより集団を築こうとする生徒の育成

１　主題について

子どもが集団の中で自己の存在に肯定感をもつとともに，他者の存在も認めながら，よりよい生活を築こうとする目標意識を高めていくためには，学級集団の意義が問われると考える。そこで，どのような学級集団の形成を目指すのか，また，どのような集団活動を取り入れるのが望ましいかという課題を追究するために本主題を設定した。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	１１月８日	第２回総合研究会 授業研究会（花岡中学校）

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１１月８日（木）　　・会　場　　花岡中学校
・単元名　　３年 進学・就職の準備と実現への努力　　・授業者　　菊地　裕之

①　授業者から

・本題材について，本来であれば２年生の題材と思われるが，３年生がこれから進路選択をする前にもう一度，「働くこと」や「仕事」について，じっくりと考える時間をもたせたかった。
・学級の雰囲気は，やさしい感じがある。話合いをさせるに当たっては，どのくらい意見が出るのか心配なところがあったが，思った以上に挙手や発表があった。
・パネルディスカッションということで，パネラー同士の質疑応答は事前に指導をした。フロアーについては指導をしなかったので，どんな質問が出てくるのか，おもしろみを感じながらの授業であった。
・授業の内容を含め，話合いのもち方について，いろいろと教えていただきたい。

②　協　議

・職業を選ぶ基準について，４つであったが，その経緯は？
　→アンケートの結果から，４つの基準に設定し，様々な観点で話合いができると考えた。
・授業の最後の手紙は，どのようにして２人に決めたのか？
　→仕事に関することから，幅を広げて，地元以外で働かれている方に手紙をお願いした。
・４人のパネラーの決定については，どうであったか？
　→価値基準についての作文を書かせ，その中で最も主張が強いのを選び，パネラーとした。
・これまでの学級活動の中で，生徒が司会をした活動はあったのか？
　→生徒数が少ないので，誰かが司会をして話し合う場面はよくあった。
・司会の生徒とパネラーの生徒とどのような打ち合わせや指導があったのか？
　→フロアーの生徒には，発言や質問する力のある生徒が多くいた。パネラーとは，時間をかけて打ち合わせを行った。質問を出し合うようにし，話合いが深まるように指導した。
・職業観や勤労観について考えを深めるためのパネルディスカッションは効果的であった。
・職業についての学びや積み重ねについては，職場訪問や職場体験で事前・事後のアンケート等でその変容を把握する程度であった。

・生徒主体の活動について，話合いについては，生徒が主で学活等を進めることが多い。
・３年生にとっては，今日の授業内容が適切であったように感じた。
・授業のねらいについて，一般的に３年生のこの時期は，進路の不安や悩みを乗り越えようだったり，進路選択の価値基準だったりするが，今日の授業は否ではないように感じた。
・授業のねらいの「深める」とは，生徒の考えが変わる，生徒の変容が見えると捉えている。
・話合いの中で，パネラーが悩みながらも受け答えする場面があってよかった。
・話合いのよさは一人の考えを共有して，自分の考えを深めることができるところである。
・職業に関する価値観の変容について，その理由等を聞く場面があれば，さらに職業観についても深まった。

⑵　テーマ研究
・部会テーマ「望ましい集団活動を通して，よりよい集団を築こうとする生徒の育成」に基づいた各校の実践例を紹介し合った。様々な取り組みを学ぶことができた。

【パネルディスカッションの様子】

⑶　指導助言（檜森　秀樹　指導主事）
・生徒主体の授業であり，パネラーやフロアー等の授業の展開は，非常によかった。
・教師と生徒，生徒と生徒の信頼関係がしっかりとできている。
・パネラーは自分の考えをもって臨んでいたので，フロアーにも自分の考えをしっかりともたせて臨ませたいものだ。言葉による助言が，司会者からでればよりよかった。
・進路コーナーは，教室内に設定し，進路について見通しがもてる掲示をお願いしたい。
・指導要領の解説には，指導についての学年が示されているので，計画的に指導してほしい。
・３年生は，１，２年生の経験をまとめていく時期。いろいろな選択や決定があり，志望校の選択・決定，職業の選択・決定，選択理由などがある。
・指導には，３年間を見通した計画が必要である。
・学級活動(1)では，子どもが考えた活動計画で話合い，集団決定し，実践する。
・学級活動(2)では，多くの考え方に触れ，自己決定し，実践する。
・学級活動(1)は集団で決め，みんなでルールを守る。小さな活動を繰り返す。学級活動(2)では，いろいろな話を聞き，自己決定し，自分で決めたことを実践し，自己評価する。粘り強さ，自己指導力など。学級活動(1)(2)の実践から，道徳的な価値に結び付けていく。
・これからの学級活動では，話合い活動や実践の中から，生徒指導的な面や道徳教育と結び付け絡めていくことも大事である。
・指導案については，国研の資料を，評価規準も含めて，利用してかまわない。評価の段階では，身に付けさせたい力と具体的な姿を評価規準として示せれば，見取ることができる。
・鷹巣小，鷹巣中での授業を各校の実践に生かしてほしい。また，今日，持ち寄った各校の実践例を生かしてほしい。

４　成果と課題

⑴　成　果
・話合い活動が生徒主体の授業展開となり，個人の進路や職業の選択・決定につながることが期待される。

⑵　課　題
・３年間を見通した指導計画の吟味をし，より一層話合い活動の充実を図ることで，集団思考を生かした集団決定や自己決定ができる生徒を引き続き育てていきたい。

総 合 部 会

研究主題　　**生きる力をはぐくむ「総合的な学習の時間」の創造**
～探究的な学習を通して～

１　主題について

身に付けさせたい力を明確にし，探究的な学習を通して自己の生き方を考えるとともに主体的に生きる力をはぐくむために，本主題を設定した。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会　研究主題設定・年間計画作成
１１月７日	第２回総合研究会　授業研究会（大館第一中学校）　年間指導計画の情報交換

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　平成２４年１１月７日（水）
・単元名　「見つめようふるさとや社会を語り合おう自分の夢・思い」
・会　場　大館第一中学校
・授業者　全職員
田中　覚（全体・進行）
各学年活動プロジェクト部員

①　授業者から

・「課題→体験→収集→処理→思考→気付き→表現」の流れで学習を行ってきた。自己の生き方を考えることがゴールである。テーマは，学年ごとに設定している。
・今日の集会は，代表者の発表から自分の活動を振り返り，これからの自分について考える場である。その手立てとしてパネラーを設定した。
・大館市の「ふるさと・キャリア教育」を基にして年間指導計画を見直した。１年生でふるさとに立ち返って学ぶ学習を取り入れ，また３年生では東京で学んだことを基にふるさと大館への提言という形でまとめるようにした。

②　協　議

・１年生は，追究する分野を限定しないということだったが，その理由は？
→１年生は，学び方を学ぶことがテーマである。まずは，大館市を探訪し，大館市を知る。その後，自分自身の興味・関心のあるところから課題を設定し，そして追究していく。そこで興味・関心をもったことを２年生での学びにつなげていくようにしている。
・課題意識をどのように掘り起こしたのか。
→学び開きとして全校で「夢」をテーマにした講演会を行った。その後，学年ごとに「夢」をもつことについて生徒たちに下ろし学習をスタートした。
・生徒たちの表現力，伝える力のすごさを感じた。探究する活動が連続しているからこそ，生徒たちは堂々と語ることができる。また，そのことがキャリア教育にもつながっていくのだと思う。生徒たちが作成したレポートを今後どのように活用するのか。
→現在，学習室に掲示している。全レポートを印刷し，次年度に資料として活用する。

・パネラーはどのような位置付けなのか。
　→一方的な発表では話し合いの深まりは弱い。
　　発表者とパネラーのやりとりを聞くことでより深く知ることができ，考えることができる。
・パネラーの意見について，フロアにいる生徒にも呼びかけをすればいろいろな意見が出され深まりが出たのではないか。
・本時の評価にあたる部分として，２つ目についてはどのように評価しようと考えているのか。発表して終わりではなく，自分の生き方について振り返りながら自分のこれからを考えることが大切になるかと思う。
　→課題設定の時から振り返りカードをつけている。それをもって評価をする。

【パネラーの意見を聞くことで考えを深める】

⑵　テーマ研究（各校の年間指導計画の情報交換）
・１年生の調査，研究活動に使う時間が少ない。少ない分，他の教科で内容を補うことができるように，年間指導計画を組み替えている。
・キャリアレポートを作って自分の生き方を振り返ることができるようにしている。また，ふるさとについて考える場も設定している。
・外部の人とのかかわりも含めて計画を立てている。

⑶　指導助言（檜森　秀樹　指導主事）
・１年，２年，３年と広がりが見られ，最後の３年生でふるさとに戻っている。自分自身にかかわるところだけでなく，３年生の発表には，他者や社会とのかかわりに関する内容や地域にかかわる提言も含まれていてよかった。
・学び方や生き方を意識させ，そして身に付けさせることが大切である。課題解決のどこに重点を置いて力を付けていくのかを考えて指導に当たりたい。
・課題解決力，学び方，生き方を捉えさせるための手立てや工夫として，自分のよさを振り返る時間，みんなで学び合う時間，疑問に思ったことを調査する時間，発表・共有して次に向かっていく時間をバランスを考えて配分する必要がある。
・小学校と中学校で活動している内容を把握し，重なりがないようにしたい。また，小学校での発表内容，発表レベルについても中学校では把握してほしい。
・中学校３年生までにどれだけ多くの大人とかかわらせるかが大事である。総合的な学習の時間を通して，将来についてイメージをもち，自分の生活を振り返るきっかけとさせたい。

４　成果と課題

⑴　成　果
・各校の年間指導計画を交流し合うことで，見直すポイントが明らかになった。１年生の総合のもち方を工夫し，大館市のふるさと・キャリア教育を意識した計画を立てることを確認できた。
・自己の生き方を考えるということはどういうことなのかを学ぶことができた。また，そのための手立てについても一中の実践を通して学ぶことができた。

⑵　課　題
・１年生の時数が２，３年生とは違うことで全校体制での学習がしづらくなっている。さらに３年間を見通した系統的な計画を立てていくことが必要となる。

特 別 支 援 教 育 部 会

研究主題　**一人一人の個性を生かしながら，社会適応能力を高めるための自立活動の在り方**
～教科指導における自立活動の在り方～

１　主題について

今年度は,昨年度の研究を継続するということから，昨年度と同じ主題を設定した。昨年度は，自立活動の時間に焦点をあてて研究を進めたが，自立活動の指導は，各教科を含めた教育活動全体で行われていることもあり，今年度は教科指導における自立活動の在り方を研究することにした。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	１１月８日	第２回総合研究会 授業研究会（川口小学校）

３　研究内容

⑴　授業研究

・期　日　　平成２４年１１月８日（木）　　・会　場　川口小学校

・単元名　　算数合同学習　「川口小学校をグラフで表してみよう」

・授業者　村松　和子　　納谷　宣直

①　授業者から

・児童の状態がいつも様々なので，実態把握が十分ではなく見取りが甘かった。
・教材が多すぎて，次の資料を準備するのに追われ，児童に注目させる時間が少なかった。
・漢字が苦手な子のために，カードにふりがなをふるなどの支援があればよかった。
・Ｋ君へのフォローが遅れたが，一度失敗してもめげることなく最後まで頑張れた。

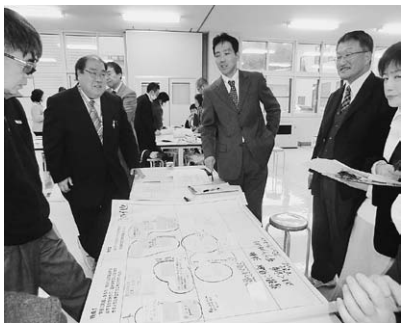
②　協　議

・席の配置が有効的で，４人が落ち着いた環境の中で活動に取り組んでいた。
・教師の自信につながる声かけがよかった。教師と子どものコミュニケーシンが良かった。
・活動の際に，ずれないようセロテープで押さえてあげるなど具体的な支援がよかった。
・本時は算数科のめあてにし，自立活動のめあては単元を通してあればよかったのではないか。
・児童が活躍できる場の設定。そのことで，教師の指示や言葉が減り，主体的な活動が期待できるのではないか。児童が失敗を経験したり，児童同士の関わりを強めたりしながら，自分たちで試行錯誤をしながらグラフを作ってみてはどうだったろうか。
・早くできた子には，別の活動を与えていたが先生役をやらせてもいいかもしれない。
・児童は，多くの先生方に囲まれながらよく頑張っていた。心的ストレスを与えないようにVTR で撮影し，外で参観者が観るという方法もある。

⑵　テーマ研究（授業風景・協議の様子）

【４人の自立活動のめあて確認】

【帯グラフを作成する児童】


【ワークショップ型協議】

⑶　指導助言（村松　勝信　指導主事）

・算数科の中に自立活動を含めた内容だった。算数科の手立てはたくさんあった。一人一人の自立活動の視点の支援を，本時のどの部分でやるか明確にしておくと指導場面に生かせるのではないか。
・言葉は消えてしまうが，掲示物は残る。何を残して何を削るか。また，全面にあればよいもの，側面にあればよいものなど視覚情報の整理をすると効果的である。
・児童への見通しのもたせ方を考えてほしい。どの場面でそれを提示したら効果があるか。手順は活動の前がよい。活動に入ってからだと難しい。導入を短く，イラストや写真，文字の量を調節し，一目でわかる振り返りの方法もある。
・自閉的傾向にある子は単位換算が困難である。答えを教えるのではなく，何をヒントにできるのか，日々観察することが大切である。
・本時は活動的な授業であった。五感を使って強く感じ取らせたい。教師がそのような仕掛けを意図的にしていくことが大切である。
・その場面で自分の活動が正確にできたか，直に確かめられる手立てがあれば，適切な自己評価につながる。

４　成果と課題

⑴　成　果

・学習の流れに沿ったよく考えられたシート，電卓など一人学びのできる環境が整っていた。
・言葉の式の他に，○△□など記号で表した式もあり視覚に訴えるものでよかった。
・個別の目標があり，活動後にそれぞれが授業の振り返りをし，頑張りを発表できた。
・計算の手順，大きな帯グラフ，１cm＝１％など児童が考えやすい手立てがあった。
・分かりやすい役割分担であった。（色が担当を表していた）
・４人で分担し一つの帯グラフを完成させる活動だったが，分担が協力につながった。
・全員が小数第２位まで求め，四捨五入できていた。身につけさせたい技能が明確だった。

⑵　課　題

・集団のよさを確認する場の設定。話し合うときは向かい合うなどルールがあればよい。
・前時とイメージの違う活動をするときの意識付けの工夫。
・自立のためのキーワードあればよかったのではないか。
・一斉の中で TT の在り方。このような場面ではこのような支援形態といった型のようなものはできないものか。

保　健　部　会

研究主題　**養護教諭の専門性を生かした学校保健活動の充実を目指して**

１　主題について

平成２０年度から４年間，中学校区毎に研究を行い，各地区の健康課題に積極的に取り組んできた。平成２３年度で４年間の研究に一度区切りをつけ，今年度からは，小学校，中学校の校種を基本にして，数グループに分かれ研究をすすめることとした。

各校や校種の実情と健康課題に沿った内容を研究実践し，部会内で共通理解を図り，児童生徒の健康の保持増進のための活用を目指したい。

２　今年度の取組

月　日	実　践　内　容	月　日	実　践　内　容
４月１２日	第1回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	７月～１０月	保健部会（班ごと） 研究の進め方と内容の確認
６月２７日	保健部会（全体） 班ごとの研究テーマ設定	１１月　７日	第２回総合研究会 各班の研究経過発表

３　研究内容（　①研究テーマ　②今年度の取り組み　③今後の取り組み　）

⑴　ノーザンフレンズ（釈迦内小・花岡小・矢立小・二中・花岡中・矢立中）

①「統合に向けた保健室経営のあり方」

②・養護教諭の執務に関する統合に関わるアンケートの実施とまとめ

・引き継ぎ事項の確認とその準備

③・書類関係の整備　・保健室内の物品整理

・保健室経営計画案作成

・児童生徒の心の健康に関するアンケート作成と実施

【ジュースの中の砂糖の量】

⑵　保健学習班（桂城小・城西小・城南小・上川沿小）

①「保健学習における養護教諭の関わり方

～TT及び資料提供～」

②体育科の年間指導計画の確認と養護教諭の授業への関わり方の検討

③養護教諭の専門性を生かした教材の作成と指導の実践

⑶　樹海ライナーズ３（有浦小・長木小・雪沢小）

①「望ましい生活習慣の確立を目指して～すぐに役立つ保健教材の作成～」

②・むし歯予防に使える教材（パワーポイント・掲示物）の作成

・元気UP大作戦カードを活用した生活習慣の見直し

③朝食や睡眠等に関した教材作りや，集会の実践記録の共有と資料作成

⑷　ヘルシーライフ（西館小・扇田小・東館小・成章小）

①「生活習慣とメディアについて」

②児童の生活実態を把握するためのアンケート調査の実施と分析

③・追跡調査の実施とメディアとの接し方等に関する保健指導の実施

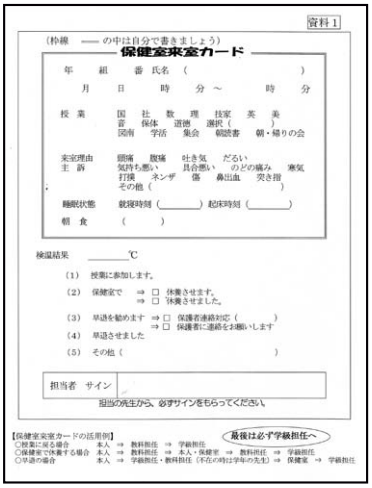
・学校保健委員会の活用と家庭への啓発

⑸　子どもたちがハッとしてグッとくる執務のアイディア（南小・川口小・山瀬小・早口小）

①「子どもたちがハッとしてグッとくる執務のアイディア」

②・子どもの興味を引き出すための教材や掲示物の作成（保健室，全体指導，委員会活動）
・他校の保健室を訪問（弘前大学教育学部付属小学校）
③・教材や掲示資料の作成
・保健室施設，設備の紹介やレイアウト等の紹介
・あらゆる機会をとらえての保健指導

⑹　諸用紙作成班（一中・成章中・田代中・国情中）
①「保健室管理を円滑にすすめるための諸用紙作成と活用」
②「保健室来室カード」「保健室利用記録」の作成
③受診勧告用紙，スポーツ振興センター手続き書類の見直し


資料1
（枠線　――の中は自分で書きましょう）
保健室来室カード
年　組　番 氏名（　　）
月　日　時　分～　時　分
授業　国 社 数 理 技家 英 美
音 保体 道徳 選択（　　）
図書 学活 集会 朝読書 朝・帰りの会
来室理由　頭痛 腹痛 吐き気 だるい
主訴　気持ち悪い 具合悪い のどの痛み 寒気
打撲（ネンザ 傷 鼻出血 突き指
その他（　　）
睡眠状態　就寝時刻（　　）起床時刻（　　）
朝食（　　）
検温結果　　℃
（1）授業に参加します。
（2）保健室で ⇒ □ 休養させます。 ⇒ □ 休養させました。
（3）早退を勧めます ⇒ □ 保護者連絡対応（　　）⇒ □ 保護者に連絡をお願いします
（4）早退させました
（5）その他（　　）
担当者　サイン
担当の先生から、必ずサインをもらってください。
【保健室来室カードの活用例】
最後は必ず学級担任へ
○授業に戻る場合　本人 ⇒ 教科担任 ⇒ 学級担任
○保健室で休養する場合　本人 ⇒ 教科担任 ⇒ 本人・保健室 ⇒ 教科担任 ⇒ 学級担任
○早退の場合　本人 ⇒ 学級担任・教科担任（不在の時は学年の先生）⇒ 保健室 ⇒ 学級担任

【保健室利用カード】

①「生徒保健委員会における養護教諭の関わり方
～自主的・実践的な活動になるための指導と支援の在り方～」
②比内中学校　―歯の標語募集，歯ブラシ点検，家族ミーティング
下川沿中学校―栄養指導集会
東中学校　　―トリプルスリー（うがい・手洗い・換気）運動，朝会発表
南中学校　　―学校生活（給食・清掃）のオリエンテーション，保健集会
③各校の実践事例を再検討して，各校の委員会活動の活性化を図る。

⑻　指導助言（青柳　正隆　長木小学校校長）
・研究主題に迫るためのアプローチの仕方について，各グループがテーマや目的をしっかりともって研究していると感じた。グループ名もユニークである。
・統合に向けた取組では，書類等の整備において，保健関係だけではなく学校全体としても考えていかなければならないことである。また，統合前から心身の安定を図るための取組をしていることはすばらしいと思う。
・保健学習については，３～６学年の保健が理科や家庭科と関連しているということを表としてまとめることができたことは大きな成果であったと思う。養護教諭がTTとして授業に参加したほうがよい内容と，そうではない内容のもとを確認できたことも成果の一つではないか。
・養護教諭が作る教材・教具は，アイディア豊かで思いが込められていると感じた。作られた教材・教具を大切にしていただきたい。
・子どものメディアとの接し方や睡眠の大切さについての啓蒙は，全職員で取り組むべき内容である。学校と家庭が連携して取り組むことができる方法を考えていかなければいけない。
・諸用紙作成について，精神的悩みを抱えた生徒は話すより，書いた方が伝わることがある。個々の実態に合わせて用紙を使用することが大事である。

⑼　講演会開催
演題「音と香りで魂の解放を！」　田口　睦子先生　田口　諒也先生（音楽療法士）

４　成果と課題

⑴　成　果
・各校の子どもたちの実情をふまえた課題に取り組むことができた。各班のバラエティに富んだ実践や情報を共有することができた。
・継続研究をすすめることで，実態把握から指導，評価を行いさらに新たな課題まで検討することができる。

⑵　課　題
・保護者への啓発を大切にしながら，保健活動に取り組んでいきたい。

事 務 部 会

研究主題　**各校の実践に学び事務処理能力の向上をめざす**

１　主題について

各校で取り組んでいる『日常業務について』～そこからお互いに学び合うことで，今後の事務処理能力の向上につなげる。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	１１月６日	第２回総合研究会事務部会

３　研究内容

⑴　一人一研究

・期　日　　平成２４年１１月　６日（火）　　・会　場　　大館市立中央公民館

財政白書は，単に数字を積み上げたように見えて，そこから読み取れることが多く，含蓄に富んだ切り込み方ではないか。児童数２００人余りの小学校の１年間の維持管理費が１億６千万円。その内８割強が県費（内約３割が国費）。市費は３分。私費は１割。大半が税金で運営されているという視点を常に意識していれば，監査（国・県・市）を前向きに捉えることができる。教材備品等ほとんど公有の財産である，ということも常に意識する必要がある。また，手当支給に関しても第三者に説明できる環境整備が求められる。何が無駄かは議論の分かれる所だが，無駄を省くというのも大切である。

近年いろいろな休暇ができ，初めて経験することもあり，それへの対応もおろそかにできない。常日頃からの情報交換が必要である。（介護・短期の介護・部分休業・子の看護等）

用務外滞在，現地引率と引率の違い，海外派遣からの赴任旅費等初めて聞く内容もあった。また，寒冷地手当の確認の際の，『明らかな』というのも，見方によってはおもしろい。

４　成果と課題

【第２回総合研究会事務部会】

⑴　成　果

・年々内容が濃くなり，論議も活発で，多方面に渡る問題提起ができた。

・一人一人がテーマを設定し，取り組んだことを発表したことによって課題を共有できた。

・以上の２点から，今後の各自の職務遂行にいささかなりとも寄与できたのではないか。

【第２回総合研究会事務部会】

⑵　課　題

・いろいろな問題をひとりで抱え込まないで，組織としていかに対応していくか。

・他団体，他職種の人との日常的なコミュニケーションをいかに図るか。

・後半時間切れの状態になったので，時間配分や会の進め方にも工夫が必要である。

栄　養　部　会

研究主題　**心とからだをはぐぐむ学校給食**
～おいしい笑顔が生み出す元気な大館っ子～

１　主題について

昨年度は，大館市の食育推進計画にある「食育の日」や「野菜の日」を積極的に実施し，地場産物を活用した安全な給食の提供を目指し，研究を重ねてきた。

今年度は，大館ふるさと教育を念頭におき，特に地元の食材を多く活用した「大館らしさを生かした学校給食や食育」について研究を進めた。地場産物の活用は，子どもたちの健康はもちろんのこと，郷土愛を育みさらには地域の活性化にもつながると考えこのテーマを設定した。さらに，給食を生きた教材として効果的な活用を図り，学校給食を通じて，食の大切さや楽しさ，ふるさとの味を大切にする心を育てたい。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	第１回総合研究会 ・研究主題設定 ・研究内容の決定	１１月６日	第２回総合研究会 ・話題提供 ・実践発表 ・研究協議

３　研究内容

〔第２回総合研究会〕

・期　日　　平成２４年１１月６日（火）
・会　場　　大館市立中央公民館　調理室　　（実演）
　　サンアビリティーズ大館　音楽室　（話題提供、協議）

⑴　実　演　「地元の食材を使った簡単なおやつと飲み物」

①モッチモチのいももち

・県産のじゃがいもを茹でてつぶし，片栗粉を混ぜて形を整える。フライパンに多めの油をひいてこんがり焼き目をつけ，「しょうゆ」「砂糖」「大館で作られているお酒」で作ったタレをからめた「いももち」の実演をし試食した。

※簡単にでき食感がモチモチしておいしいという感想が出た。

②やさいドリンク

・大館産の小松菜・キウイフルーツ・りんごにはちみつと水を加えてミキサーにかけたやさいドリンクを実演し試飲した。

※小松菜がフルーツの甘さで気にならずに飲むことができた。

【おやつ・飲み物完成品】

⑵　話題提供　　ＹＵＭＥ給食・地場産物活用メニュー(下中)の取り組みについて
話題提供者　下川沿中学校　簾内　優美

・「ＹＵＭＥ給食」の日を設け，大館産の食材を優先的に使用した献立を作り，それを昼の放送で知らせている。また，おたより等で家庭へも伝え要望の多いレシピの紹介をしている。
・児童生徒がＹＵＭＥ給食を楽しみにしている声があり，残量も少ない。教職員や保護者へも広がってきているが，食材のマンネリ化など課題もある。
・下中総合学習の取り組みとして，立花地域にある「立花ファーム」での収穫体験，加工食品の開発，レシピ作成に取り組んでいる。

【協議の様子】

⑶　各校の取り組み
・食育の日には，地場産物を多く取り入れた献立を実施し，そのことを給食だよりや学校の放送を利用して知らせている。また，地場産物の購入先の紹介もしている。
・委員会による栽培野菜の活用や取り組みについて。
・地域の納入業者を対象にした試食会の開催について。

⑷　指導助言（小井土　富士雄　花岡小学校校長，日景　真幸　花岡中学校教頭）
・給食だより，一口メモなどで情報を発信しているが，発信だけでは一方的であるため受け取り側の思いもくみ取る工夫が必要ではないか。
・食育をすすめるためには綿密な計画と，管理職の納得させること、教職員の協力が必要である。学校側からの依頼に応えるだけでなく積極的に指導を行ってほしい。
・各校，各センターの工夫に感心する。大館の食材や食文化の知識を広げふるさとの味を大事にする心が育つよう誇りを持って取り組んでほしい。ふるさと・キャリア教育に一番直結しているのは味覚である。食材そのもの，調理する人の立場や苦労をもっとアピールすることで感謝の心につながっていくのではないか。
・栄養教諭・栄養職員と管理職は検食簿を通してつながりがあるが，他の教職員との交流の場や，センターと学校との取り組みがあればよいのではないか。

４　成果と課題

⑴　成　果
・児童生徒が，収穫体験，商品開発，レシピ検討をすることで食材を身近に感じ，苦手なものを克服する意欲をもたせることができた。
・地場産物の活用に取り組むことで，食の安全性だけでなく，食材について理解が深まり食べ物への感謝の気持ちを持つきっかけになった。
・季節ごとの食材を使うことで地元の味を子どもたちに伝えることができた。
・地場産物の活用の拡大により，より安全な給食の提供に貢献できた。

⑵　課　題
・食材のマンネリ化改善のため，アレルギー等の問題をクリアし，新しい食材(ブラックベリー，マコモダケ，えごま，ホップ等)を活用し，ふるさとの食について給食から家庭へも広げていくよう努める。
・さらに地場産物の活用を拡大し，安心安全な給食の提供と，食育の一層の推進を図っていくこと。

第 一 中 学 区

1　はじめに

９年間を見通した連携強化を図るために，今年度も「一中学区の児童生徒をともに育てるための小・中連携はどうあればよいか」をテーマに取り組んだ。連携研究会については，６部会に分かれて情報交換や協議を行ってきた従来のもち方を見直し，今年度はよりよい人間関係を築くことができる児童生徒を育てるための研修会を行うことにした。

2　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
６月１２日	第１回連携理事会	８月３１日	第２回連携理事会
８月３１日	小・中連携研究会（上川沿小）	１１月　１日	６年生の一中体験入学

3　活動の実際

⑴　小・中連携研究会（会場：上川沿小学校）

①　授業参観

上川沿小学校の全学級の授業を提示していただき，先生方は授業の進め方，児童の様子などを参観した。

②　研修　（弘前医療福祉大学　小玉有子先生の講話）

「自信を持って社会で活躍できる子どもたちに育てる」という演題で，講話をしていただいた。一中学区の子ども達を「しっかりとコミュニケーションをとれる子ども」「自他の気持ちを理解し，思いやりのある子ども」に育てたいという願いのもと，演習では，グループごとに情報交換や意見交換を進めた。小・中各校交じったグループのため，発達段階に応じた対応のしかたや支援策の在り方を考えることができ，「ともに育てる」意識を高める機会となった。

【研修におけるグループ協議の様子】

⑵　その他の交流や連携

①　鳳雛講座

一中がキャリア教育の一環として開設している「鳳雛講座」に，小学生も参加している。講座は地域で働く方を招いて，講話をしていただくものであるが，これまでに「バリスタ・ソムリエ」「バス運転士」「和菓子職人」「保育士・幼稚園教諭」などを招いた講座には小学生も積極的に参加した。

②　６年生の一中体験入学

学区内の４小学校の６年生が中学校を訪問し，授業参観の後，集会に参加した。学校紹介やクイズ，先輩からのアドバイスなどを通して，中学校生活への関心を高めた。

4　おわりに

今年度，小・中連携研究会で生徒指導上の課題解決のために専門的なお話を聞き，全員で協議・演習するという研修は，９年間のつながりを考え，実践する上で有意義であった。このほかあいさつ運動や歯磨き指導なども学区の共通実践として行われており，今後も「ともに育てる」意識を共有して連携を深めていきたい。

第 二 中 学 区

1　はじめに

「小・中９年間を通して，釈迦内地区の子どもたちの健やかな成長を支援するために」を研究テーマに設定し，共通実践事項の確認・実践・年度途中の検証・今後の方向性の確認の流れで連携強化を目指すとともに，児童生徒間の連携強化にも取り組んだ。

2　今年度の取組

月　日	実　践　内　容	月　日	実　践　内　容
４月～	登校指導（毎月１日と15日）	９月４日	小・中交流会（６年生授業参観･授業体験，学校紹介･部活動体験）於：第二中
６月３日	連携委員会① （事業計画作成,部会開催について）	11月27日	第２回小・中連携研究会 於：釈迦内小 （授業参観，協議，情報交換）
７月３日	中学校紹介（６年生及び保護者対象）		
７月６日	第１回小・中連携研究会 於:第二中 (授業参観, 協議等)　合同学校評議委員会も同日開催	12月14日	小・中交流②　　於　釈迦内小 （中２が町内児童会出席，集団下校）
７月17日	小・中交流①　　於　釈迦内小 （中３が町内児童会出席，集団下校）	２月１日	中学校入学保護者説明会　於：第二中
		３月28日	連携委員会②　(小･中引き継ぎ, 次年度の計画)

3　活動の実際

⑴　小・中連携研究会（第１回：中学校会場，第２回：小学校会場）

どちらの研究会でも，授業・帰りの会参観後，３つの分科会で協議を行った。第１回研究会で話し合った重点実践事項について，第２回研究会では，その成果・課題を出し合い，さらなる連携を図るための共通した指導の方向性を確認した。

学習部会…課題とまとめを明確化した授業づくり，相手に伝えるために話す意識付け，各教科の基本的な用語を活用した表現や説明

特別活動部会…地域との顔の見える付き合い（ひまわりプロジェクト・防災学習）・ボランティア精神の育成・あいさつを返す側の姿勢

生徒・健康推進部会…情報モラル指導計画に基づいた指導と保護者への啓発，小・中の特色を生かした地域連携，昼食後の歯磨き指導の徹底

⑵　小・中交流会

６年生の中学校生活への期待感を高めさせる交流会（授業体験や集会活動，部活動体験など）の他に，小学校町内児童会への中学生の参加機会を２回に増やした。夏季休業前の児童会では，自転車の安全な乗り方や地区の危険箇所などを中学生が説明した。

⑶　小・中の特色を生かした連携

小学校のひまわりプロジェクト，中学校の防災学習は，それぞれの学校発信による地域と連携した活動であるが，今年度は昨年度以上に児童・生徒間の連携が進んだ。日程の都合上，一緒に活動することは難しいものの，釈迦内地区文化祭ではひまわり油・油かす肥料の販売協力など，地域への愛着をはぐくむ特色ある活動をしてきた。今後もお互いのねらいを共通理解し，可能な範囲での連携を模索していきたい。

4　おわりに

昨年度までの連携を土台にし，一小一中共通学区の利点を生かした活動を展開できた。地域とかかわる機会を意図的計画的に設定することで，地域とのつながりを児童生徒が意識する機会が増えているのも第二中学区の特長といえる。今後は，２年後に迫った３中学校の統合を見据えた小・小，中・中の情報交換，連携へと発展させる必要性がある。

【小・中学生一緒に肥料販売】

下 川 沿 中 学 区

１　はじめに

今年度も小・中隣接校の利点を生かし，授業研究や共通実践事項を確認し合いながら研究授業の参観や高学年の授業交流，生徒指導面での連携等に取り組んだ。また，子どもの実態について情報交換を行うとともに，家庭や地域との連携を図って小・中連携を進めた。

２　今年度の取組

月　日	実　践　内　容	月　日	実　践　内　容
5月30日	第１回小・中連携部会(下川沿中)	11月19日	下中入学説明会授業参観小６参加
7月19日	学校・家庭・地域連携推進委員会	11月22日	下中総合学習　川口小６年参観
7月14日	川口小６年下中で英語授業体験	11月29日	第２回小・中連携部会（川口小）
11月10日	保小中Ｐ公・合同研修会	1月11日	第３回小・中連携部会

３　活動の実際

⑴　**小・中連携部会**（授業参観・協議）

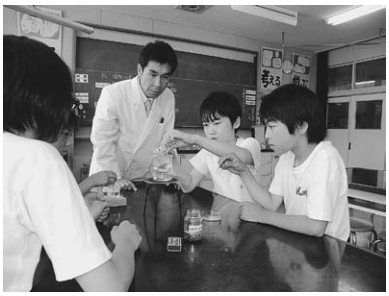
①第１回小・中連携部会（中学校会場）中学校の授業を小学校の先生方が参観し協議を行った。両校の研究概要について研究主任が説明した。その後，指導部ごとに分かれて共通実践を協議した。「あいさつ運動」「アルミ缶回収」「クリーンアップ」「ノート指導」等を共通して，実践することを確認し，時期や担当を決めた。また，中学校１年生の入学後の状況と課題等を情報交換し，連携して対処する重要性を再確認した。

②第２回小・中連携部会（小学校会場）小学校の授業を中学校の先生方が参観し協議を行った。「学習指導」と「生徒指導・体育・清掃給食」の２部会に分かれて今年度行った共通実践について協議し，次年度へ向けて小・中で連携できる施策を探った。新たに来年度は「家庭学習強調期間の共通実施」と「あいさつ運動スローガンの統一」を行うことを確認した。

⑵　**交流事業**

①授業交流６年生の理科の学習に中学校の理科教諭が参加し，ＴＴで指導にあたった。年間で８時間程度実施した。また，６年生の体育，５年生の外国語活動，４年生の保健でも中学校の教諭が協力し，授業指導における交流と連携を推進することができた。６年生が中学校で英語授業を体験したり，総合学習の発表会を参観したりして中学校の学習の様子を知る機会となった。

②小・中合同クリーンアップ昨年に続きクリーンアップを共同で行った。あいにく小雨の天候であったが，中学生と小学生が一緒のグループ編成で学校周辺道路脇のゴミを収集した。「アルミ缶回収」も小・中合同で行い，学校近くのディサービス施設に介護用品を一緒に寄贈している。



【６年理科　中学校の先生と】

４　おわりに

６月に小学校で実施した文化芸術体験事業「落語講演」では，中学生や地域住民も一緒に参観し伝統文化に触れる体験ができた。また，今年度は，複数の教科で，小学校の授業に中学校の教科担当教諭が参加して指導する実践が行われた。授業の場で小・中連携が進んだ一年であった。第２回の連携部会では協議の結果，来年度の共通実践が具体的に提案された。いつ，どこで，何をどのように実施するのかを明確にして今後も小・中の職員一人一人が小・中連携に具体的に取り組んでいるという自覚をもつことができるように共通実践を進めていきたい。

南　中　学　区

1　はじめに

今年度はテーマを「夢や目標に向かってたくましく生きる子どもの育成」とし，小・中を見通した自立の基盤となる諸能力を育てる指導を通して，小・中のよりよい連携の在り方を探っていくことにした。「小・中連携部会」や「授業交流」，「合同ボランティア活動」，「中学校体験交流会」を中心に，小・中学校それぞれの特長を生かして取り組んだ。

2　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
５月１６日	連携委員会（大館南小）	１１月２６日	中学校体験交流会・入学説明会
５月３０日～６月１日	小・中交流授業参観	２月２１日	小・中行事打ち合わせ会
６月　４日	小・中連携部会	３月２６日	小・中引き継ぎ
７月２３日	合同ボランティア活動	継 続 的 に	ペットボトルキャップ回収

3　活動の実際

⑴　小・中連携部会

①　Ａグループ…重点〈子どもの主体性を育てる指導の工夫〉

小学校では授業の始まりと終わりのあいさつ，学習用具についての約束，授業の組み立て等をていねいに行っている。中学校１年生は，教師が指示しなくても生徒同士がお互いにハンドサインを見て指名し合い，話し合いを深めることができる力が身に付いているので，中学校でもハンドサインを引き継いでいきたい。

【合同ボランティア活動】

②　Ｂグループ…重点〈９年間を見通したふるさと・キャリア教育の推進〉

小学校では，３年生が〈施設〉「発見！学区のひみつ」，４年生が〈福祉〉「やさしさを届けよう」，５年生が〈自然・環境〉「地域の自然とふれあおう」，６年生が〈文化・伝統〉「ふるさとの伝統と文化」というテーマで実践し，調べたことをいろいろな機会に地域の方々に向けて発信している。

中学校では，総合的な学習の時間で，１年生が〈ふるさと学習〉「ふるさとの今とこれからを考えよう」，２年生が〈職場体験学習〉「働くことの意義を探ろう」，３年生が〈生き方学習〉「自分の未来につながる生き方を模索しよう」というテーマで体験活動を行い，レポート作成，学年発表会，南中祭での全校発表という流れで，ふるさと・キャリア教育を実践している。

⑵　合同ボランティア活動

今年度は昨年度までの学校周辺の清掃から範囲を広げ，１７町内に分かれて公民館周辺や沿道を中心にゴミを拾い集めた。積極的にゴミを探す小学生の後を中学生が歩き拾い残しをチェックし，連携しながら作業を進めた。

4　おわりに

小・中連携部会の話し合いから，共通な事項について９年間を通しての積み重ねが大切であることを確認できた。今後もお互いに情報を交換し合いながら，子どもたちを伸ばしていけるように努力していきたい。

成 章 中 学 区

1　はじめに

「地域に元気と感動を与える学校」を合言葉に，小･中が共通･共同の取組をしながら小･中の特徴を生かしながら実践し，９年間を見通した児童・生徒の育成を図ることにした。

2　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
５月１８日	小・中連携協議会①打ち合わせ会	１１月　１日	中学校体験入学
６月２０日	小・中連携協議会②(小学校会場)	１１月２０日	小・中連絡協議会③反省会
７月１８日	あいさつ運動①，クリーンアップ	１２月　６日	授業交流（６年外国語）
８月　５日	あいさつ運動②	１２月１４日	労災病院クリスマスコンサート
８月３１日	合同学校保健委員会	３月２６日	小・中引き継ぎ
９月２１日	十二所地区ＰＴＡ連絡協議会	※授業参観（小学校：理科，図工，中学校：音楽）	

3　活動の実際

⑴　小・中連携協議会（３回開催）

①第１回と第３回は指導部長が集まり，共同・共通実践事項の設定や今年度の反省を行った。

②第２回は小学校の授業参観と協議会（学習・生活・保健体育の３部会）を行った。協議会では実践事項の経過報告と課題，後期の取組について話し合った。

⑵　学習指導に関する取組

①伝え合う場を意識した授業（ペアやグループによる話し合いとそのための時間を確保した。）

②家庭学習（帰る前にその日の学習予定を立てさせた。）

⑶　生徒指導に関する取組

①クリーンアップ（登校時に中学生をリーダーに合同でクリーンアップを実施した。）

②あいさつ運動（登校前に所定の場所に集まり，一緒にあいさつ運動に取り組んだ。）

⑷　保健体育指導に関する取組

①体力向上…徒歩通学強調週間（てくとく週間）の設定

②新体力テストの結果の活用…持久力のアップの取組

③学校保健委員会…各種検診や調査の結果をもとにした児童，生徒の健康状態の把握

【小･中合同あいさつ運動】

⑸　中学校体験入学

①生徒会役員の説明，生徒指導主事の講話

②授業参観と合同授業（１年生の音楽）

⑹　来年度に向けて

①学習指導…中学校でのハンドサインの活用を検討する。

②生徒指導…あいさつ運動やクリーンアップ活動との関連を図るとともに，安全指導の充実のために，小学校の集団登校日と中学校の登校指導日の実施日を検討する。

③保健体育指導…持久力だけでなく柔軟性の向上に関する取組も検討する。また，学校保健委員会は課題を焦点化し，共通の取組ができるようにする。

4　おわりに

授業交流や研究授業の参観，小・中合同の活動や共通実践事項への取組など年間を通して連携事業が展開されている。今後も両校の職員，さらには地域の方々や関係機関の協力を得ながら成章地区の子どもたちの力を育て，伸ばしていけるよう努力していきたい。

花　岡　中　学　区

１　はじめに

研究テーマ「花岡の子どもたちが健やかに成長するための小・中連携はどうあればよいか」のもと，今年度の小・中連携研究を進めてきた。このテーマに取り組んで２年目となる。昨年度に引き続き，「表現力の向上」と「よりよい人間関係の構築」を重点に，９年間を見通した児童生徒の育成を目指した。

２　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
５月　９日	第１回小・中連携委員会 （今年度の活動計画について）	１１月１０日	保・小・中ＰＴＡ合同研修会 （「サイト活用の実態と危機」
７月１８日	指定訪問参観①（中学校　国語）	１１月１６日	小学校公開研究会参観
９月　５日	小・中連携研究会　中学校会場 （授業参観・研究会）	１１月２９日	指定訪問参観③（中学校　数学）
		１月２４日	指定訪問参観④（中学校　社会）
９月１３日	６年生の中学校訪問（体験学習）	３月　１日	第２回小・中連携委員会 （今年度の反省と来年度計画案）
９月２０日	指定訪問参観②（中学校　総合）		

３　活動の実際

⑴　表現力の向上

９月に行われた小・中連携研究会では，表現力を高めるための手立てについて，昨年度よりも具体的な話し合いがなされた。特に，今後の共通実践事項として「話型」を示して指導することを確認した。これは，小学校で使っている「学習で使う１０の言葉」を参考に中学校でも「学習で使う言葉」を作成し，話し合い活動に生かすものである。

【６年生の中学校訪問での
中学生との交流】

⑵　地区の職場訪問先の情報交換

小学校と中学校とで重複しないよう，各学年での職場訪問先の情報を交換した。ただ，小学校でも毎年訪問先が変わるので，年度ごとの情報交換が必要である。

⑶　生徒指導上の連携

①　昨年問題となった，携帯電話やネットによるトラブルについて，保・小・中研修会で研修ができたのは成果である。

②　小・中共に「ルールを守る」という意識が弱い。小学校段階から，道徳の時間や日常の生活の中で意識させて行くことが必要である。また，ときには，保護者や家族を巻き込んで，一緒に考えさせていきたい。

③　家庭での問題を抱える子どもたちが年々増えている。その児童生徒については，こまめに情報交換することが必要である。

４　おわりに

人数が少なくても伸び伸びと活動している１年生を見ると，児童生徒にとって，学級の人間関係が学習に大きく影響していることがわかる。これを踏まえ，今後も同じ目標に向かって，小・中の情報交換を密にし，手を携えて花岡の子どもたちを健やかに育てていきたい。

矢　立　中　学　区

1　はじめに

矢立小・中学校は校舎が隣接しており，ランチルームと渡り廊下でつながっていて，児童生徒も教職員も行き来がしやすい環境にある。このような環境を生かして，小・中学校が連携し小学校６年間・中学校３年間の９年間を見通した指導に努めている。

2　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月２７日	合同運動会小・中職員打合せ	６月２９日	小学校授業提示
５月１３日	小・中合同運動会	７月９~13日	授業参観交流
５月１８日	小・中連携推進委員会	１１月５~９日	授業参観交流
５月２８日	小・中連携総会	１１月２２日	小・中連携研究会　中・授業提示
６月２７日	小・中合同クリーンアップ	２月　４日	小・中連携推進委員会

3　活動の実際

⑴　小・中連携総会・研究会，授業参観交流

①　５月の連携総会では，学習指導，生徒指導についての情報交換を行った。特に入学したばかりの中学校１年生の情報交換は有意義だった。

②　７月と１１月に１週間ずつ授業参観交流期間を設定し，お互いにできるだけ参観するように申し合わせている。しかし，授業の関係でなかなか参観できないので，今年から特定授業を設定し，それぞれの授業を全員で見合うようにした。

③　小・中で「研究の共通実践事項と授業参観の視点」を設定し，５月の連携総会で，それぞれの授業の中で実践していくことを確認した。１１月の連携研究会では，共通実践事項の実践を中心とした話し合いを行い，連携を深めた。

【小・中連携研究会(１１月)】

⑵　合同運動会，合同クリーンアップ

①　運動会は児童・生徒数が減少していることもあり，合同で実施している。合同で実施することにより，それぞれで行うより保護者や地域の皆様にたくさん来校していただくことができると考えている。

②　クリーンアップは小学生は主として学校周辺，中学生は国道沿いのゴミ拾いやＪＲ白沢駅の清掃を行っている。合同で開始式を行った後それぞれの活動を行うが，毎年保護者や町内会,交通安全協会など各種団体の皆様に作業や交通安全確保の面で協力していただいている。あらためて感謝申し上げたい。

⑶　学校支援地域本部

①　これまで，小・中学校と地域が連携していくことを目指して「生徒指導連携推進委員会」を組織していたが，今年度から学校支援地域本部が設置され，「矢立地区学校支援地域本部地域協議会」がその役割を担うことになった。

②　地域本部設置前から小・中学校共に地域との連携を図ってきたが，合同の地域本部ができ配置された学校コーディネータの活動によって，これまで以上に連携が強まっていると感じている。

4　おわりに

今年度は，小から中へ（技術・家庭科），中から小へ（外国語活動(英語)，音楽，体育）の交換授業を行っている。担当者には自校の授業の他に，それぞれ他校種の授業を担当していただいており，授業担当者はもちろん，連絡調整の窓口となる教務主任には大変な苦労をおかけしている。おかげで小学校と中学校の垣根は低くなり，互いの児童生徒への理解が深まって，「中１ギャップ」も見られず，とても充実した連携となっている。

東　中　学　区

1　はじめに

「夢に向かいたくましく生きる児童生徒をともに育てる小・中連携はどうあればよいか」というテーマのもと，小・中のよりよい連携の在り方を模索してきた。「東中学校区小・中連携部会」「児童生徒交流会」の二つを柱として行った。

2　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
６月　１日	第１回連携委員会 ・今年度の活動の決定	２月	第２回連携委員会 ・来年度の活動について
９月　７日	東中学校区小・中連携部会 （桂城小）	３月	学級編制会議
１１月　１日	児童生徒交流会		

3　活動の実際

⑴　東中学校区小・中連携部会

授業参観と分科会が行われた。授業参観では，桂城小児童の元気に授業に取り組む姿が見られた。また，分科会は校長部会・事務部会・養教部会と，テーマごとに第１～３分科会に分かれての話し合いがもたれた。第２分科会では，互いの名前を呼び合うことであいさつの向上が見られたことや，各小学校と中学校のあいさつ運動による交流の様子が発表され，今後も継続していくことで，連携を深めていくことが確認された。

①授業参観　　各学年の授業を各学校の先生方が自由に参観するという形式で行った。

②分科会　（各テーマについて各小・中学校から話題提供された）

第１分科会　テーマ　「自分の思いを表現させる指導の工夫について」

第２分科会　テーマ　「名前を呼び合うあいさつ運動について」

第３分科会　テーマ　「中学校１年生の情報交換」（桂城小，有浦小,長木小・雪沢小の３部会）

⑵　児童生徒交流会

来年度入学予定の４小学校の児童が中学校を訪問した。今年度も，児童と東中生が一緒の授業を体験するという形式にした。また，授業の後は生徒会主催の集会で交流した。集会では，クイズとゲームにより明るい雰囲気で交流することができた。またその後，生徒会執行部員の案内で，放課後の各部活動を見学した。

【児童生徒交流会の交流集会の様子】

4　おわりに

児童生徒交流会では，小学生が中学生と授業を一緒に体験することによって，児童生徒の交流をより深めるとともに，中学校の授業をより身近に感じてもらうことができた。東中学校区小・中連携部会においては，さらに活動の見直しを行っていきたい。各小学校とのあいさつ運動も今後継続していきたい。また，例年３月に行っている学級編制会議においては，非常に有意義な情報交換が行われており，こちらもぜひ継続していきたいと考えている。

比 内 中 学 区

1　はじめに

昨年度に引き続き「意欲的に学び，豊かな心と確かな学力を身に付け，ふるさとに根ざす比内の子どもを育てる小・中連携はどうあればよいのか」というテーマに基づき，小・中のよりよい連携の在り方を模索してきた。そして今年度は学校数が１減となったが，新たに「基礎学力の向上」「豊かな心の育成」「ふるさと・キャリア教育の推進」の３つを共通実践事項として掲げ，９年間を見通した児童生徒の育成に取り組んだ。

2　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
５月１７日	連携研究会事前打ち合わせ会	１１月２２日	第２回小・中連携研究会
６月　１日	第１回小・中連携研究会	１月下旬	中学校体験入学　入学説明会

3　活動の実際

⑴　第１回小・中連携研究会（会場：比内中）

①授業参観（全学級）

②中１生の状況報告（ＮＲＴ学力検査結果を含む学習面や生活面について）

③全体会（会場校校長あいさつ，事業計画説明，学校評議員及び会員紹介）

④分科会（「基礎学力の向上」「豊かな心の育成」「ふるさと・キャリア教育の推進」）

この日は，比内中学校区の合同評議員会も併せて実施した。また今年度は，新たな試みとして，全体会開催に先駆けて１年生のＮＲＴ学力検査結果の状況について中学校側から説明があり，学力面の課題について共通理解を図ることができた。

分科会では，テーマ毎に３部会に分かれ，各校の取組や状況について情報交換を実施した後，年間を通じて全校で共通して実践する内容について話し合った。

⑵　第２回小・中連携研究会（会場：西館小）

①授業参観（全学級）

②分科会（第１回目と同様のテーマ）

１回目の話合いを受け，テーマに基づき各校で実践した内容を資料にまとめ，それを持ち寄り協議した。各分科会の様子は次のとおり。

【４年の図画工作科授業参観】

・第１分科会（「基礎学力の向上」）

表現力や話合い活動の取組，基本的な学習の約束，研究体制など，各校の取組のよさについて情報交換をし，学び合うことができた。中１ギャップ解消のため，特に６年生ではメモを取りながら話を聞く指導や，家庭学習で予習にも取り組む習慣づくりをすることが必要であるといったことについても確認し合った。

・第２分科会（豊かな心の育成）

各学校で，生徒会や児童会，縦割り活動などを通じてあいさつ運動に意識して取り組んでおり，その成果が着実に表れてきている。ただ，小学校では地域でのあいさつが課題となっている。また「家族ミーティング」への取組により，家庭と連携した生活習慣の見直しが図られてきており，よい傾向がうかがえた。次年度も継続して取り組む。

・第３分科会（ふるさと・キャリア教育）

各学校で情報発信を意識して取り組んでおり，今後は，そのよさをお互いに可能なところから取り込んでいく。また，情報交換や「比内地区キャリア教育の実践」の一覧表からも，各校での取組状況を把握できたが，今後は，小・中が無理なく合同で活動できる場も模索していく。なおキャリアパスポート等の引継と活用についても確認できた。

③全体会（分科会報告，会場校校長あいさつ）

分科会後に全体会を行い，分科会報告を行うことで，全会員での共通理解を図った。

4　おわりに

今年度は，前年度までの成果と課題を基に，２回の研究会の持ち方や分科会構成について見直しを行い，１回目と２回目が連動した研究となるようにした。すなわち，「比内の子どもの生きる力を育成する」というねらいに向かい，会員全員がより主体的に共通実践事項に取り組むことができたことも大きな成果であった。今後は，実践項目を更に具体化したり，授業実践交流や情報交換をより充実させたりして，小・中や小・小，更には幼保・小の連携を強化し，次代を担う比内の子どもたちをの力をはぐくんでいきたい。

田 代 中 学 区

1　はじめに

田代中学区では，小・中連携の在り方を再構築し，「豊かな人間性をもち，自ら学び，自ら考えるたくましい児童生徒の育成」を目指し，９年間を見通した小・中の連携を推進してきた。保育園との連携も図り，「授業力向上と各校の学力向上を図る実践研究」「学校及び家庭・地域との具体的な連携の推進」「各校の諸課題につながる交流・協議の実施」を基本方針として取り組んできた。

2　今年度の取組

月　　日	実　践　内　容	月　　日	実　践　内　容
４月１２日	連携運営部会	１０月１２日	小・中合同クリーンアップ
５月３０日	第１回全体研修会（早口小）	１１月１９日	新入生交流集会（小６と中１）
６月～７月	自立プランの改訂委員会	１２月１３日	田代地区合同学校保健委員会
６月～２月	３校で授業交流	１２・１月	小・中絵画・書写作品巡回展示
７月１２日	小･中合同あいさつ運動	２月　５日	第２回全体研修会（田代中）
７月２３日	田代を学ぶ会	３月（未定）	田代中新入学児童学級編制会議

3　活動の実際

⑴　第１回全体研修会

早口小学校を会場に授業参観後，学習指導部会，生徒指導・学校保健部会，交流・特別部会の３つの分科会に分かれ，各校の取組や課題，今年度の連携の在り方について協議した。

①学習指導部会では，「学力向上を図る」という田代地区共通実践事項の検討と確認を行った。研究体制と家庭学習の取組，小･中の連携を意識した学習指導の在り方について情報交換を行い，３校の取組について共通理解を図った。

②生徒指導･学校保健部会では，「夢の実現に向けての自立プラン」の活用と小･中連携としての共通実践事項について確認を行った。

③交流・特別部会では，学校間の授業交流（授業参観や専門教科の訪問授業），小･中合同クリーンアップ，小･中作品（絵画，書写）交流，プルタブ･アルミ缶の共同回収を継続して実施していくための方策について協議した。

⑵　小･中合同クリーンアップの実施

昨年度は雨のため，予定していた合同活動はできなかったので，今回は２年ぶりの合同クリーンアップとなった。小学校区にわかれて行うことで，中学生はその小学校の卒業生としての自覚をもって臨むことができ，小学生は身近な先輩との交流が深まり，双方にとってよい活動となった。

【小・中学生の合同クリーンアップ】

4　おわりに

ふるさとに誇りをもち,夢の実現を目指したふるさと・キャリア教育が各校で実践されている。小･中の連携をさらに推進し，「次代を担う田代の子どもたち」がふるさと田代に誇りをもてるよう，地域･学校･保護者の連携の場を設定していきたい。

平成24年度の運営を振り返って

事務局　城南小学校

１　はじめに

大館市教育委員会が策定した第７次学力向上対策のもと，大館市教育研究会では，「確かな学力」を育て，「確かな授業力」を身に付けるために，授業研究の一層の充実と小・中連携の推進の２点を重点として運営してきた。

運営全般を通して感じたことは，各部会とも，熱心な世話人の部会運営のもと，積極的な研修が見られたことである。指導案検討会や交流授業の取組をもとに練り上げた質の高い授業や研究実践が提供され，会員一人一人の「子どもたちの力を高めたい」という思いが充実した研修の場を作っていた。

２　運営の概要

⑴　第１回総合研究会

・部員名簿は，例年のように教育研究所の協力により作成することができた。
・運営委員の協力により，教科外部会，全体会，教科部会とも支障なく進められた。
・各教科部会・教科外部会は，授業会場が輪番制となっているため円滑に進み，その分，テーマ検討や授業等交流，第２回総合研究会の持ち方等について時間をかけて協議することができた。

⑵　第２回総合研究会

・今年度も５日間の日程で小学校，中学校，教科外・小・中合同の各部会を開催した。
・各部会の内容は，授業研究会を中心に，持ち寄り資料によるテーマ研究，情報交換，実技研修，実演，講演会など，様々な研修が行われた。
・授業研究会では，ワークショップ形式の協議形態を取り入れた部会が多く，成果が報告されている。

⑶　授業等交流

・情報発信としては，各校の研究授業の一覧を事務局から，またその詳しい内容については各校から市内各小・中学校に配信した。
・授業等交流には各校の学校事情により希望通り参加できているわけではないが，よい研修の機会であると捉え，積極的に参加している先生が多い。

⑷　部会運営

・各部会とも，世話人の先生方の尽力により，充実した研修が行われた。
・３人の世話人の役割分担が明確にされていて，スムーズに運営された。

⑸　研究紀要

・２回の紀要編集委員会を開催し，内容の吟味・原稿依頼・校正作業を行い，第３７号となる研究紀要「究」を発行できた。
・原稿の集約が滞らないように，原稿のお願いの文書を送付する時期に配慮した。

⑹　小・中連携の推進

・学区の児童生徒の実態を踏まえた内容の研修会が開催され，目指す児童生徒の姿を確認し，それに向けた実践が話し合われた。
・学区の実情に合わせて，児童生徒や教師の積極的な交流，共通実践の取り組みが進められた。

３　来年度に向けて

⑴　今年度同様，授業会場校の輪番制の継続によりスムーズな部会運営を進めたい。なお，平成２６年度からの小学校数の減少に伴い，新しいローテーションを早い時期に提示する。

⑵　第２回総合研究会だけでなく，交流授業や指導案検討会など，研修の機会が増えるよう促していきたい。

⑶　各部会の充実した研修のために，前年度の引き継ぎを効率的，効果的に行う手立てについて検討し進める。

平成24年度 大館市教育研究会運営委員

	・会　　長	河田　和徳（城南小学校校長）
	・副 会 長	三浦　孝志（東館小学校校長）
運営委員	・教 頭 会	松岡　浩幸（釈迦内小学校）　根本　光泰（田代中学校）
	・教育研究所	山本多鶴子（所長補佐）　一関　光（指導主事）
	・小 学 校	津幡　治久（桂　城）　安田　英子（城　南）　松沢　朗子（城　西）
		佐藤　衛（有　浦）　松井　桂一（釈迦内）　沼田眞紀子（長　木）
		花田　千鶴（雪　沢）　芳賀　珠美（川　口）　伊藤　薫（上川沿）
		高橋　令人（成　章）　藤嶋　俊英（花　岡）　仲谷美奈子（矢　立）
		和泉　克子（　南　）　武田　和彦（扇　田）　松尾　牧（西　館）
		三澤　章子（東　館）　田中　芳明（山　瀬）　伊藤　康子（早　口）
	・中 学 校	佐々木　司（第　一）　中嶋舞衣子（第　二）　田山　律子（下川沿）
		荒川　悟（　南　）　武内　充英（成　章）　羽澤律加子（花　岡）
		佐藤　紀博（矢　立）　小林　浩之（　東　）　田村　環（比　内）
		古家　葉子（田　代）
事務局（城南小）		・事務局長　小林久美子
		・事務局員　伊藤　奈緒　福司登志子　安田　英子

小・中連携委員　　◎は連携委員長

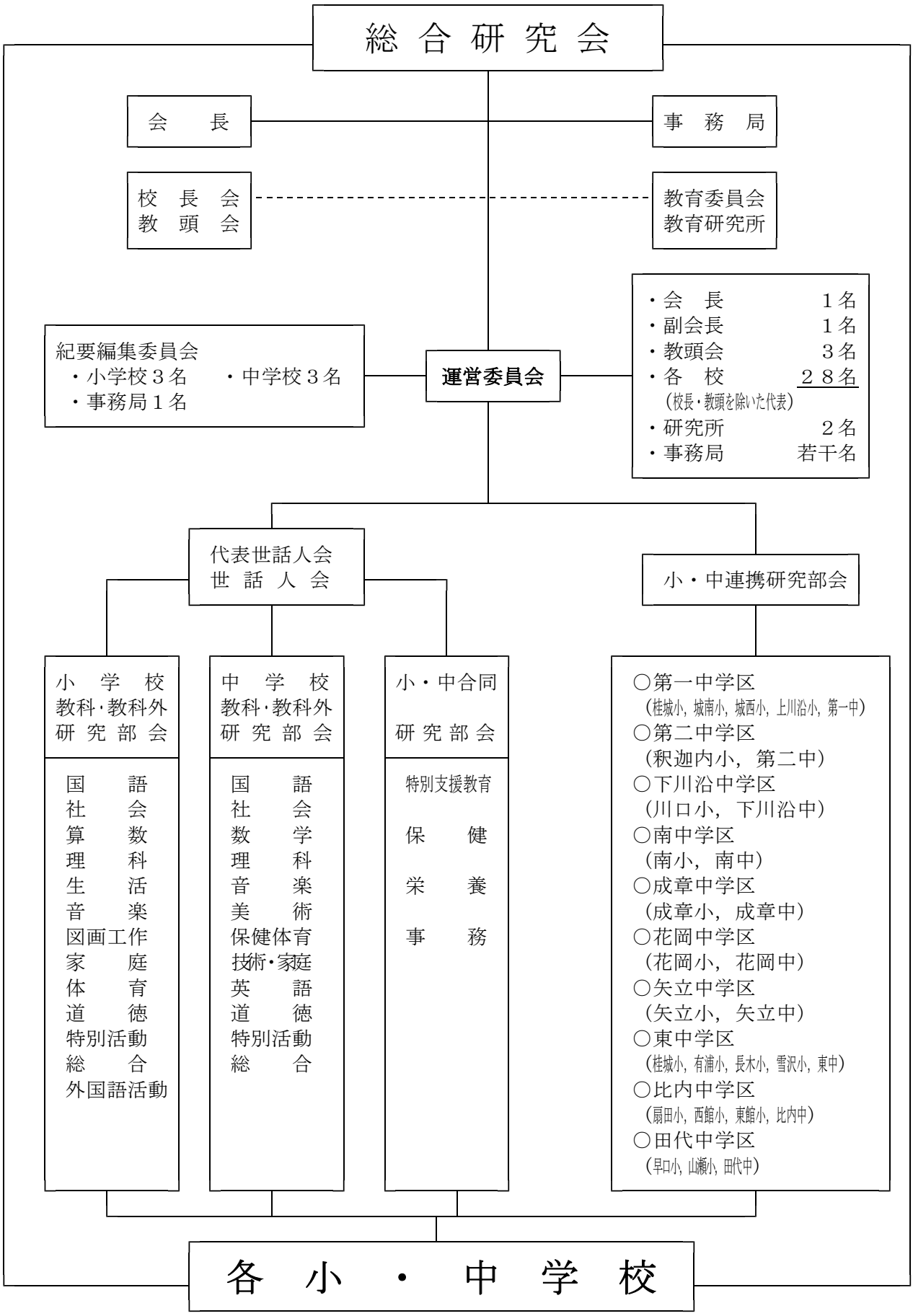
学区	学校名	連携委員氏名		
第一中学区	第一中	渡部　鋼喜（教頭）	駒木　聖子	◎佐々木　司
	桂城小	嶋森　正史（教頭）	中井みどり	成田　朗子
	城南小	小林久美子（教頭）	福司登志子	安田　英子
	城西小	木下　隆（教頭）	近藤　智弥	松沢　朗子
	上川沿小	兎澤無二夫（教頭）	伊藤　薫	石垣真紀子
第二中学区	第二中	田中　真愛（教頭）	◎成田美智子	中嶋舞衣子
	釈迦内小	松岡　浩幸（教頭）	松井　桂一	藤嶋　孝子
下川沿中学区	下川沿中	櫻庭　潤（教頭）	岸　博之	田山　律子
	川口小	◎佐藤　周子（教頭）	三浦　秀人	芳賀　珠美
南中学区	南中	小笠原茂人（校長）	金澤　裕子（教頭）	石山　真
	南小	今泉　静子（校長）	安原　幸男（教頭）	◎和泉　克子
成章中学区	成章中	安部　芳範	武内　充英	高橋　亮
	成章小	◎高橋　令人	嶋田　賢一	荒川富紀子
花岡中学区	花岡中	◎三浦　薫	菊地　富子	羽澤律加子
	花岡小	佐藤　香子	甲森　匡一	藤嶋　俊英
矢立中学区	矢立中	木立　亨（校長）	◎小澤　啓司（教頭）	佐藤久美子
	矢立小	三浦　玲子（校長）	中村　修（教頭）	仲谷美奈子
東中学区	東中	◎神原　亮	小林　浩之	田村　新一
	有浦小	小林裕実子（教頭）	佐藤　衛	川﨑　郁子
	長木小	戸田　孝彦（教頭）	沼田眞紀子	平山　雄也
	桂城小	津幡　治久	福司　一夫	杉渕　茂和
	雪沢小	大丸ふさ子（教頭）	田中　悦子	菊池　貴昭
比内中学区	比内中	松沢　隆宏（教頭）	加藤　長幸	田村　環
	扇田小	柴田　清香（教頭）	武田　和彦	中村　美生
	西館小	◎柏崎　勇人（教頭）	松下　健	松尾　牧
	東館小	乳井　昭久（教頭）	河田　洋子	三澤　章子
田代中学区	田代中	根本　光泰（教頭）	滝内　秋子	古家　葉子
	早口小	大山　透	鈴木　岳行	◎伊藤　康子
	山瀬小	田村　徳秋（教頭）	平澤　正明	田中　芳明

平成24年度　大館市教育研究会世話人一覧

○代表世話人　　・紀要執筆者

部会名	小学校	中学校	
国語	㊫武石　陽子（城　西）・金澤　幹子(有　浦) ㊥三浦　秀人（川　口）・野呂　郁子(上川沿) ㊤三澤　章子（東　館）・伊藤　薫子(上川沿)	中村　美生(扇　田) 小山由美子(早　口) 嶋田　賢一(成　章)	○武田　亜子(　南　) ・小坂亜紀子(田　代) 千葉　彦希(　東　)
社会	○山城　貴子（扇　田）・田山　靖子(城　西) 椿田　利之（城　南）	○小熊　大樹(比　内)　・荒川　悟(　南　) 畠山久美子（下川沿）	
算数 数学	㊫中井みどり(桂　城)　・安田　英子(城　南) ㊥佐藤　俊三(釈迦内)・櫻田　亮子(西　館) ㊤川﨑　裕(上川沿)　・山本　起嗣(東　館)	小松　文子(上川沿) 小松　信市(長　木) 納谷　宣直(川　口)	○田山　律子(下川沿) ・佐々木　壮(矢　立) 阿部　寛(比　内)
理科	○佐藤　民志(　南　)　・保坂　久(山　瀬) 松坂　勇逸(矢　立)	○岸　博之（下川沿）・佐藤由右子(二　中) 菊地　富子(花　岡)	
生活	○髙橋美和子(山　瀬)　・大原　修(　南　) 兜森　保範(城　南)		
音楽	○田中　悦子(雪　沢)　・津谷美穂子(早　口) 武内　卓子(長　木)	○古家　葉子(田　代)　・加藤翔太郎(花　岡) 日景美智子(成　章)	
図画工作 美術	○高橋　令人(成　章)　・貝森彩由子(花　岡) 河田　洋子(東　館)	○佐々木由美（比　内）・佐々木亜希子(一　中) 成田　麻衣（田　代）	
家庭 技術・家庭	○佐藤　郁子(有　浦)　・松尾　牧(西　館) 藪田　典子(城　西)	○湊　志保子（比　内）・安部　寛(　東　) 熊澤理津子（一　中）	
体育 保健体育	○長谷部雅子(城　南)　・間嶋　祐樹(扇　田) 成田　朗子(桂　城)	○菅原　洋一(　南　)　・野呂　謙一(田　代) 鈴木　竜也(　東　)	
英語		○鳥潟七緒子(田　代)　・野呂　裕子(　東　) 本多　牧子(下川沿)	
道徳	○畠山　泰子(早　口)　・花田　千鶴(雪　沢) 芳賀　珠美(川　口)	○佐藤由右子(二　中)　・松本　道男(一　中) 佐々木　壮(矢　立)	
特別活動	○望月まゆみ(長　木)　・細田　裕子(釈迦内) 田中　悦子(雪　沢)	○水澤真珠子(　南　)　・須合　康(一　中) 菊地　裕之(花　岡)	
総合	○松下　健(西　館)　・貝森　逸子(有　浦) 高橋　弘樹(釈迦内)	○田村　環(比　内)　・高清水三奈子(二　中) 田中　覚（一　中）	
外国語活動	○冨樫　章雄(矢　立)　・高橋理恵子(扇　田) 米澤　貴子(城　南)		
特別支援教育	○佐藤　和夫(成章小)　・吉成　崇子(矢立中)　菅原　洋一(南　中)		
保健	○小林美恵子（東　中）・菊地亜紀子(成章小)　畠山多鶴子(上川沿)		
事務	○飛田　正人(上川沿)　・北村　和則(有　浦)　菅原　一(花岡中)		
栄養	○津谷　早苗(山　瀬)　・久慈　直子(釈迦内)　阿部　恭子(一　中)		

平成24年度 大館市教育研究会　運営機構図



大館市教育研究会　研究紀要「究」３７号

＝　平成24年度版　＝

平成25年３月発行

編　集	大館市教育研究会	研究紀要編集委員会	
	会　　長	河田　和徳	（城南小学校校長）
	副　会　長	三浦　孝志	（東館小学校校長）
	編集委員長	佐々木　司	（第一中学校教諭）
	編 集 委 員	松沢　朗子	（城西小学校教諭）
	編 集 委 員	松井　桂一	（釈迦内小学校教諭）
	編 集 委 員	高橋　令人	（成章小学校教諭）
	編 集 委 員	羽澤律加子	（花岡中学校教諭）
	編 集 委 員	佐藤　紀博	（矢立中学校教諭）
	編 集 委 員	福司登志子	（城南小学校教諭）
発　行	大館市教育研究会		
印　刷	㈱成文社		